

普通のデュエリスト

白い人

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

九十九遊馬とアストラル達がバリアンとの戦いが本格的になってきた時、一人の決闘者と知り合う事になる。

それはシャークも認める決闘者で……。

※アニメ【遊戯王ZEXAL II】の話。男オリ主物で多分、中編ぐらい。

オリジナルカードはありませんが、非OCGのアニメ漫画のカードがあります。

OCG化しているカードもアニメ効果を優先しているものがあります。

目次

1	V S 花添愛華	1
1.	5 3人娘の1日	37
2	V S 青山遊里	50
2.	5 遊里と危険なカード	90
3	V S 天城カイト	102
3.	5 将来の進路	149
4	V S 神代凌牙	158
4.	5 激突する世界	207
5	V S ギラグ ドルベ ベクター	218
5.	5 最後の出会い	262
6	V S 九十九遊馬&アストラル	

277

それは未来に繋がる話
それは未来へ繋がる剣
嘘予告 新たな戦い

387 375 366

1 VS 花添愛華

「チツ、油断しやがったな璃緒の奴」

神代凌牙は思わず舌打ちとあわせて呟いた。

ここから少し離れた場所で自身の妹である神代璃緒と一つ上の先輩であり華道部長である花添愛華とのデュエルが行われている。いや、行われていた、というのが正しいか。

花添愛華はバリアンによって洗脳され、バリアンの力である《RUM》バリアンズ・フォースの力で強力なカオスモンスター・エクシーズを特殊召喚し、バーンダメージで璃緒を追い詰めていった。

璃緒はモンスター・エクシーズである《零鳥獣シルフィーネ》で、相手のモンスター・エクシーズとフィールド魔法の効果を無効化にし、更に攻撃力を下げて弱体化に成功していた。

だがそこまでである。

確かに相手フィールド上に表側表示で存在するカードの効果を無効化にして、相手モンスターの弱体化に成功してシルフィーネは相手のモンスターの攻撃力を上回った。

このまま攻撃に成功すれば確かに勝利は璃緒の物であつただろう。

しかしセットされたカードまでは無効化に出来ない。そのカードこそが璃緒を敗北に誘つたカードであつた。

罨カード《強制脱出装置》。

その効果はフィールド上に存在するモンスターを1体、手札に戻すというシンプルな効果だ。

だがそれは確実に璃緒にとどめを刺す効果であつたのだが。

通常ならばこの効果の対象になつたカードは手札に戻る。そして結局、次のターンにまた使われてしまう為、採用率は決して高くはない。

それが一般的な見解である。

しかしその対象がモンスター・エクシーズならば話は別である。

手札ではなくエクストラデッキに戻るモンスター・エクシーズ相手に効果を発動させればそれは実質、除去と変わらないのだ。

そしてその効果を止める術を璃緒は持っていないかつた。

チラッと見た感じでは、璃緒の最後の1枚は攻撃力を強化するカードだろう。

モンスターを失つてしまえば、意味をなさないカードだ。

その効果により《零鳥獣シルフィーネ》はエクストラデッキへと戻り、璃緒のフィー

ルドにモンスターは0。

結局、次のターンに攻撃を受け敗北してしまったのだ。

(そういえば璃緒の奴にあいつの話をしていなかったか)

その結末を見届けた凌牙はふと思いついていた。

凌牙には花添愛華は強い決闘者という事が分かっていたのだ。

もし璃緒が知っていればどうにかなったか？と聞かれれば分からないと答えるしかないのだが。

何せ彼女の師匠というべき存在が強すぎるからだ。

かつて水の貴公子などと持て囃された自分すらも奴に勝った事は片手で事足りるレベルだ。逆に敗北数は両手では足りない程だが。

つまるところ、その弟子とも言うべき花添愛華の実力もまた推して知るべし、と言った所か。

そしてバリアンによって洗脳されてしまった状態でもその実力は非常に高いのは目の前の光景がそれを示していた。

「仕方がねえな、俺が出るか」

璃緒が負けてしまったが、バリアンなんぞに妹を好き勝手にさせる訳にはいかない。

傍で見ている筈の九十九遊馬とアストラルに任せてもいいが、あの二人ではあいつの

事を知らない可能性がある。

勿論、それを踏まえても2人が花添愛華に負けるとは思っていない。

では何故、凌牙自身が出ようと思ったか。

簡単な話だ。

妹の仇は兄である自分取る。実にシンプルな理由である。

デュエルに負けて倒れた璃緒を心配して介抱してくれている遊馬達に声をかけようと思った、その瞬間。

まさかの乱入者が現れてしまった。

「……マジかよ」

噂のあいつ。

凌牙にとって超えるべき壁であり、愛華の師匠である男であった。

「よう」

「な、なっ……!?!」

花添愛華は驚愕一色に染まっていた。

バリアン世界の為、まずはナンバーズ使いである神代凌牙対策にと戦った凌牙の妹で

ある神代璃緒を倒したのはいい。

その勢いによって、神代璃緒を倒された事に怒りを覚えている九十九遊馬も倒そうと思つたその矢先だ。

彼がその場に現れてしまったのだ。

「ど、どうしてあなたが……？」

「お前が奇妙な事をやってるって聞いてな、思わず来たんだが正解だったようだな」

愛華の幼馴染にしてデュエルの師匠とも言うべき存在、青山遊里が現れてしまったのだ。

しまったとか見つかつてしまった、という感情が出てきてしまう。

バリアンに洗脳された今、そんな感情は二の次になるのだが愛華の心の奥底にある感情は誤魔化す事が出来ないでいた。

恐怖。

このデュエルモンスターズを始めて数年経つが、未だに遊里に勝てた事がないのだ。勿論、愛華とて諦めた事は一度たりともない。

何度も遊里のデッキや戦術を研究した、何度だつて己のデッキを改良して挑んでいった。

だが勝てない。追い詰めた事は何度かある。しかしそれでも勝てないのだ。

その勝てないという恐怖が愛華の心を縛っていく。

しかしバリアンによる洗脳は優秀であった。

今なら勝てる、と。バリアンの力を手に入れた今なら勝ると恐怖に凍りつきそうになった愛華の心をゆっくりと溶かしていったのだ。

怯えがあつた愛華の目に力が戻ってくる。

そうだと、その通りだと心が訴えていく。

バリアン世界の為に戦う自分に遊里が敵対するのならば、勝つて叩きのめせばいいのだ。

偉大なるバリアンの力を入れた今ならばそれが可能なのだ。

神代璃緒を倒した事で手に入れた自信もあわせて己に力を与えてくれる。

「さて、と。後輩に阿呆な事をやってる奴にお仕置きしないとな」

「ふん！偉大なるバリアン世界の遂行なる目的を邪魔をするというなら遊里とは言え赦はしませんわ！」

「奇妙なアクセサリーをつけてるだけでも変だつていうのに何を可笑しな事を言い出すんだか」

やれやれだぜ、と言わんばかりに頭を振る遊里を見て怒りが湧き起こってくる。

この野郎、舐めやがって！と言った感じだろうか。

愛華はデュエルディスクを構えると、遊里に宣戦布告するように叫んだ。

「デュエルですわ！今日こそ貴方を叩き潰してあげます！」

「やれるもんならやってみな」

そんな好戦的な愛華を見て遊里もまたデュエルディスクを構える。

さあ、デュエルの時間だ。

しかしそれに待ったをかけようとする存在がいた。

先程まで璃緒を介抱していた九十九遊馬である。

愛華はバリアンによって洗脳されているのだ。

「ま、待つてくれ！あいつは駄目だ！バリアンに洗脳されてるんだ！」

「バリアンだがなんだか知らないが、弟子の不始末は師匠の役目って奴だ」

「えっ、弟子!？」

「後輩、お前はそこの女の子の介抱してな。すぐに終わらせてやるよ」

自信満々の遊里にたじろぐ遊馬。

だがやはり駄目だ。バリアンに洗脳された相手とデュエルしたらどうなるか分からないのだ。

倒れている璃緒の事も心配だがこれ以上、犠牲者を出す訳にはいかない。

無理にでも遊里を下がらせようとする遊馬だが、それを止めたのはよく知った存在で

あった。

「やめとけ遊馬」

「シャ、シャーク!？」

『どうして君が?』

突然、現れたシャークこと神代凌牙の存在に驚く遊馬。

遊馬の傍にいるアストラルもまた二重の意味で驚いた表情を見せる。

凌牙がいつここに来たのか、そしてどうして止めるのか分からないからだ。

何故ならば凌牙もまたバリアンについての知識を保有している。

だと言うのに一般人である遊馬の行動を黙認しようとしているのか。

言いたい事は分かっているとばかりに頷く凌牙。

そしてその上で凌牙は断言した。

「問題ねえ。あいつが負ける筈がない」

問題ないと、はつきりと凌牙が言ったのだ。

それに対して遊馬とアストラルは驚きの声をあげる。

あのシャークがここまで断言するとは。

この人は何者なんだろうか。二人は疑問に思うしかない。

そこまで言うのなら、と仕方なく静観する事にした二人。

後ろが納得した事により遊里がデュエル体勢へと移る。

遊里と愛華。二人のデュエルが始まろうとしていた。

不敵な笑みを浮かべる遊里。絶対に倒すと戦意を高める愛華。

『デュエル！』

デュエルディスクとDゲイザーを装備した二人。

最初に動いたのは愛華であった。

流れるような美しい動作でカードをドローする。

「わたくしの先行！ドロー！」

愛華はドローしたカードを見るとニヤリと笑う。

「わたくしは《ローンファイア・ブロッサム》を攻撃表示で召喚！」

地面から湧き出るように現れたのは、植物の蕾のようなモンスターだ。

しかし攻撃力はたった500。そんなモンスターをわざわざ攻撃表示で出すという

事は何かあるに違いない。

遊馬とアストラルは自分がやっている訳ではないが思わず身構えてしまう。

「そして《ローンファイア・ブロッサム》の効果を発動！フィールド上の植物族モンスターを1体リリースする事でデッキより植物族モンスター1体を特殊召喚つかまつる
！」

ローンファイア・ブロッサムがウネウネと動いていたが、その動きを止めると同時にその閉じた蕾が開花していく。

そして咲き誇った花の中心から一枚のカードが飛び出てくる。

「わたくしは《ローンファイア・ブロッサム》をリリース！ デッキより現れなさい、《椿姫テイタニアル》！」

巨大な花の中心部に美しき女性の姿。

その植物と一体となったモンスターはアルラウネを思わせる姿だ。

しかし遊馬達はその美しいモンスターに見とれている場合ではなかった。

「で、デッキから攻撃力2800のモンスターをいきなり!？」

『なんとという効果だ。一瞬で最上級モンスターを特殊召喚するとは……!』

遊馬とアストラルが驚愕の表情に染まる。

エクシーズ召喚ならいざ知らず、いきなり最上級モンスターをフィールド上に出してくるとは。

しかし驚いているのは二人だけである。

凌牙は平静を保っているし、対戦相手である遊里に焦りなどの表情が出る様子は見られない。

「で、それだけか?」

「その済ました顔をぶっ飛ばしてあげますわ……！わたくしはカードを1枚セットしてターンエンド！」

「それじゃ俺のターンのな。俺はカードを1枚セットしてから、『手札抹殺』を発動するぜ」

「互いのプレイヤーは手札を捨てて、その分だけドロウするカードか」

「わたくしは4枚捨てて、4枚ドロウさせて頂きますわ」

「俺も4枚だ」

『《手札抹殺》。手札入れ替えのカードだが、それは相手も同じ。どうするつもりだ』

《手札抹殺》は手札を全て入れ替える強力な魔法カードだ。

しかしそれは相手にも効果を及ぼす。

相手の切り札を墓地に送ったりする事も出来るが、手札を1枚失うというリスクもある。

手札1枚という大きなアドバンテージを失って何をしようというのか。

「俺はここでセットした魔法カードを発動。《儀式の準備》。お前は効果を知ってるよな」

「くつ、そのカードはデッキからレベル7以下の儀式モンスターを手札に加える効果

……更に墓地に存在する儀式魔法を1枚回収できる……！」

「その通り。俺はデツキからレベル7の《救世の美神ノースウエムコ》を手札に加え、更に《手札抹殺》で墓地に送った《高等儀式術》を回収するぜ」

儀式の祭壇で準備をしていた者達がデツキから儀式モンスターと墓地から儀式魔法を取り出し、遊里の手札に送り届ける。

あつという間に遊里の手札は4枚から5枚へと増加されていた。フィールドのカードとあわせても先程のアド損を瞬時に回復している。

『なるほど。手札抹殺で墓地に送ったカードも回収できるのか』

「これで《手札抹殺》で失った損失も補える」

「すげえぜ！」

遊馬達が沸き立ち、逆に愛華は忌々しげに遊里を睨みつける。

だが先程と変わらず遊里は特に表情を変える様子はない。

しかしここで遊馬が一つの疑問を覚えた。

「でも儀式つてなんだ？」

遊馬がそんな言葉を呟いたのは聞きなれない言葉だったからだ。

それを説明してくれたのは隣にいる凌牙であった。

「儀式は専用の魔法カードを利用して、儀式モンスターを特殊召喚する奴だ。正直、廃れて誰も使わないけどな」

凌牙の言葉に嘘はない。

現在の主流がエクシーズ召喚というものもあるが、儀式ははつきり言つて割りにあわないのだ。

儀式モンスターは強いと言えば強いのだが、正直な話、モンスター・エクシーズの方が強力だし召喚方法もそれ程、難しくはない。

しかし儀式は専用のモンスターを手札に加え、専用の魔法を使い、そのレベルに見合ったモンスターをリリースしなければならぬのだ。

手札の消費量も半端なく多いが、専用のカードを手札に揃えるのに一苦労だ。

つまり使う人間はほんの一握りな訳だが。

遊里はまさにその一握りの人間という事になる。

「そして俺は今回収したばかりの《高等儀式術》を発動！本来、儀式魔法は手札かフィールド上からモンスターをリリースする必要があるが、こいつならば関係ない」

先程の祭壇が再び現れると同時に、祭壇の中央に強力な光が発生する。

その光に飛び込んでいくのは、手札やフィールド上のモンスター達ではなくデッキのモンスターであった。

「こいつはデッキからモンスターを墓地に送つて儀式のコストを満たす事が出来る。ただし送れるのは通常モンスターだけだな」

儀式モンスターの弱点である手札消費を押さえられる効果とは。

なるほど、これがあれば儀式モンスターも十分に使えると言える。

「俺はデッキからレベル4の《デュナミス・ヴァルキリア》と《聖なる鎖》を墓地に送る！俺が呼び出すのはこいつ、レベル6！《竜姫神サフィラ》！」

勇敢なる光の天使と聖なる力がこめられた鎖が光と共に昇華されていく。

そして強烈な光と共に現れたのは人型の美しき竜姫。

それが遊里のフィールド上に現れたのだ。

しかし。

「だけどサフィラの攻撃力は2500。テイタニアルの2800には届かねえ」

『何かあれをどうにかする効果を持っているのか……？』

すると遊里が1枚のカードを差し出す。

「速攻魔法、《禁じられた聖槍》を発動！対象は勿論、テイタニアルだ」

「《禁じられた聖槍》は対象としたモンスターを魔法・罠の効果を受け付けなくする効果を持つ。しかし攻撃力が800下がるデメリットがある」

「そうか！これならテイタニアルを倒せる！」

「テイタニアルにはフィールド上のカードが効果の対象になった時に植物族のモンスターを1体リリースすれば無効化にできる。で、使うかい？」

「くっ、使いませんわ!」

リリースできるモンスターがティタニアルしかない以上、リリースすれば壁モンスターがいなくなってしまう。

無効化したくても出来ないのだ。

ティタニアルの体に聖なる槍が突き刺さる。

すると魔法や畏への耐性はあるも攻撃力は下がってしまった。

「サファイラでティタニアルに攻撃!」

「くうっ!」

その翼の一撃でティタニアルは一瞬にして破壊される。

ライフはこれで3500に減る。

「俺はカードを1枚セットし、エンドフェイズに移行。そしてこの時、《竜姫神サファイラ》の効果発動!」

「このタイムミングで!?!」

「こいつが儀式召喚されたエンドフェイズ、3つある効果の内、1つを使う事が出来る。俺は第1の効果、カードを2枚ドロウし、その後手札を1枚捨てる効果を選択する!」

サファイラの翼から放たれた波動の影響を受け、デッキから2枚のカードが飛び出してくる。

それを受け取った遊里は少し手札を吟味した後、手札の1枚を墓地へと送った。

「ですがわたくしもこのまま負けるつもりはありません！罨カードを発動！《リビング
デットの呼び声》！これでテイタニアルを蘇らせませすわ！」

再び戦場に舞い戻る椿姫。

先程とは違い攻撃力を下げられた状態ではなく万全な状態でだ。

「すげえ……強力なモンスターの応酬だぜ……」

1ターン目から攻撃力2800のモンスターを繰り出した愛華。

それを真つ向から打ち破った遊里。

遊馬の目から見て二人は強いデュエリストだ。

しかし愛華にはまだバリアンのカードがある上に先程、倒したばかりのテイタニアルも蘇ってしまった。

勝てるのか、そう思ってしまうのも仕方ない事だろう。

が、やはり遊里の表情に焦りはない。

「このままバトル！テイタニアル！サファイラへ攻撃！」

「罨発動。《サンダー・ブレイク》。手札を1枚捨てて、テイタニアルを破壊するぜ」

「しまった……！」

逆襲の一撃だと言わんばかりにサファイラへ攻撃しようとするテイタニアルが上空か

ら降り注いできた雷によって破壊される。

なんともあつけない最後である。

「モンスターが出せるなら出しておくべきだったな」

「そのようですわ……。モンスターをセット。カードを2枚セットしてエンドですわ」

「ならエンドフェイズ時にサフィラの効果を使う」

「えっ、サフィラって儀式召喚に成功した時だけなんじゃないのか？」

遊馬の疑問。

アストラル、そして凌牙も抱いた事だ。

そしてその質問に答えてくれたのは遊里であった。

「ああ、こいつは手札・デッキから光属性のモンスターが墓地に送れた時にも発動できるんだ。愛華は知ってるよな」

「……ええ」

「さつき《サンダー・ブレイク》で捨てたのは《救世の美神ノースウエムコ》。よって俺は再び2枚ドロローして1枚捨てる」

先程と同じようにサフィラの翼から放たれた波動がデッキからカードを2枚を手札へ誘っていく。

そして遊里は再び、さつきと同じように手札からカードを1枚墓地へと送る。

「俺のターン！《アレキサンドライドラゴン》を召喚！」

「罨発動！《奈落の落とし穴》！召喚、特殊召喚されたモンスターが攻撃力1500以上の時、そのモンスターを破壊して除外いたします。攻撃力2000の《アレキサンドライドラゴン》は破壊され、ゲームから除外されますわ！」

「ああつ！せつかくのモンスターが！」

「いや、分かってて出しただけだろうなあれは」

せつかくの攻撃力2000のモンスター。出す事に成功さえしていれば、ダイレクトアタックで勝利する事が出来ただろう。

しかし悲しいかな。美しい鱗をもった竜は何の役割も果たす事なく奈落の底へと落ちていってしまった。

だがそう考えていたのは遊馬、そしてアストラルだけだった。

遊馬の表情からすると、凌牙の言う通り破壊されるのは想定済みと言った様子なのだろう。

「サファイラでセットモンスターを攻撃！」

「セットモンスターは《ボタニティ・ガール》ですわ。フィールド上から墓地に送られた時、デッキから植物族モンスターを手札に加えますわ。わたくしが加えるのは《宇宙花》！」

『あれは先程のデュエルで使ったモンスター……』

「とすると……」

『ああ。次のターン、彼女のモンスター・エクシーズが出てくる可能性が高い』

本来の愛華の切り札はティタニアルではなくモンスター・エクシーズだと見ている。

状況はまだ遊里に傾いているが、あれを出されれば一気に戦局が変わる可能性が高い。

「俺はこのままターンを終える」

「ならわたくしのターン！」

「さあ、懺悔の時間ですわ！わたくしは《死者蘇生》を発動！墓地に眠る《ローンファ・ブロッサム》を特殊召喚！そして効果を発動しますわ！」

墓地に眠りし、死者を蘇らせる呪文が炎の蕾を蘇らせる。

そして再び、花が咲き誇る時、デッキから新たな植物族モンスターが現れる。

「わたくしが出すのは《火銃花》！そして《砲戦花》を通常召喚！」

その名の通り花と銃が交じり合ったモンスターが2体、愛華のフィールド上に現れる。

璃緒とのデュエルと同じ流れ。

となれば次に出すのは。

「そして自分フィールド上に2体以上の植物族モンスターがいる場合、同じ植物族の《宇宙花》を手札から特殊召喚できまする！」

『これは先程と同じ……』

「となれば……！」

「レベル3のモンスターが3体……来るか」

「わたくしはレベル3の《火銃花》、《砲戦花》、《宇宙花》でオーバーレイ！」

愛華のモンスター達が光を放つと同時に渦に飲み込まれていく。

オーバーレイ・ネットワークが形成されていく輝きだ。

「3体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築つかまつる！エクシーズ召喚！！」

3つの輝きが一つに交じり合い、大きな輝きを産む時、そこには新たなモンスター。

モンスター・エクシーズが誕生していた。

「咲き誇れ！《烈華砲艦ナデシコ》！」

「お前のフェイバリットカードか」

巨大な花の戦艦とも言うべきモンスターが上空にその姿を現していた。

先程、璃緒に多大なダメージを与えたモンスターだ。

これこそが花添愛華のエースモンスターなのだろう。

そしてこれがくるとなれば、あのカードも来るに違いない。

遊馬達から見て戦局は刻々と悪化しているように見えていた。ただ凌牙だけは驚きはあれども落ち着いた様子ではあるのだが。

「いきますわ！ナデシコのモンスター効果を発動！オーバーレイ・ユニットを一つ使い、相手の手札1枚につき300ポイントのダメージをお見舞い申し上げます！」

『彼の手札は3枚』

「となると、ダメージは……900か！」

「遊里……この一撃をくらいなさい！ビッグ花野雲！」

ナデシコの周りに浮遊していたオーバーレイ・ユニットが光の粒となって消えた次の瞬間、ナデシコの前部分、砲塔と思われる部分が二つ光り輝いていく。

そして閃光。収束した光が刃となって遊里に襲い掛かった。

遊里のライフが4000から3100へと減少する。

だが遊里に動きはない。逆にその程度か、と言わんばかりだ。

勿論、愛華はこの程度で終わらせるつもりは……ない！

「そしてナデシコでファイラを攻撃！」

「また攻撃力が低いモンスターで!？」

『しかし……』

「ああ、同じだろうよ」

攻撃力2100の《烈華砲艦ナデシコ》が攻撃力2500の《竜姫神サファイラ》へと攻撃を仕掛けていく。

それを見て遊馬が驚きの声を上げるが、アストラルと凌牙は落ち着いている。

これは先程の遊里と同じ事をしようとしているのだ。

「わたくしは罫カード《援軍》を発動つかまつる！これでナデシコの攻撃力は500ポイント上がります！」

「チッ……」

愛華のナデシコに援軍が到着する。

本来ならばその翼で逃げ切り反撃をする事が可能だった筈だが気がつけば援軍から放たれた矢の雨により翼を負傷。

翼が傷つき移動速度が低下していく。となればナデシコの射線から逃れる事は出来ない。

「いきなさい！ファイア、ですわ！」

次々にナデシコから砲撃が放たれる。

なんとかサファイラはその翼をはためかせて逃れようとするがもう遅い。

ナデシコから放たれた光の槍が次々にサファイラを撃ち抜いていった。

これで遊里のライフは残り3000だ。

「へえ、やるな。しかし懐かしいカードを使ってるな」

「貴方みたいに珍しいカードばかり持っている訳ではありませんので！わたくしはカードを1枚セットしてターンエンド」

これで愛華の手札は0。

だがその表情は随分と余裕が見て取れる。

「ならば俺のターン！ 《高等儀式術》を発動！デッキから《デュナミス・ヴァルキリア》を2体墓地に送って、《破滅の女神ルイン》を特殊召喚する！」

「また儀式召喚！」

再度、儀式によって呼び出されたのは銀色の長髪を携え、露出が多い服を着た女神であつた。

しかしその手に宿る力はその名の通り、破滅の光。

その力は……。

「ルインは戦闘で相手モンスターを破壊した場合、もう1度だけ続けて攻撃を行う事ができる。行け、ルイン！ ナデシコを攻撃！」

破滅の力を宿した槍を振り回し勢いをつけるとルインがナデシコへと攻撃しに飛び上がる。

が、それは罨であるのだが。

「かかりましたわ！罨カード！《魔法の筒》を発動！攻撃を無効化にし、その攻撃力分を相手に与えますわ！」

「なんだって!？」

『それでは……!』

「ああ、2300のダメージがあいつに入る」

ナデシコに攻撃しようとした瞬間に現れた巨大な筒がルインを飲み込んでいく。

気がつけばナデシコに向かって突撃していた筈のルインの矛先が遊里へと向いてしまっていた。

「ぐっ……!」

はじめて苦痛のようなうめき声と共に膝をつく遊里。

これで遊里の残りライフはたった700。吹けば一撃で倒されるようなレベルのライフだ。

そして何よりも《烈華砲艦ナデシコ》の効果が痛い。

とは言え遊里の手札は2枚。次のターンにナデシコの効果を発動されても600ダメージ。ぎりぎり残る量だ。

「このままターンエンド」

手札を減らせればもつとダメージ量を減らせるだろうが、セツトはなし。となると手札にあるのは魔法と罫はないのだろうか。

だが。

「だけでもし次、あれを引いたら……」

『ああ、彼の負けだ』

「いや、それはねえよ」

「シャーク？」

「言っただろう、あいつは負けねえって」

自信を持った凌牙の言葉が癪に障ったのか、凌牙を睨みつけてくる愛華。

「いいますわね。遊里を倒したら、次は貴方ですわ」

「構わないぜ。勝てたらな」

「ふん！すぐに終わらせてあげますわ」

「人をほつといて盛り上がらないでほしいなあ」

凌牙と愛華の舌戦の外に置かれた遊里が苦笑する。

「だがそこまで言われたんなら負ける訳にはいかないな」

「ああ、さっさと終わらせろよ」

「遊里まで……！わたくしのターン！ドロー！」

愛華の手札は0。

このドロローが勝敗を左右する運命のドロロー。

そしてそれを見た瞬間、愛華に歓喜の色が広がった。

それを見た遊馬とアストラルは直感的に悟った。あのカードは間違いなく……。

「まずナデシコの効果を発動！くらいなさい！ビッグ花野雲！」

「……っ」

ナデシコの砲撃が容赦なく遊里に降り注ぐ。

これで600ダメージを受けた遊里のライフはたった100。

本来ならばナデシコの攻撃力ではルインを破壊する事は出来ない。

だがあのカードの力ならば攻撃力を上回る事も、そもそも攻撃する必要がなくなる。

「そしてわたくしは手札より《RUMーバリアンズ・フォース》を発動つかまつる！」

「あれはっ！」

「……っ」

『やはりドロローしたと言うのか……！』

遊馬、凌牙、アストラル。

カオスの力に触れ、バリアンと戦った事がある3人はその力の強さに目を見開く。

「わたくしは《烈華砲艦ナデシコ》でオーバーレイ・ネットワークを再構築！カオスエク

シリーズ！チェンジ！」

その深遠の混沌に導かれ、ナデシコが新たな姿へと形を変えていく。

「再び現れなさい！偉大なるバリアンの力！咲き乱れよ！《CX 激烈華戦艦タオヤメ》
!!」

バリアンの力で生まれ変わった花の戦艦。

ナデシコを上回る大きさ、そして砲口の数。

これこそが花添愛華のカオスエクシリーズ。

そしてナデシコの力を受け継いだモンスター・エクシリーズである。

それは即ち。

「タオヤメのモンスター効果を発動！カオスオーバーレイユニットを1つ使い、フィールド上のカード1枚につき400のダメージを貴方に与えます！」

「フィールド上にカードは2枚……！」

「800のダメージ……！」

相手のライフに直接する効果を持っているという事だ。

そもそも遊里の残りライフはたった100。

タオヤメ以外に何もなくても即死するのだ。

「これで終わりですわ！」

光の槍を雨のように降らせたナデシコとは違い、その光を大きな塊に固めていく。そしていざ放たれん！とした瞬間。

「……あれ？」

「動きが止まった……？」

収束していた光が拡散し、タオヤメがその光を失っていく。

遊馬達も突然の事態に驚きの声を上げるが、愛華もまた混乱していた。

どうしてタオヤメの行動が止まったのか

「一体何が……っあれは!？」

「妖精?！」

遊馬の視線の先にはタオヤメの上で妖精がくるくると光の粉を振りかけている。

同じくそれに気づいた愛華が悲鳴のような声を上げる。

「《エフェクト・ヴェーラー》。手札からこいつを捨てる事で相手モンスター、1体の効果を無効化にする」

『なるほど。あれの効果でタオヤメの効果は無効化になったのか』

「つまりバーンダメージでの負けはなくなつた……けど」

「ああ。タオヤメの攻撃力は2400。ルインは2300でどっちみち攻撃されルインが破壊されたら負けだ」

その通りだ。

まだ愛華はバトルフェイズを行っていない。

つまりタオヤメの一撃が通れば、ジャストキル。遊里の敗北が決定する。

「ならばタオヤメの攻撃！」

タオヤメの無数にある砲塔が輝きをます。ナデシコとは比較にならない量だ。

ルインもこのタオヤネを倒すべく槍を構えるが攻撃力の差がはつきり出るデュエルモンスターズ。どう足掻いても待っているのは敗北だ。

そして何よりも遊里のフィールド上には攻撃力2300のルインしかない。

「これで………終わりです！」

「ああっ!？」

タオヤネから放たれる光の雨。

今度こそもう駄目か、と遊馬達が思うが視線を遊里に向ければ不敵な笑みを浮かべている。

そう思った時、遊里が残っていた最後の手札を掲げる。

何を?と誰もが思った。

「さて問題です。光属性のモンスターに攻撃する時に注意しなくてはならない事はなんでしょう?」

「…………え？」

「…………なるほどな」

まるで出来の悪い生徒に優しく教えるような笑みを浮かべながら聞く遊里。

遊馬とアストラルは首を傾げるが、愛華と凌牙はその答えに直ぐに気づく事が出来た。

二人とも遊里とデュエルすれば嫌でもそのカードが使われた事があるのだから。

愛華は顔を青ざめる。

攻撃をキャンセルしたいと思うも既に遅い。

「俺は手札から効果モンスター、《オネスト》を墓地に送って発動！戦闘を行う俺の光属性のモンスターは、戦闘を行う相手モンスターの攻撃力分アップする！」

『それでは！』

「ルインの攻撃力はタオヤメの2400ポイントアップする！」

「そして攻撃力4700になる。そして奴にこれをおいかける術はねえ」

「そ、そんな……」

「光属性のモンスターとバトルする時はオネストに気をつけろっていつも言ってるだろうに。ルイン！タオヤメを迎撃！」

オネストの力を得たルインがその背中に光の翼を得ると一瞬の飛翔で、タオヤメから

放たれた光を瞬時に回避する。

回避しただけではない。その手に持つ槍もオネストの力で強化されているのだ。ルインは上空からタオヤメの上へと飛翔。その槍でタオヤメの中心部を貫いた。

それと同時に愛華のライフが一気に2300も減り、一瞬で1200になる。

そして愛華の手札はなくなり、フィールド上にもカードが1枚もない。墓地にもこの状況を打開出来るカードは……ない。

「……ターンエンドですわ」

「ならば俺のターン！ 《破滅の女神ルイン》による攻撃！ こいつで終わりだー！」

「そ、そんな……！」

破滅の女神の一撃。

残りのライフもその槍で刈り取られる事になった。

遊里の勝利である。

「やったぜー！」

遊馬が歓喜の声を上げる。

それと同時に愛華の体が崩れ落ち、額についていたバリアンの紋章が消滅する。

洗脳が解けたのだ。

「まったく……おい起きろ愛華」

「ん……んん？」

倒れた愛華に近づいた遊里がペチペチと愛華の頬を叩いて無理やり再起動させる。

「……遊里？」

「よう」

「……」

すぐに起きた愛華が目をぱちぱちとする。

どうして目の前に遊里がいるのか、とか何をやってたのかと色々頭の中で考え込む。

だがすぐに思い出す。

自分が後輩に酷い迷惑をかけたという事を。

「とりあえず謝ろう、な」

「……はい」

力なく愛華が頷いた。

「先程は誠に申し訳ありませんでした」

遊里に連れられて愛華が頭を下げ遊馬と先程、目を覚ました璃緒に対して精一杯の謝

罪をする。

「すまん。俺からも謝らせてくれ」

「いい、いいって」

愛華にあわせるように頭を下げた遊里の姿を見て遊馬が慌てふためく。

そもその原因は愛華を操ったバリアンのせいなのだ。そしてそれを止めたのが遊里。

本来ならばこの二人が悪い所など何一つないのだ。

だが愛華と遊里はそういう訳にはいかないのだ。

「申し訳ありません、神代璃緒さん。貴女を我が部へ勧誘する為とは言え随分と酷い事を……」

愛華が再び深く頭を下げる。

バリアンの事を覚えていない彼女は、璃緒を部活に誘うという名目で動いていたという事になっていらいしい。

だとすれば随分と酷い勧誘方法だな、と思う。

しかし愛華も被害者なのだ。

「いえ、気にしないでください」

敗北の悔しさでいっぱいの気持ちを無理やり心の奥底に隠す。

笑顔で気にするな、と答える。

結局、その後は謝罪をしつかりと受け止めて解散となった。

随分と落ち込んだ様子の愛華は遊里に連れられて帰っていった。たぶん、彼がフオーしてってくれるだろう。

「しっかしあの二人強かったなあ」

全員での帰り道。遊馬は遊里と愛華の事を思い出して呟いた。

『そういえばシャークは彼等の事を知っていたようだな?』

「ああ。一部の人間には有名だからな、あいつの強さは」

あいつ、とは遊里の事だろう。

その口ぶりからするとデュエルした事があるのだろう。

「凌牙はあの人と戦った事があるの?」

「俺がここに入学してから結構な。因みに200回ぐらいやって勝ち星は4つぐらいだ」

「えっ!?!」

『君が、か!?!』

凌牙の答えに遊馬やアストラル、璃緒達が驚きの声をあげる。

少し後ろで歩いていた小鳥達もまた驚いた様子だ。

神代凌牙はかつて水の貴公子とまで謡われたデュエリストだ。その凌牙が僅か4回しか勝てていないとは。

「そんなに強いのか！くうー！俺もデュエルしたいぜ！」

「機会があればやれるだろうよ。用事がなければデュエルは断らない奴だからな」
燃え上がった様子をさせる遊馬に答える凌牙。

一方、それを横で聞いていた璃緒がぐつと拳を握る。
強くなろう、と誓いをたてる。

「……」

遊馬達が盛り上がっている中、凌牙は遊里の事を考えていた。

4回勝利した。

先程、そうは言ったが正直な話、本当の意味で勝った事はないと思っていた。

遊里は特定のデッキを使う訳ではない。色々なタイプのデッキを使っており、普段は試作品とかそんなデッキを使っているのだ。

今日使ったあの儀式デッキだっただけの一つだろう。

何せ本気になった遊里のデッキは……。

そして本気になったあいつに勝った事は凌牙はなかった。

何故か小鳥と一緒に来週特訓よ！と熱くなっている璃緒を見て思う。

強くならなければならない。

バリアン達から大切な妹や仲間達を守る為にも。

そしてあの遊里に勝つ為にも。

そう誓いながら凌牙達は歩いていった。

その途中で璃緒が猫を見て大騒ぎしていたのを見て、なんとも言えない気持ちになったのだが。

1. 5 3人娘の1日

「……」

「……」

「……」

非常に重い空気がその場には漂っていた。

もしここに当事者である3人以外の人間がいれば思わず顔を顰めていただろう。

ここにいるのは3人の少女達だ。

2人は先程、会計を済ませて受け取ったばかりのハンバーガーセットが乗ったトレイを持っており、1人は今まさにハンバーガーを食べようとしていた少女だ。

さて、ここで彼女達の正体を明かさなければならぬ。

トレイを持った2人は観月小鳥と神代璃緒。同じ中学校に通う生徒だ。

先日、バリアンからの刺客に襲われてしまった璃緒。そしてその刺客に敗北してしまったのだ。

幸い、璃緒に怪我などはなくバリアンの刺客も倒されたのだが、敗北してしまった璃緒本人は非常に憤っていた。

長い入院生活のせいでブランクはあるものの、格下だと思っていた相手に敗北してしまつたのだ。

確かに油断はあつたのかもしれないが、それでも自分が負けるとは思つていなかったのだ。

なのでその油断や驕りを払拭する為に鍛えなおそうと思つた訳である。

では何故、小鳥がいるのか？

小鳥は璃緒と違いデュエリストという訳ではない。

しかし幼馴染の遊馬の影響もあり本格的に始めようと思つていた。なので誰かに指導してもらおうと思つた訳だ。

そこで白羽の矢がたつたのが璃緒であつた。

遊馬に頼むのはなんとなく嫌だつたし、他の男性陣に頼むのはもつと躊躇われる。

となれば同性で何よりもデュエルに詳しい人という事で璃緒に頼む事になつた訳だ。

最初は断られるかと思つたのだが、教える相手がいれば自分の特訓にもなる、という事でこうして休日に2人でカードショップに出かけようという事になつたのだ。

その前にご飯を食べようという事になり、こうしてハンバーガーショップに入った訳だ。

そしてそこで見てしまった。

それこそが最後の一人、ちょうどハンバーガーを食べようとしていた少女。
花添愛華。

先日、璃緒が敗北してしまったバリアンに洗脳されてしまった少女である。

これだけならばまだ良かった。

だが思わず固まってしまったのは愛華の容姿にある。

先日会った愛華はまさに純和風。大和撫子を思わせる黒い長髪に和服を着た美少女なのだ。

それが私服であろうカジュアルな服に身を包んでハンバーガーを食べようとしていたのだ。

なんというかイメージが崩れる。

愛華も愛華で、先日粗相を働いてしまったのだ。

なんというか気まずかった。

それは小鳥と璃緒も同じであるのだが。

ならば別の席、とも思ったが既に店内の席は埋まりかけていた。

しまった、と小鳥は思う。

思わず固まってしまった隙をつかれた、とかそんな感じである。

「えっと……」

「……あ、相席でも構いませんことよ」

「そ、それじゃあ失礼します……」

同じテーブルに3人の美少女達が揃う。

なんとも絵になりそうな光景ではあるが、残念ながら雰囲気は重かった。

「せ、先日は申し訳ありま」

「えつと、も、もう構いませんから」

「そ、そうですよ！ 気にしてませんから！」

「……ありがとうございます」

またもや謝罪をしようとする愛華に待ったをかける。

既に何度も謝罪の言葉は受けたのだ。それに愛華は洗脳をかけられただけの被害者なのだから。

「そ、それじゃあ食べましょう！」

「そうですね」

「はい」

いただきます、と3人が一齐にそれぞれのハンバーガーを食べ始める。

最初は硬い雰囲気が漂っていたが、小鳥が必死のフォローを行ったおかげで少しずつ雰囲気が良くなりはじめた。

簡単な挨拶から、今食べているハンバーガーの味とか色々。

そして食べ終わる頃になって今日の休日の予定について話始めたのだ。

「ではお2人はカードショップへ？」

「はい。私がデュエルモンスターズをはじめるので」

「私は色々とカードを見て、小鳥さんのお手伝いを」

「愛華さんは？」

「わたくしも今日はカードショップに行こうと思いましたが」

なんでもあの後、遊里に改めてけちよんけちよんにされたとの事。

ぐぬぬ、という事でその対策のカードを購入しようと思いいカードショップに行くのだという。

「それなら一緒に行きませんか？」

「えっ、よろしいのですか？」

「璃緒さんもいいですよね」

「……ええ、構いませんわ」

確かに璃緒と愛華にはわだかまりがある。

でもだからと言ってずっと引きずりたいとは思っていないのだ。

そういう意味で、小鳥の気遣いは本当にありがたかった。

となれば積極的に交流をしようという事で、カードショップに行くまでに色々な話を
する事が出来た。

学校の事から服の事まで色々だ。

小鳥が驚いたのは和風少女である愛華が意外とカジュアルな服を好む事だろうか。
そんな話をしながらついたカードショップ。

ハートランドシティの中ではかなり大きい部類に入る店だ。

3階建てであり、最上階にはデュエルスペースまで完備してある。

まず最初に3人は小鳥の為にストラクチャーデッキを購入する事にした。

昨今、デュエルモンスターズのカードプールの増加は非常に大きい。

そして現■世界とは違いパックの収録カード数があまりにも多すぎるのだ。

つまるところ、何もカードを持っていない初心者がパックを購入してもまともなデッキは
組めないのだ。

かつて過去か別世界か、余り物のパックだけでデッキを組んだ男がいたがあれは異常
の一言である、普通そんな事、できやしないのだ。

話を戻そう。

普通にパックを買っただけでは初心者にはデッキを組めない。ならばどうするか。
そこで登場するのがストラクチャーデッキである。

現■世界と同じく初心者向けにある程度、テーマに沿ったカードが40枚入った品である。

つまり初心者は最初はこのストラクチャーデッキを買って少しずつカードを集めてデッキを組んでいくのだ。

3人で相談した結果、小鳥の好みにもあわせて天使族のストラクチャーデッキを購入する事にした。

追加として10パック程、購入。璃緒と愛華もまた10パック購入していた。

「うーん、使えそうなカードはこれかなあ……」

「あつ、いいカードですね」

「天使族ですしステータスも悪くありませんね」

わいわいと3人で購入したパックをあけて中身を見ていく。

愛華と璃緒は天使族のカードを見つけると小鳥に渡していく。

小鳥は恐縮しっぱなしだが、長年やっているとレアリティが低いカードは結構な枚数をダブらせているのだ。これぐらいはなんともない。

「そういえば愛華さんは何か欲しいカードがあつたんですか？」

「ええ。禁じられたシリーズが欲しく……」

禁じられたシリーズとは聖杯、聖槍、聖衣、聖典の事をさす。

相手のモンスター効果を無効化にしたり、魔法・罨や破壊から身を守ったりするなど非常に有能なカードシリーズの事である。

しかし悲しい事にその封入率は非常に低く、シングルでの取引価格も非常に高い。どう頑張っても中学生のお小遣いで買えるような代物ではない。

因みに遊里は30枚以上持っている。どうやって手に入れたんだと色々突っ込みたい衝動にかられた事がある。というか今でも思う。

閑話休題。

「ありましたか？」

「……次が最後のパックです」

ゴクリと喉を鳴らすと愛華が買ってきた最後のパックを破いていく。

それを見て2人もまた緊張した様子でそれを見守る。

ゆっくりと取り出したカードの中には……。

「入ってませんでした……」

しょんぼりした様子を見せる愛華。

はあ、と小鳥も璃緒も行きを吐き出す。

「残念でしたわ……」

「でもパックを開けるのはそういう事ですからね」

「そうですね……あつ」

「あつ」

「あつ」

璃緒と小鳥も自分のパックを開封していたその時である。

小鳥のパックから一枚のカードがぼろりとテーブルの上に落ちてきたのだ。

そしてそのカードこそ……。

「…… 《禁じられた聖杯》」

「あ、当たっちゃいました……」

思わず全員が押し黙ってしまふ。

目的のカードを欲しかった人以外が当ててしまふ。色々とよくある光景である。

「えっと、愛華さんに上げましょうか？」

「いい、いいえ。さすがにこんな高価なカードを受け取る訳にはいきません」

小鳥がそつと愛華にカードを渡そうとするも、さすがに受け取る訳にはいかなかった。
た。

さて、どうしたものかと思うと妥協案を出してくれたのは璃緒であった。

「ならトレードはどうでしょうか？」

「それなら構いません！ わたくしに出せるカードならなんなりと！」

愛華が満面の笑みを浮かべる。

本当にそうならこれ程ありがたいものはなかった。

かなりの枚数を小鳥に提供しなければならぬだろうが、聖杯というカードは愛華にとつて非常に重要なカードである。

さて、話が纏まった所で残りのパックを全て開封。

残念ながらこの後はそれ程、強力なカードは手に入らなかったものの小鳥のデッキに必要なカードはそこそこ手に入った。

後は愛華が提供するカードでデッキを組み立てていけばいい。

カードショップでこのままデッキを組み立てるといふ当初の予定を変更して、3人は愛華の家へと向かう事になった。

到着した家を見て小鳥は驚きの表情を浮かべてしまう。

何せ視線の先には和を基調とした豪華な屋敷があるのだから、ある意味当然か。

お手伝いさんも何人もおり、小鳥は恐縮しっぱなしである。

逆に璃緒は堂々としたものであったが。

通された愛華の部屋でさっそく3人はカードの交換を始めた。

あれがいいこれがいいと、愛華と璃緒が中心になってカードを見て行く。

その結果として聖杯1枚を対価に小鳥はかなりの枚数のカードを手に入れていた。

中には天使族のモンスター・エクシーズもあり、初めて作る小鳥のデッキは中々良い形に仕上がりになっている。

残念ながらモンスター・エクシーズは数枚しか用意できなかったが初心者としては十分すぎる内容だ。

その後は本格的な小鳥向けのデュエルモンスターズ講座である。

さて小鳥の腕であるが遊馬の傍でずっとデュエルを見ていただけあつて、決して何も分からないという訳ではないし、小鳥自身も勤勉であり飲み込みも早かつた。

1時間程、ルールの確認とカードの効果処理について教えるだけである程度、デュエルができる程になっていた。

その後は、璃緒や愛華と練習デュエルを行っていく。

合間に璃緒と愛華のガチデュエルが勃発したりしていたが。

尚、勝率は6：4で愛華の方が若干の勝ち越しである。

璃緒はその結果を受けて、悔しそうな表情をし、愛華もまた慢心しないようにと心に誓っていた。

練習が終わった後はゆっくりとお茶を飲みながらガールズトークへと移行していた。

そろそろお暇するか、と思つて玄関に行くとなんやら騒がしい声が聞こえてくる。

一体なんだろう、と3人が視線を向けるとそこには。

「あれ、小鳥?」

「よう愛華」

「ゆ、遊馬!」

「遊里!」

そこには九十九遊馬と青山遊里の姿があった。

なんでこの2人が一緒に?と思つたが、なんでも街中で偶然出会い、そのままカードシヨップ主催の大会に出場してきたとか。

そして今から遊里の部屋で反省会やデツキ作りをするとの事。

小鳥も一緒に来るか?と遊馬のお誘いもあったが、小鳥は今日は辞退する事にした。

なんとなくだが今日はこのまま愛華とまたね、と挨拶して璃緒と一緒に帰りたい気分であつた。

遊馬は特に気分を害する事なく、おうまたな!とだけ挨拶して遊里と一緒に隣の家の中へと消えていった。

なんだか不思議な気分だな、と思いつつ小鳥と璃緒は愛華と挨拶をするとそのまま帰宅する事になった。

「今日は楽しかったですね」

「ええ、色々と楽しめました」

女3人で色々と話した事もカードを開封して一喜一憂した事もデュエルをした事も。今日は本当に色々と楽しい1日であった。

願わくばバリアンとの戦いを一刻も早く終えて、こんな優しい日が続けばいいなと思
いながら二人はゆつくりと歩を進めていった。

2 VS 青山遊里

バリアンの刺客であるギラグは非常に悩んでいた。

九十九遊馬を倒し、ナンバーズであるカードを奪取する。その任務の為に人間界にやってきて随分と経つが未だに戦果は上がっていないのが現状だ。

バリアン世界ではないこの世界ではギラグの力を最大限に発揮できない為、強そうな人間を洗脳し手駒としてきたが悉く撃退されてしまっている。

花添愛華は勝ちをもぎとったものの、それは九十九遊馬でも神代凌牙でも天城カイトでもない相手だった。

しかもその後には乱入してきた、また関係のない奴によって倒されてしまった。そろそろバリアン世界にいるドルベに何を言われるか分かったものではない。

先日、増援としてやってきた親友であるアリのトの事を考えるとそろそろ現界なのかもしれない。

更にこの間、実行した作戦も失敗してしまった。

ではどうするべきか……。

だからこそそれを見た時、それを行おうと思ったのだ。

「行け！《隻眼のスキル・ゲイナー》！攻撃だ！」

人間界のデュエル大会。

そこで憎き九十九遊馬とバリアンの刺客を倒した男、青山遊里がタッグを組んでデュエル大会に出ているのだ。

九十九遊馬の実力は知っていた。

所々、疑問に思う所はあったが確かに高い実力を持っていた。

しかしギラグがより注目したのは青山遊里の方であった。

今回の大会では遊馬が主体になっているのか、サポートを中心に行っているがここの一番での展開力は見事なものであった。

だから一縷の望みを託して、青山遊里を洗脳する事にした。

バリアンの刺客を倒した、その力をもって九十九遊馬を倒せ、と。

「……全てはバリアン世界の為に」

虚ろで力のない目で遊里はそう呟いた。

その日、遊馬は非常に機嫌が良かった。

先日、行われたタッグ大会。休日、特に意味もなく出歩いていただけなのだが偶然、青

山遊里と出会いそのまま意気投合。2人でタッグを組んで大会に出る事となった。

遊里とのタッグは非常にやりやすくあっさりと言っていいくらいにあっさり優勝してしまった。

優勝賞品として手に入れた新たなモンスター・エクシーズ。

それだけではない。同じく優勝賞品を手に入れた遊里からもモンスター・エクシーズを渡されていた。

最初は断っていたのだが、何枚も持っているという事で他にも数枚のカードと共に手に入れたのだ。

そのカード達を手に入れた事により、デッキも強化された。

これでバリアンとの戦いも楽になる筈だ。

そして浮かれた様子で学校に登校してきて普通に授業を受け1日を過ごした。

それに気づいたのは放課後だ。

小鳥や真月達と一緒に帰ろうかと思っていた頃だ。

Dゲイザーに一つの連絡が入ったのだ。

相手は遊里。

一体何事かと思つたが、場所だけ教えられてプツンと連絡が途絶えてしまう。

はつきりと言おう。怪しかった。

何かあったのかもしれない。

遊馬は慌てた様子で指定された場所へと走り出した。

それを見た小鳥達もそれについていく。

指定された場所はハートランドシティ郊外。人があまり来ないような場所だ。

そこに辿り着くと、目的の人物は既に待っていた。

青山遊里。

それが虚ろな目でこちらを見ていた。

『遊馬』

「ああ、分かるぜアストラル」

『彼はバリアンに洗脳されている』

一目見て分かった。

間違いなくバリアンに洗脳されてしまっている。

となればやる事は一つしかない。

「……九十九遊馬、デュエル……だ」

遊里はそれだけ言う。遊里はデュエルディスクを構える。

それと同時に洗脳されてきた人々に共通して現れたバリアンのマークが額に浮かび

上がった。

しかしここで遊馬は一つの違和感を抱いていた。

「なあ、なんかおかしくないか?」

『何がだ遊馬?』

「今までバリアンに洗脳されてた人達は攻撃的になつたりしてたけど、あんな感じにはなつてなかつたぜ」

『……確かにな』

遊馬の指摘通り、洗脳されたと思われる遊里の様子はどこかおかしかつた。

洗脳されたのだから、と言われればそれまでだが今まで洗脳された人々は虚ろな目をしてどこか無気力な状態になつていた訳ではなかつた。

だと言うのに遊里の目からは光が消えてその四肢にも力が入つてないように見える。

だが今はその理由を考えている暇はない。

『だが今は彼に勝利し、洗脳を解くのが先だ!』

「おう!行くぜ、デュエルディスクセット! Dゲイザー、セット!」

遊馬と遊里。

互いにデュエルディスクとDゲイザーを装備する。

「デュエルトARGET、ロックオン!」

それと同時にARリンクが完全に完了する。

遊馬についてきた小鳥や凌牙達も同じようにDゲイザーをセットしてリンクさせる。

さあ、デュエルの始まりだ。

『デュエル!!』

「先行は俺が貰った！ドロー！」

先行を取ったのは遊馬。力強くカードをドローする。

「まず俺は永続魔法、強欲なカケラを発動！こいつは毎ターンのスタンバイフェイズに強欲カウンターを一つ置く」

「……2つ以上、乗っている……時、墓地に送ると……2枚ドローできる……」

「ああ！そして俺はモンスターをセットし、カードを1枚セットしてターンエンド！」

「……俺のターン」

次は遊馬のターン。遊馬とは違い、力のない動作でカードをドローする。

やはり遊馬達が知っている遊馬の動きとは思えない。

「俺は……永続魔法、《炎舞―「天キ」》を発動。このカードを発動した時、デッキからレベル4以下の獣戦士族モンスターを1体手札に加える事ができる。俺が加えるのは《武神―ヤマト》」

「えっ、武神?」

「確か儀式デッキの使い手では?」

遊馬や凌牙から話を聞いていた小鳥と璃緒は疑問の声を上げる。少なくとも今、手札に加えたカードは儀式カードとは思えない。

だがそれを否定したのは遊馬と凌牙であった。

「いや、遊里は」

「あいつは色々なデッキを使う。儀式デッキもその一つにすぎない」

凌牙は何度も戦った時、遊里の使う様々なデッキと戦ってきた。

遊馬は先日のタッグ大会でその事を聞いていた為、知っていたのだ。

「そして俺はこのままヤマトを召喚。そして天キはフィールド上に存在する限り自分フィールド上の獣戦士族は攻撃力を1000アップさせる」

その効果は微々たるものだが、1000も上がれば倒せるモンスターも増えていく。

1000だからと言って侮る訳にはいかない。

「バトルフェイズ、セットモンスターを攻撃する」

「俺のセットは《ゴゴゴゴレム》！このカードは表側守備の時、1度だけ破壊されない！」

セットされた状態から表になった為、その力が発動する事になったのだ。

武神の1人、ヤマトの攻撃はこの鉄壁の守りでその攻撃から身を守ったのだ。

「……エンドフェイズに移行。ヤマトの効果を発動する」

『このタイミングで効果!』

「デツキから武神と名のつくモンスターを1枚手札に加える事ができる。俺はデツキから《武神器―ハバキリ》を手札に加える」

「手札を増強しやがった……」

ヤマトから放たれる光がデツキから鳥のモンスターが飛び立つと、遊里の手札へと収まっていく。

これだけ見れば手札が1枚増えるという破格の能力だ。

しかし……。

「この効果で手札を加えた時、俺は手札1枚を墓地に送る。俺が墓地に送るのは《武神器―サグサ》。そしてターンエンドだ」

ウサギのような姿のモンスターが代わりに墓地へと飛び込んで行く。

「手札交換か」

『必要なカードを手札に加え、必要ないカードを墓地に送る力。強力な効果だ』

「だがモンスターなら次のターンにならないと使えねえ。相手にカードもセットされていないし、今の内にヤマトを倒さない」と

（本当にそうだろうか……?）

確かに遊馬の言う通り、通常ならばモンスターは召喚・特殊召喚しなければその力を

発揮する事はない。

しかしアストラルは覚えている。

遊里が戦った時に見た、手札から発動するモンスター達を。

だが今はそれを考えている時ではない。

まずはあのヤマトを倒さなければならない。

「俺のターン、ドロロー！この時、《強欲なカケラ》に強欲カウンターが一つ乗る」

砕けた壺のカケラに光が1つ点る。

後1つ。

「俺は《ズババナイト》を召喚！」

遊馬のフィールド上にギザギザになった剣を2振り持ったモンスターが現れる。

だが攻撃力は1600。遊里のヤマトの1900には届かない。

「そして《破天荒な風》を発動！これで《ズババナイト》の攻撃力と守備力を10000ポイントアップする！」

強烈な風が《ズババナイト》の周囲に纏うように宿る。

その力により攻撃力は2600。ヤマトの攻撃力を上回った。

「よし、《ゴゴゴゴレム》も攻撃表示にして一気に」

『待て、遊馬』

「どうしたんだアストラル?」

一気に攻めようとする遊馬にストップをかけたのはアストラルであった。

『1つ確認したい事がある。《ゴゴゴゴレム》は守備表示のまま、《ズババナイト》だけで攻撃したい』

「分かった。行くぜ! 《ズババナイト》でヤマトに攻撃!ズババソード!」

嵐のような風を纏った剣を構えた《ズババナイト》がヤマトに斬りかかる。

攻撃力は2600と1900。ヤマトが確実に破壊される数字だ。

しかしそれを前にしても遊馬の視線が揺れる事はない。

「……ダメージ計算時。手札から《武神器―ハバキリ》の効果を発動」

「手札からモンスターの効果!」

『やはり、ただのモンスターではなかったか』

遊馬の手札から先程、手札に加えた鳥のモンスターが光を放ちながら飛び放たれる。

飛び立ったハバキリはそのままヤマトの元へと辿り着くと、その身を剣に姿を変えていた。

「ハバキリの効果により武神と名のつく獣戦士族はこのバトルの間だけ元々の攻撃力は

2倍になる」

「えっ、それってつまり……」

「ヤマトの元々の攻撃力は1800。つまり3600か!」

これにより風の力で強化された《ズババナイト》の攻撃力を1000も上回った。そしてこの状況で攻撃を止める事はできない。

風を纏った剣で斬りかかるも、武器の力で強化されたヤマトは一瞬にして攻撃を避けると手に持つ剣で《ズババナイト》を真つ二つに切り裂いた。

「くっ……」

遊馬のライフが4000から3000に減る。

『あのハバキリは手札にあつて意味がある効果のようだな。この分だと墓地に送られたカードにも何かある可能性が高い』

「ああ。《ゴゴゴゴレム》を攻撃表示にしておかなくて良かったぜ……」

《ゴゴゴゴレム》の攻撃力は1800。

強化されたヤマトの攻撃力に100届かない。もし攻撃表示にしていたら、その防御力の力を生かす事なく破壊されていただろう。

「俺はこのままターンエンド」

「俺の……ターン。俺は《武器—ムラクモ》を召喚」

頭部に剣を携えた馬のようなモンスターがフィールド上に召喚される。

そしてフィールド上にレベル4のモンスターが2体。

これはずまり……。

「俺はレベル4のヤマトとムラクモでオーバーレイ。オーバーレイネットワークを構築、エクシーズ召喚」

ヤマトとムラクモが光になって渦へと消えて行く。

そして巨大な閃光が放たれる時、そこに新たなモンスターが立っていた。

「現れる、《武神帝―スサノヲ》」

風と炎。その力を宿した存在。

鎧も手に持つ剣もヤマトをより強化したような姿のモンスターだ。

「そしてスサノヲの効果を発動。オーバーレイユニットを1つ取り除く事で効果発動。デッキから武神と名のつくモンスターを手札に加えるか墓地に送る事が出来る」

スサノヲの剣が地面に突き刺さると、突き刺した地面から光溢れるとそこから一枚のカードが現れる。

現れた新たなカードはそのまま遊里の手札へと光の波に乗り運ばれていく。

「俺は手札に加える効果を選択。《武神―ヤマト》を手札に加える」

「くそつ、再びヤマトが手札に」

「そして墓地に送った《武神器―ムラクモ》の効果を発動する。自分フィールド上に武神と名のついた獣戦士族が表側表示で存在する時、ムラクモを墓地から除外する事で相手

フィールド上に表側表示で存在するカード1枚を破壊する」

『なんだと!?!』

「俺はこの効果で《ゴゴゴゴーレム》を選択する」

墓地から颯爽と現れたムラクモが駆け抜けて行くと、防御体勢を取っていた《ゴゴゴゴーレム》を、その頭部の刃で一閃する。

確かに戦闘に対しては強い力を持っていた《ゴゴゴゴーレム》ではあったが、効果破壊からは身を守る事は出来ない。

ムラクモに一閃されて一瞬で破壊されてしまった。

同時にムラクモは墓地ではなく次元の彼方に消えてきつていった。

「不味い、遊馬からモンスターがいなくなっちゃった!」

「遊馬!」

鉄男が遊馬のフィールドを見て慌てた声を上げる。傍で見ている小鳥も悲鳴を上げる。

だが遊馬達は冷静であった。

「バトル、スサノヲで遊馬にダイレクトアタック!」

「させるかよ! 罠カード発動! 《攻撃の無敵化》! このバトルフェイズ中、俺への戦闘ダメージは0になる!」

スサノヲがその両手の剣で遊馬を切り刻まんと振るうが遊馬の前に現れた光の盾がその攻撃を無効化にする。

「危ない所だったぜ……」

『なるほど。あのデッキは手札や墓地からモンスター効果を発動させていくのか』

「つまりあのヤマトは……」

『ああ。デッキから手札で発動するカードをサーチし、墓地で発動するカードを墓地に送る効果を兼ね備えたモンスター。あれこそがあのデッキの核なるモンスターに違いない』

手札から発動したハバキリ。墓地から発動したムラクモ。

なるほど。サーチと墓地肥やしが同時にできるヤマトの強さによく気づく事が出来た。

そして2体目のヤマトが遊里の手札に眠っている。

それに前のターンに送られたサグサの事もある。何が飛んでくるか分かったものではない。

「……遊里ならちゃんと教えてくれるんだけどな」

遊馬がポツリと呟いた一言。

それこそが遊馬が抱いている違和感であった。

前にタッグデュエルをした時に分かった事だが、遊里はすっかり自分のカードの効果を説明してくれるのだ。

パートナーの自分だけではない。その質問者が相手でも教えてくれるのだ。

普通なら油断とか舐めているとしか思われないう行動だが、遊里はその上で勝利をもぎ取って来るのだからその実力は間違いない。

しかし今はそれがない。

それが違和感の正体であった。

同時に凌牙もまた同じ思いを抱いていた。

そして原因はたった一つしか思いつかない。

あのバリアンの洗脳だ。

「……俺はターンエンド」

「俺のターン！ドロー！！再び《強欲なカケラ》に強欲カウンターが一つ乗る！」

カケラに2つ目の光が宿る。

「そして俺は《強欲なカケラ》の効果を発動！こいつを墓地に送ってカードを2枚ドロースする！」

光が宿るカケラが盛大に爆発を起こすと、遊馬の手元に新たなカードが2枚送られてくる。

それを見ると遊馬の目に力が宿る。

「よし俺は《ガガガガール》を召喚！」

マジシャンの格好をし、携帯電話を弄っている少女型のモンスターが現れる。

しかしフィールド上に存在するスサノヲを見てビクリとする。迫力も勿論だが攻撃力が違いすぎるのだ。

だが遊馬はしっかりと理解した上で召喚したのだ。

「そして俺は魔法カード！《ガガガ学園の緊急連絡網》を発動！こいつはガガガ学園の生徒がピンチの時に発動できる！デッキからガガガ学園の生徒を特殊召喚できる！こい《ガガガマジシャン》！」

電のような閃光を放ちながらデッキから飛び出したヤンキー、と言った雰囲気を持ったモンスターであった。

その姿を見て、ポツと《ガガガガール》が頬を赤く染める。

「そして俺は《ガガガマジシャン》の効果を発動！こいつは自分のレベル1から8まで任意のレベルに変更できる！俺はレベル5を選択！」

《ガガガマジシャン》から魔力が放たれ、その身に宿る星の数を己の意思のままに変更していく。元の数字であった4が5に変わっていく。

そしてそれにより《ガガガガール》の効果も発動する。

「《ガガガガール》の効果発動！自分のレベルをフィールド上の《ガガガマジシャン》と同じレベルに変更する！」

これでマジシャンとガール、それぞれのレベルが5に変化する。

同じレベルのモンスターが2体。そうとなれば。

「俺はレベル5になった《ガガガマジシャン》と《ガガガガール》でオーバーレイ！エクシーズ召喚!!現れる《No. 61 ヴォルカザウルス》!!」

エクシーズ召喚されたのは炎、否、マグマを纏った恐竜であった。

ナンバーズと呼ばれる特殊なモンスターである。その身に宿る力はバリアンなどに負けていない。

「いくぜーヴォルカザウルスの効果発動！オーバーレイユニットを1つ取り除き、相手モンスターを1体破壊する！そして破壊した時、その攻撃力分ダメージを与える！いけ、マグマックス！」

ヴォルカザウルスの胸の部分から銃口のようなものが開かれる。

するとそこから巨大なマグマのような光線がスサノヲに向かって放たれた。

スサノヲは必死に回避しようとするがもう遅い。

そしてスサノヲが破壊されればそのダメージは2400ポイント。大ダメージを与えられる。

「俺は墓地にある《武神器―サグサ》の効果を発動。こいつを除外する事で自分フィールド上の武神と名のつく獣戦士族を1度だけ破壊から守る」

『やはり最初に送ったカードにも効果が！』

墓地から飛び出してきたのはウサギのようなモンスター。

それが身を挺して、放たれたマグマの光がからスサノヲを守りきった。

だがその効果は1度だけ。力を使い果たしたサグサは次元の狭間へと身を落としていった。

「ならもう1度だ！ヴォルカザウルスの効果を発動！スサノヲを破壊するー！」

「っー！」

再びオーバーレイユニットの力を使ったヴォルカザウルスが2度目の効果を発動させる。

先程はサグサの効果で身を守ったスサノヲではあるが、もうサグサの力は使えない。防御するもその圧倒的な力の前にスサノヲはその身をマグマの底に消えていった。

そして破壊に成功した瞬間、そのマグマの本流はスサノヲの力の分、遊里に襲い掛かる。

「この、瞬間……手札の《武神―ミカツチ》の効果を発動……」

「なにっ!？」

マグマに焼かれながら、遊里の手札から迅雷の如くフィールド上に現れる。
青い鶏冠のような髪を持った2体目の武神だ。

「こいつはフィールド上の武神と名のつく獣戦士族が戦闘や効果で破壊された時に発動できる。こいつを自分フィールド上に特殊召喚する」

「これで遊馬は攻めにくくなった」

「えっ、どうして?」

「そうか。ヴォルカザウルスの効果はもう使えないし、手札にさっきのハバキリがあるかもしれない」

「ああ。ナンバーズはナンバーズでしか倒せないがダメージは別だからな」

攻撃表示で召喚されたミカヅチ。

このまま単純に攻撃すれば再びハバキリの効果で返り討ちにされる可能性は高い。

もしミカヅチがいなければ、このままダイレクトアタックで勝利できたのだが……。

『遊馬、ここは攻撃せずに』

「いや、駄目だ」

『なにつ!?!』

守りに徹するようというアストラルとは違い、遊馬の目には力強い攻撃の意志が宿っている。

「ここで守つたら負ける！攻めるしかない！行け、ヴォルカザウルス！ミカツチを攻撃だ！」

『遊馬!?!』

攻撃宣言をする遊馬にアストラルや小鳥達が驚きの声を上げる。

誰もがここは攻撃宣言をしないでエンドすると思つていたからだ。

だが遊馬は臆する事なく攻撃する。

そしてここは遊馬が正解であつた。

ヴォルカザウルスから放たれた炎がミカツチを焼き滅ぼしたのだ。

「……」

「よっしやあー！」

『遊馬……君という奴は……』

遊里のライフがあつという間に1100にと減少する。

一気に追い詰めたのだ。

「これで俺はターンエンドだ！」

「俺の……ターン」

「……?」

カードをドローする遊里が何かぶれたように見える。

まるで何か抗うような苦しむような表示に遊馬は見えた。
もしかすると。

遊馬がそんな事を思った瞬間、遊里が動いた。

「俺は魔法カード《武神光臨》を発動。これは自分フィールド上にモンスターがおらず、相手フィールド上にモンスターがいる時に発動可能。墓地と除外ゾーンから1体ずつ、武神と名のつくモンスターを特殊召喚する」

「除外したモンスターもだつて!?!」

墓地と除外ゾーン。

そこからそれぞれ1つずつ光が飛び出すと、遊里のフィールド上に降り立つ。

墓地より《武神―ミカヅチ》、次元の彼方から《武神器―サグサ》。

それが再び現れたのだ。

「そしてこの効果で特殊召喚したモンスターをエクシーズ素材にする場合、獣族・獣戦士族・鳥獣族モンスターのエクシーズ召喚にしか使用できない。しかし関係ない。俺はミカヅチとサグサでオーバーレイ、エクシーズ召喚」

新たにエクシーズ召喚されたのは月。

夜に輝く白銀の力を宿したモンスターであった。

「こい《武神帝―ツクヨミ》。更にヤマトを召喚する」

再び現れたヤマト。

だがツクヨミもヤマトも攻撃力は1900しかない。ヴォルカザウルスに勝つ事は出来ないが……。

「これで終わり……ではない。墓地にあるヤマトを除外して手札から《武神―ヒルメ》を特殊召喚する」

日の女神を表す存在が墓地にある武神の力を借りて、場に現れたのだ。

これで再びレベル4のモンスターが2体。

「そしてヤマトとヒルメでエクシーズ召喚。こい、《武神帝―カグツチ》
炎。」

マグマすら温いとばかりに強大で強烈な炎を纏った存在が現れる。

その力はヴォルカザウルスと同等のものだ。

攻撃力は天キの力もあつて2600。

救いと言えばヴォルカザウルスはナンバーズ。戦闘で破壊される事はない。

だがその考えが甘い事をあつという間に示される事になる。

「カグツチがエクシーズ召喚された時、効果発動。デッキの上からカードを5枚送る。そしてそこに武神と名のつくモンスターがあればその枚数だけ攻撃力を100ポイントアップする」

「攻撃力アップの効果!？」

『くっ、墓地に武神を送ると同時に攻撃力を上げるのか!？』

そしてデッキから5枚、カードが墓地に送られる。

送られたのは、《武神―ヤマト》、《武神―ヒルメ》、《武神器―ヤサカニ》、《禁じられた聖槍》、《強制脱出装置》。送られた武神の数は3枚。よって攻撃力は300アップする。
「攻撃力2900!」

「俺はカードを1枚セットしてツクヨミの効果を発動。オーバーレイユニットを1つ取り除き、俺は手札を全て捨ててデッキから新たにカードをドロウする」

月の光により遊里の手札が墓地に送られる代わりに新たにデッキから2枚のカードが送られる。

先程までの遊里の手札は1枚。効果により1枚手札が増えた事になる。

「バトルフェイズ、行けカグツチ。ヴォルカザウルスを攻撃!」

「だがヴォルカザウルスはナンバーズ!ナンバーズはナンバーズでしか破壊できない!」

「……ダメージステップ。俺は《禁じられた聖杯》をヴォルカザウルスに発動する」
「何っ!?!」

カグツチの攻撃を迎撃しようとしていたヴォルカザウルスの頭上に聖杯が現れる。

聖杯はその中身をヴォルカザウルスに降り注いで行く。するとヴォルカザウルスに宿る力が消えて行くではないか。

「なっ、ヴォルカザウルス!?!」

「聖杯の効果でヴォルカザウルスの効果は無効化された」

『まずい、これでヴォルカザウルスは破壊されてしまう』

「だが同時に無効化したモンスターの攻撃力を400ポイントアップさせる」

その効果は失ったものの、力そのものはむしろパワーアップしていた。

カグツチもヴォルカザウルスも攻撃力は2900。お前も道連れだと言わんばかりにカグツチに襲い掛かる。

「くっ、相打ちか……っ!?!」

しかし遊馬が目にしたのは倒されたヴォルカザウルスと無傷のカグツチの姿であった。

「ど、どうして!?!」

「カグツチの効果を発動。自分フィールド上の武神と名のつく獣戦士族モンスターが戦闘または効果で破壊される時、その破壊されるモンスター1体の代わりにこのカードのエクシーズ素材を1つ取り除く事ができる」

「そんな……!?!」

「そしてツクヨミでダイレクトアタック！」

「う、うわあああああ!？」

月の力を宿した剣が遊馬に襲い掛かる。

その一撃で3000あったライフが1100へと減少する。数値だけ見れば遊馬と遊里が並んだ。

だが。

「ライフは同じでもフィールド上の差が大きい。しかも遊里の野郎の墓地には武神が多く揃っている」

「あれを突破するのは簡単じゃない筈だ……」

だが遊馬は諦めてなどいない。

倒れた体に入力を入れる。

そうだ。こんな所で負ける訳にはいかない。

「ターンエンド」

「なあ、遊里。こんなデュエルで満足なのかよ?」

「遊馬?」

「言ってくれたような正々堂々と熱いデュエルがしたいって。これがそんなデュエルなのかよ!」

「……………」

「負けるな遊里！バリアンの力になんか負けるんじゃない！」

熱く叫び声を上げる遊馬。

それを見ていたギラグは冷徹な目で遊馬を見下ろしていた。

無駄だ、と。

バリアンの洗脳は簡単にやぶられるものではない。

だが。

『見ろ、遊馬！』

「えっ?」

「……………」

遊馬の声の影響か、今度こそ誰にでも分かる程、遊里の様子がおかしかった。

何かに苦しんでいるような状態だ。

「そうか。戦ってるんだよな！なら俺が今すぐ戻してやるから待っていてくれ！俺のター

ン、ドロー！」

希望を宿して遊馬がドローする。

しかしその手札に現状を打開出来るカードはない。

ならば。

「俺は魔法カード《手札抹殺》を発動。これでお互いの手札を墓地に送って、その分だけ新たにカードをドローする！」

本来ならば武神相手に使うのはあまりよろしくはない。

相手に墓地肥やしをさせてしまうからだ。

だがこのままでは攻撃どころが守る事すらできない。

だからこそ遊馬は思い切ってそれを発動したのだ。

遊馬は3枚、遊里は2枚カードを入れ替える。

しかしそれでも現状を打破できるカードはない。

「俺はモンスターをセット。更にカードを2枚セットしてターンエンドだ！」

これで遊馬の手札は0。

今、遊馬ができる最大の展開だ。

「俺の……ターン、ドロー……ドロー……！」

やはり様子がおかしい。

だがそれ以上に1つ気づいた事がある。

遊里が今、ドローしたカード。そこから溢れる気配に見覚えがあった。

『あれはまさか……』

「間違いないあのカードだ！」

《RUMーバリアンズ・フォース》

エクシーズモンスターをカオス化させ、新たな姿に変えるバリアンの力。

今まで洗脳された人達はそれを持っていた事から確かに遊里も持っていてもおかしくはなかった。

だがこのタイミングで引くとは。

遊馬達はそのカードに戦慄し、ギラグはそれを見て勝利を確信した。

既に遊馬のライフもフィールドも虫の息状態だ。ここでカオス化させれば一気に倒せる筈。

しかしみんなの反応とは別に遊里は動かない。

その手に勝利をもぎ取れるカードがありながら動かないのだ。

「どうしてだ！なぜそれを使わない！」

思わずギラグが声を荒げてしまう。

逆に遊馬達は1つの確信をしていた。戦っている。戦っているのだ。

遊馬の言う通り、遊里はバリアンの力と戦っているのだ。

「負けるな、遊里！」

「そうです負けないでください先輩！」

「そんな力に頼るんじゃない！」

遊馬が小鳥が凌牙が皆が。

遊里に声援を送る。

バリアンに負けるな、と。

そして遊里が出した答えは……。

「俺は……俺は……！ 《召喚僧サモンプリースト》を召喚！」

「何っ!？」

「っ！」

遊里が出したのはバリアンズフォースではなく、僧侶の姿をした老人。

攻撃表示から守備表示になると、呪文を唱え始める。

「そしてサモンプリーストの効果を発動！ 手札の魔法カードを1枚捨てて俺はデツキからレベル4のモンスターを特殊召喚する。俺が捨てるのは《RUM―バリアンズ・

フォース》！ 来い！ 《武神器―ハチ》！」

「な、なんだとお!？」

「遊里！」

まさかのバリアンズフォースを捨てる行為に驚きの声を上げる。

そんな中で遊馬が嬉しそうな声を上げる。

「そして墓地のヤサカニを除外して現れる《武神―ヒルメ》！」

再び現れるヒルメ。

そしてこれで場に3体のレベル4モンスターが揃った。
ならば。

「俺はレベル4の《召喚僧サモンプリースト》、《武器器―ハチ》、《武神―ヒルメ》でオーバ―レイ！ 来い太陽の化身！ 今ここに世界を照らせ！ エクシーズ召喚！！ 《武神姫―アマテラス》！」

光臨するのは太陽の化身。

先程の日の光などではない、マグマのような灼熱でもない、全てを焼き滅ぼす焔ではない。

全てを癒すような優しく、そして力強い太陽の輝き。

天の剣を携えた太陽姫。アマテラスが光臨した。

「凄い……！」

「綺麗……！」

その輝きに目を奪われる。

だが遊馬の視線はアマテラスではなく遊里にひたすら向いていた。

「……よう遊馬。なんでまたこんな場所で俺達はデュエルなんかしてるんだ？」

「遊里！ 洗脳が解けたのか!？」

いつものように声をかけてくる遊里に驚きの声を上げる。

まさか洗脳が解けたのか！

しかしその額にバリアンの紋章がついたままだ。

「洗脳……か。いや今でもお前を倒せつて頭の中が五月蠅くて仕方がなくてな。状況はさっぱり分からないがとりあえずお前を倒す」

「へっ！いつもの遊里ならともかく、洗脳された奴に俺は負けない！」

「そうか。なら勝つてどうにかしてくれよ」

「おう！任せておけ！」

遊里の願いに任せろ！と力強く頷く遊馬。

だがその力強さとは別にフィールド上はあまりにもよろしくない。

「なら行くぞ！俺はアマテラスの効果を発動！オーバーレイユニットを1つ取り除き、除外されているレベル4以下の俺のモンスターを俺のフィールド上に特殊召喚する！

こい、ヤマト！」

アマテラスの光が次元の穴を開けると、そこから現れたのはあのヤマトであった。

これで遊里の場にはモンスターが4体。

だがここで終わる遊里ではない。

「更に墓地にある《武神器―ハチ》の効果が発動する！」

『今のアマテラスの効果で墓地に送ったのか』

「俺はこいつを除外して相手フィールド上の魔法・罠を1枚破壊する！」

墓地からハチが飛び出して、遊馬の魔法・罠を食らい尽くさんと襲い掛かってくる。

だがそれは外れだ。

「ハチの対象になつたカードを発動する！罠カード、《バースト・リバース》！ライフを半分払って、自分の墓地のモンスターを裏側守備表示で特殊召喚する！俺は《ゴゴゴレーム》を選択！」

食らわれる寸前にその力が発動し、墓地に眠りし巨人を蘇らせる。

これで壁となるモンスターが増える事になる。

だがその代償に遊馬の残りライフは550しか残っていない。

「ならばバトルだ！ヤマトとツクヨミで《ゴゴゴレーム》を破壊しろ！」

1度だけしか身を守る事ができない《ゴゴゴレーム》では2体連続攻撃を凌ぐ事はできない。

だがその力で2体のモンスターから遊馬を守る事ができたのだ。

しかし遊里の攻撃はまだ終わらない。

「続けてそのセットモンスターにカグツチで攻撃！」

「セットモンスターは《ゴゴゴギガス》だ！」

純粹に高い防御力を誇る巨人ではあるが、強大になったカグツチの攻撃をどうにかする事はできない。

母すら焼き殺す焔によって一瞬で消滅してしまいうギガース。

「行けアマテラス！遊馬にダイレクトアタック！アマノツルギー！」

「負けるかあ！畏発動！《ピンポイント・ガード》！墓地からモンスターを守備表示で特殊召喚する！頼む《ゴゴゴギガース》！」

遊馬に襲い掛からんと放たれた天の剣がその寸前で蘇ったギガースが受け止める。

しかしやはりその守備力を上回る一撃により貫かれて消滅してしまった。

「凄いだか……エンドフェイズ、ヤマトの効果で《武神器―ヘツカ》を手札に加えそのまま墓地に送ってターンエンドだ」

遊里の手札はこれで0。

しかしフィールド上には太陽と月、火の神と皇子がいる。更に攻撃力をアップする天キとセツトカードも1枚存在する。

逆に遊馬は手札にもフィールドもカードがない。

まさに絶体絶命だ。

しかし遊馬の目は死んではいない。

それどころか、ここからでも勝つという強い意志が宿っている。

「見せてやる！ かつとビングだ、俺！ ドロー！」

勇気を抱く遊馬の魔法の言葉と共にカードをドローする。

ドローしたカードは……。

「俺がドローしたのは《ガガガドロー》！ 墓地にあるガガガと名のつくモンスターを3体除外してカードを2枚ドローする！」

除外したのは《ガガガガール》、《ガガガクラーク》、《ガガガガードナー》。

しかし先程までのデュエルでクラークとガードナーの姿はなかった筈、いつのまに墓地に？

「《手札抹殺》の時か」

「ああ！ そして更に俺は《エクシーズ・トレジャー》を発動！」

「マジかよ」

「フィールド上に存在するエクシーズモンスターの数だけカードをドローする！ フィールド上に3体のエクシーズモンスターがいるから俺は3枚カードをドローする！」

一瞬にして遊馬の手札が4枚に増える。

先程まで0だったというのにも関わらずだ。

『遊馬！ 勝利の方程式は揃った！』

「ああ、行くぜ！ 俺は《ガガガシスター》を召喚！」

「そいつは……!」

「遊里が俺にくれたカードだ! シスターの効果を発動! デツキからガガガと名のつく魔法・罫を1枚手札に加える事ができる! 俺が加えるのは《ガガガリベンジ》!」

一瞬にして遊里は遊馬のやる事が分かった。

何せかつて現■世界でも散々、自分がやってきた事なのだから。

「俺は手札に加えた《ガガガリベンジ》を発動! 墓地のガガガモンスターを1体、復活させて装備させる! 蘇れ《ガガガマジシャン》!!」

逆襲とばかりに唯一墓地に残しておいた《ガガガマジシャン》が蘇る。

だがシスターはレベル2でマジシャンはレベル4。このままではエクシーズ召喚はできない、が。

マジシャンの効果である。

「俺は《ガガガマジシャン》の効果発動! 自身のレベルを変更し、レベル2にする!」

「レベル2のモンスター・エクシーズ?」

「いいや、《ガガガシスター》の更なる効果を発動! 自分フィールド上に存在するこのカード以外のガガガと名のつくモンスターを選択し、そのレベルの数の合計をシスターとモンスターのレベルにする!」

「つまりレベル4って事か」

レベル4のモンスターが2体。

となれば、ここを出してくるのはあれしかない。

「俺はレベル4になった《ガガガマジシャン》と《ガガガシスター》でオーバーレイ！2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築！エクシース召喚！」

「来るか！」

「現れろ、No. 39！未来へ繋がる希望の光！希望皇ホープ!!」

白を基調した戦士。

遊馬の希望にして、遊馬にとって始まりのナンバーズ。遊馬のエースモンスターが光臨したのだ。

だがここからどうする？

「そして俺はホープをエクシース素材としてカオスエクシースチェンジ！」

ホープが塔のような姿に形を変えると雄たけびを上げて、上空に駆け上がっていく。

そしてそこから新たなホープが誕生する

「現れよ、CNo. 39！混沌を光に変える使者！希望皇ホープレイ！」

先程までの白い姿とは違い、グレーを基調とした姿に変わっている。

背中のパーツも増えており、強化された姿というのがよく分かる。

「行くぜ！ホープレイの効果を発動！オーバーレイユニットを一つ取り除き、ホープレ

「この攻撃力を5000アップさせ相手モンスターの攻撃力を10000ポイント下げる！
オーバレイ・チャージ！」

「くっ、その効果は対象を取らないからなヘツカの効果が使えない……！だが……！」

遊馬のホープレイの攻撃力はこれで4000。

そしてホープレイの効果で攻撃力が下がったのはアマテラス。その攻撃力は0に変貌していた。

アマテラスを攻撃すれば遊馬の勝利である。

『行くぞ遊馬！』

「行くぜ！俺はホープレイでアマテラスを攻撃！」

混沌の光が太陽姫を斬りさかんと遅いかかる。

しかしこの状況で遊里は思わず舌打ちしていた。

どうしてアマテラスを選んだのか、だ。

もしここでヤマトを選んでいたのならば話は違っただろう。だがアマテラスならば勝利は遊里が手に入れるだろう。

遊馬の場にセットしてあるカードは《剣現する武神》。

このカードは墓地にある武神と名のつくモンスターカードを1枚手札に加えるか、除外されている武神と名のつくモンスターカードを1枚墓地に戻す効果である。

これで墓地に眠るハバキリを回収すれば、その効果で元々の攻撃力の2倍になりアマテラスの攻撃力は5000となる。

ホープレイの攻撃力は4000。これが通れば遊里の勝ちである。

だから遊里はそのセットを発動しようとした瞬間、驚いた表情を見せた。

「この瞬間、墓地の《タスケルトン》の効果発動！こいつを除外してその攻撃を無効化する！」

「えっ、ホープレイの攻撃を!？」

「……まさか!？」

小鳥が驚きの声をあげる。

攻撃が通れば勝てるというのにどうして無効化にしてしまうのか？

だが遊里はその一瞬で遊馬が何をしたいのか理解できてしまった。

「攻撃が無効化された事により、俺は速攻魔法を発動！」

「!？」

「《ダブル・アップ・チャンス》！攻撃が無効化された時、そのモンスターは攻撃力を2倍にしてもう1度攻撃する事ができる！」

『これで攻撃力は8000！これならば!』

攻撃を無効化した事により更に力を強化したホープレイ。

勢いにのったホーププレイが再びアマテラスへと襲い掛かる。

「なるほど。これはどうにもならないか」

セットしてあった《剣現する武神》を発動させずその時を待つ。

アマテラスは必死に足掻いているがもう遅いのだ。

「ホープ剣・ダブルカオス！スラッシュユ！！」

全ての力を集約した攻撃がアマテラスを破壊。

一瞬にして遊里のライフポイントを0にした。

「あー、迷惑かけたみたいだな」

「気にするなっ！」

デュエルが終わった後、遊里は遊馬達に頭を下げていた。

洗脳されていたとは言え迷惑をかけたのには違いないのだから。

だが遊馬は気にするな、と言ってくれる。本当にいい奴である。

「でも遊里さんははつきり何があったか覚えてるんですよね？」

「つつてもデュエルの事ぐらいで、誰に洗脳されたとかはさっぱりだぜ」

ほぼ自力で洗脳を解きかけていた遊里は他とは違い記憶の損失は少なかったが、やは

りと言うべきか洗脳してきた下手人の事は覚えていなかった。

だが今まで洗脳されてきた人々は殆ど記憶がなくなっているのだ。

デュエル中に意識を復活させ、記憶を失っていない遊里は非常に珍しいケースといえた。

「俺にやれる事は少ないが何かあつたら呼べよ。力になる」

「おう！」

「後、もう一つ。こんなデュエルになって悪かったな」

「いいって。でも、改めて約束して欲しい事があるんだ」

「なんだ？」

「今度こそちゃんとしたデュエルをしようって」

「……ああ、そうだな。今度はちゃんと本気でやろう」

洗脳された状態なんかではなく。

九十九遊馬と青山遊里としてデュエルをしよう。

そう約束して、帰路へとついていった。

2. 5 遊里と危険なカード

青山遊里は転生者である。

それも所謂、地雷に相当する『神様転生系』だ。

とは言え、遊里自身はそのカミサマに会ったという記憶は非常に薄い。

今でも覚えていると言え、遊戯王OCGのカードをやる、と言った内容ぐらいなものだ。

後は何一つ覚えていない事はない。

気がつけばとある夫婦の子供として生まれていて普通に成長していた。

違いがあるとすれば、この世界はあまりにもデュエルモンスターズで決める事が多すぎたという事ぐらいだろうか。

そのおかげもあって俺はここが遊戯王の世界だという事に気づく事が出来たのだが。

この時点ではカミサマの事は完全に忘れており、どうしてここにおいて若返ったのかも覚えていなかった。

それを思い出したのは小学校に入ってからなのだ。

ちやうどその頃に正式に遊里にデュエルモンスターズのカードが買い与えられた日

である。

その時にだ。

遊里の手に大量のカードが現れたのだ。

これこそがカミサマが言っていたカードをやる、という事なのだろう。

当初は苦労したものだ。

これ程、大量のカード。しかも超高額カードが大量に現れたものだから両親にそれを隠すのは非常に大変なものであった。

無事に隠し通す事が出来た遊里が次に行ったのはこの世界を調べる事であった。

無印なのかGXなのか5D、sなのかZ E A X Lなのか、はたまたまったく関係ないのか。

調べた結果、分かったのはハートランドシティがあるという事でZ E A X L、とある程度、断定したのであった。

確信に変わったのは、それから随分と後の事である。

たまたま大会で神代凌牙を見つけた時である。

アニメか漫画か、と更に面倒であったが八雲という名前を見つける事はなかった。アニメ版と確信したのであった。

さて、世界が分かったのはいい。

では遊里自身が何がしたいか、という事になる。

遊戯王の世界に行きたいのかという事。

デュエルは楽しい。今も昔もその気持ちは変わっていない。

しかし幾つか困った事があった。

一つは周りが弱すぎた、という事だ。

何せカードが多すぎて強力なパワーカードを所持している人が少なく、タクティクスも微妙なものばかり。

おかげでデュエルを初めて1年もすれば遊里はこの辺りでは負けなしの決闘者として名を馳せるのには十分すぎたのだ。

そのせいか両親はそっちの道に進むものだと思っている。

遊里の本心としては、まだ決まっていけないのだから少し困ったものである。

相手が弱いという事はデュエルのやりがいがないという事だ。

勿論、最初はARビジョンによるデュエルが非常に楽しかったのだが時間が経つにつれて強い相手を求めるようになるのは必然だったのだろう。

なので大会にも出場するようになり、強い相手を求めたのだが残念ながら遊里の求める相手ではなかった。

そこで遊里は根本的な方法を変える事にした。

強い相手がいらないなら、自分が回りを強くすればいい。

普通に考えれば傲慢な考えだったのかもしれないが、遊里は思考はすぐにそちらの方
向へ向いていった。

勿論だが教師の経験などない遊里にものを教える事は非常に大変である。

なので最初は幼馴染の愛華を強くしてみようと思った訳だ。

つまり先日行われた、神代璃緒とのデュエルはその結果があらわれた事になる。

それ以外にも、何度も何度も挑戦してくる神代凌牙も強くなっている筈だ。原作がど
う進んだかは関わっていない遊里には分からないのだが。

さて、それ以外にも周りが強くなれるように何をすればいいのか。

遊里はそこまで考えてようやく一つのある事実に気づいたのである。

それは非常に重要で、どうして今まで気づかなかったのかと問い詰めたくなるレベル
の大問題である。

遊里が気づいた事、それは……。

「この世界、wikiがねえ」

これである。

なんとデュエルモンスターズのwikiがないのである。

正直、この事実を知った時、ぶち切れそうになったのは内緒でもなんでもない。

それで一つ理解できた事があった。

他のデュエリスト達がカードの効果知らない事が多いのはこれのせいであると。

しかもこの世界、ルールにはちゃんと墓地などは公開情報と書かれているのに誰も教えないし聞こうとしないもんだから更に切れそうになる。

更に言えばこの世界はパワー志向が強い。

除去カードは少なく、モンスターを強化するカードを好む傾向がある。

愛華もモンスター強化を多く積んでいる時があったのだが、強化したモンスターを手札に戻していたら睨まれた、解せぬ。

閑話休題。

そういう訳で遊里が次に行ったのは、なんとwikiの製作である。個人でやるものではないと正直に言いたい。

とりあえずサーバーを設置する事から始めなければならなかったのだ、金がかかるといふ事実。ここは昔出場していた大会の賞金や一部のカードを処分する事でどうにかこうにかして纏まった金を用意する事が出来たのだが。

次にwikiの原型を現■世界のものを参考にして作り、データを入力していく事。だが作業するのは1人。辛いかかそういうレベルではない。

しかも遊里はまだまだ学生なのだ。日中は学校に行かなければならないし、他にも

色々やる事は多い。

その合間を縫って作業していたのだが、自分が持っているカードを全部入力するのに1年近くかかってしまったのは仕方のない事かもしれない。

そんな努力のいかいもあって公開されたwikiなのだが……どうにも回覧者が少ない、というかほぼ皆無である。

実質個人サイトなのだから仕方のない事かもしれないが、あまりカードについて調べたりしない事が多いらしい。

それに加えて、データが完全でないせいかもしれないと思い、毎日のように新しいカードを見つけては情報を更新し続けている。

その鬼気迫る様子に愛華がどん引きしていたのを遊里は知らない。

「……眠い」

先日、バリアンに洗脳された遊里ではあるが現在は体調に変化もなく普通に過ごしていた。

眠いと言っているのは昨日は夜遅くまでデッキの調整などを行っていたせいである。もう少し眠っていても良かったのだが、今朝になって後輩である観月から連絡があつ

たのだ。

なんでも凌牙と遊馬が山で大怪我をしたとの事。

ここまで聞いて思い出したのは、バリアン七皇の1人であるミザエルである。

■作でも初めてミザエルとデュエルした時、2人が大怪我していた。観月からもバリアンのせいという事も聞いたので確信に変わったのだが。

そういう訳で眠気をおして、見舞いの品など購入して病院に向かっている所であった。

購入したのはお馴染みのフルーツの盛り合わせ。多分、あの2人に花なんて持つていっても意味はないだろうし。

最初はバイク型の乗り物で行こうかと思ったのだが、雨が降ってきたので歩きに変更。

雨の音を楽しみながら街中を歩いていたのだが、面倒ごとがついてきたな、とある光景を見て思ってしまった。

「は、離してください！」

「俺の……俺のモノになれえ……！」

「ひっ！」

少し年上かと思われる女性に血走った目で迫っている男。

どう見ても犯罪の現場である。

どうしたものかと思つたが、さすがに見て見ぬ振りという訳にはいかないだろう。

Dゲイザーを使つて警察に連絡。

時間を稼ごうと、割つて入ろうしたのだがどうにも嫌な予感がする。

所謂、直感とかそういうものではない。

明確な敵意というか悪意が血走つた男から出ているのだ。

遊里はそんな初めての経験を受けながらどうにか無視して2人の間に割つてはいる。

「おい、嫌がつているだろう」

「え?」

「なんだテメエは!」

「だから嫌がつているだろう。ナンパしたいならもうちょっとまともな手段を選びな

よ」

遊里が女性の前に立ち、正論を吐きながら男を睨みつけると男の目が更に酷くなる。

正直、薬か何かやつているのではないかと思うぐらいにだ。

そして嫌な予感の大本に気づいた。男が腰にぶら下げているデッキからだ。

あのデッキの中から不味い感じがして仕方がない。

先程から遊里の背中は汗がびっしょりである。

「ぎぎぎきさまあ！そいつの騎士かあ?！」

「騎士かどうかは知らないが、あんたの敵なのは間違いないよ」

「ならデュエルだあ！勝つたらそいつは俺の女だあ！」

「その理論はおかしい」

ていうか女性の意志は無視かよ。

既にデュエルディスクがセットされDゲイザーでロックされている。

勿論、逃げようと、正直逃げたいだがあの嫌な予感を放置するのは危険な気がする。

遊里はそう覚悟を決めると、後ろにいる女性に逃げてもいい事と警察を呼んでいる事を伝える。

が、どうにも逃げる様子がない。

まさかと思うが彼女もデュエル脳に侵され、賞品になる事を是としているのだろうか。そうだとしたらさっさと逃げろと言いたい所である。

まあ、いいか。と他人事のように遊里は後ろの女性について考えるのを放棄した。

とりあえず勝てばいいのだ勝てば。

『デュエル！』

あつ、この手札なら1キルルト行けるや。

遊里はドローしたカードを見ながらそう呟いた後、相手の展開を見た後に。

「フォートレスとギアギガントX、ハルベルトのダイレクトアタックで終わり」
大嵐とブラック・ホールぶっぱからの展開であっさりと終了してしまった。

聖騎士デツキのようだったが、関係なかった。

しかし嫌な予感は何だっただろうか。

そう遊里が思った瞬間、倒れた男のデツキから何故かカードが飛んできて遊里の手元にやってきた。

それを思わず手に取った瞬間、冷や汗が止まらなくなる。

そのカードは……。

「な、ナンバーズ……!?!」

《No. 23 冥界の霊騎士ランスロット》。

遊馬達やバリアン達が求めているアストラルの記憶の結晶。

なるほど、と納得する。

確かにこのカードならば男の奇妙な様子にも説明がつく。ナンバーズに取り付かれたのだろう。

そして勝利した遊里の手元にやってきたという事だ。

しかしそれを受け取った遊里の気分がどんどんと悪くなっていく。

頭がガンガンするし、吐き気がする衝動に襲われていく。このままでは不味い。

そう判断すると、これをさっさと遊馬達に渡すべく病院へと走り出す。

女性が何か言っている様子が見られたが、今はそれ所ではない。

今は平気そうで全然平気ではないのだが、とりあえず平気だとしてもこのままでは遊里自身がナンバーズに取り付かれる可能性が高い。

女性にも迷惑をかける可能性があるし、ここは早く行くべきだろう。

遊里は具合が悪くなっているのを感じながら病院に向かって爆走していった。

それを呆然とした様子で見つめる女性。

お礼が言いたかったのだが、突然走り出した彼に何も言えずにいた。

倒れて気を失った男を見てどうしたものかと思っていると、よく知った声が女性にか
けられた。

「……どうしたんだ溜那?」

「あつ、カイト君」

女性——溜那が目を声がした方向に目を向けると傘をさし、どうにも似合わないフルーツの詰め合わせを持った天城カイトの姿があった。

「よ、よう2人とも……元気そうだな……」

「おっ、遊里ってう、うわああああ!?」

「お、おい!?!どうしたんだ!?!」

尚、遊里は顔を真っ青を通りこして真っ白な状態になっていた為、遊馬と凌牙に盛大に心配されたとの事。

ナンバーズは一般人が持つには危険極まりないカードである。

3 VS天城カイト

「遊里、特訓だ！」

「は？」

唐突な遊馬の言葉に呆けた声を上げてしまう遊里。

ここはハートランド学園の屋上。

昼休みの時間、遊里はこの隅っこで食事を取る事がたまにあるのだが、今日はそんな偶にの日であった。

そこにやってきたのはここ最近、知り合った九十九遊馬とその愉快的仲間達であった。

「……特訓？」

「おう」

話が見えない遊里。

一体何があったのか、やる気に満ち溢れていて説明してくれそうにもない遊馬ではなくその後ろにいるメンバーに目で質問をする。

それに答えたのは一緒にやってきたであろう凌牙であった。

「お前は知らないだろうがこの間、バリアンの連中と戦ってきた」

「もしかして真月って奴がいけない事に何か関係してるのか？」

遊里の放った一言に凌牙だけではなく遊馬を含めた全員が驚いた表情になる。

「ゆ、遊里は真月の事を覚えているのか？」

「……？ああ」

遊馬の震えた声に頷くと、やはり驚いた表情になる皆。

どういふ事か遊里が聞いてみると、真月の正体がベクターであり先日、色々あつて倒してきたとの事。

そして学園に戻ってくると真月零がいた痕跡が何一つ残っておらず、誰の記憶にも残っていないかつたらしい。

なるほど、と遊里は心の中で納得する。

現■世界で真月の存在はどうなったのか疑問に思っていたのだが痕跡も記憶もなくなっていたのか。

「で、どうして特訓なんだ？」

「確かにバリアンを撃退する事には成功した。けど正直、ギリギリの戦いだつたんだ」

「だから特訓か」

「ああ！もつと強くなるんだ！」

やるぞー！と両手を大空にかかげる遊馬。

元氣一杯だな、と思うとふむ、と考え始める。

特訓、とは何をする気なのかと思うがやはりデュエル三昧か。

後はデツキの構築や戦術の練り直し。色々とやる事がある。ついでに言えば体を鍛える事だって大事だ。突っ込み？今更だ。

「そういう事ならいいけど、何かプランはあるのか？」

「おう！この事を話したら、場所を貸してくれるって言うてくれたんだ！」

「それに今週は連休があるだろ。そこを使って、な」

遊馬の問いに凌牙が続いて答えてくれる。

なるほど。プランはしっかりあるようだ。

後はそこで先程、考えた通りデュエルの特訓をするのだろう。

「分かった。構わないがどうして俺を？」

遊里は何回かバリアンの戦いに巻き込まれはしたしある程度の事情も知っているが、実質的には部外者だ。

なのはどうして？

そう遊里が疑問に思うのは当然の事であった。

「お前の実力は知っているし特訓相手にちょうどいいからな」

「そういう事！」

2人の問いに納得する。

そういう事ならば問題はない。

「分かった。参加させてもらう」

「おう！ありがとう！」

「後で場所の地図と日時を教えてください」

「ああ」

「んじゃみんな飯にしようぜ！」

「はいーい！」

遊里から色好い返事を貰えた事で和やかな雰囲気の流れる。

思いついに弁当を広げて食事を始めたメンバーを見ながら遊里はふと思う。

これがずっと続けばいいのにな、と。

しかし知っている。これから彼等には試練が待ち構えている事を。

自分には何ができるんだろうな、と遊里は思った。

かつて原■には関わらないと決めていた彼に変化が訪れていた証拠でもあった。

その日の夜、遊里のDゲイザーに遊馬からメールが届いていた。

特訓もとい合宿の場所と日時だ。

場所は……ハートランドシティ中心にある塔。

D r. フェイカーの拠点である。

「今日はお招きいただきありがとうございます。どうぞこれを」

「おお、わざわざありがとうございます。今日はゆつくりしていくがいい」

「ありがとうございます」

合宿初日。遊里がまずやった事はD r. フェイカーにお土産を渡す事であった。

この場所を提供してくれたのがD r. フェイカーだと聞いていた為である。

さて、そんなお土産を渡した後、案内にやってきたのは一体のロボットだ。残念ながらオービタル7ではないようだ。

ロボットに案内されて辿り着いた場所は大きな部屋。ここならば大型モンスターを出しても問題ないだろう。

中に入ると早速、誰かがデュエルをしているらしい。

そこにいたのは巨大な光の竜。

あれは間違いなく……。

「銀河眼の光子竜か」

天城カイトの操るエースモンスター。

それが今、この場所に光臨していた。

相手は遊馬だがどうやら遊馬が劣勢らしい。

さすがは原■において、ただ1度も主人公に負けなかったライバルキャラならではの。

その実力は間違いなくトップクラスであろう。

遊里の到着に気づいたのは、デュエルを見守っていた凌牙であった。

適当に挨拶すると、2人のデュエルを観戦する。他にも小鳥や璃緒などいつもメンバ―も揃っているようだ。

暫く観戦していると決着がつく。勝ったのはやはりカイトのようであった。

「うわあー！また負けちゃった！」

ゴロンと後ろに倒れこむ遊馬。しかしその表情に暗いものは何もない。

カイトとのデュエルを全力で楽しんだ証拠だろう。

デュエルが終わればやってきた遊里に気づいたのだろう。遊馬が倒れたまま挨拶してくる。

「おっす遊里！」

「よう、惜しかったな」

「ああ。また負けちまったよ。でもぜってー次は勝つ！」

飛び起きると同時にビシッとカイトに向けて宣言する遊馬。

それを見たカイトは澄ました顔で。

「何度でもかかってくればいい」

なるほど、クールな奴である。

遊里がうむ、と頷いているとカイトの視線が遊里へと向く。

何かしたのだろうか？と遊里が思うと、先にカイトが口を開いた。

「なるほど、お前が青山遊里か」

「ああ。はじめまして、知ってるみたいだが青山遊里だ」

「天城カイトだ。お前の事は遊馬達に聞くより知っていた」

衝撃の一言である。

はて、いつカイトに目をつけられるような事をしたのだろうか？

「前にナンバーズの所持候補者として上がった事がある。その時に知った」

「ナンバーズは持ってないぞ」

正確に言えば先日、《No. 23 冥界の霊騎士ランスロット》を手に入れたのだが

持ったままでいると乗っ取られそうだったので、その日の内に遊馬に渡してある。

「それって……」

「ああ」

「なるほどな」

遊馬達は納得しているようだが遊里には話が見えてこない。

しかし前、とは多分だがカイトがナンバーズハンターとして活動していた頃だろうかとは想像がついた。

ナンバーズは強いデュエリストの元に行きやすい。

それならば強い人物をマークしていくのは至極当然の事である。

尚、遊里がマークされた原因としては。

「過去にデュエル大会において10回連続優勝なんてやっていれば嫌でも目につく」

「10回連続優勝!?!」

カイトの一言に遊馬が驚愕した表情で遊里を見る。

10回連続優勝など普通ではない。

遊里は苦笑する。随分と前の話だ。

「懐かしいな」

「数年前に離れた地方で大会が集中した時期があった。その大会を総なめしたのが青山遊里という10歳の子供だったそうだ」

「あの時は若かったからな」

「おい15歳」

凌牙の突っ込みを華麗に無視する。

今、考えても随分とやんちゃしてた頃だな、と遊里は思っている。

遊戯王の世界に来て、賞金ありの大会があると知って思わず調子にのって大暴れしたのだ。

それからは自重して、大会にはほぼ出ていない。ワールド・デュエル・カーニバルも出た様子はない。

「なんで出なかったんだ？」

「面倒だった」

酷い一言である。

さて、遊里はカイトに改めて向き直る。

「で、それがどうかしたのか？」

「お前に興味があつた」

カイトはそれだけ言うのと再びデュエルディスクを構えなおす。

興味とは即ち。

「デュエルか」

「ああ」

「いいね、やろうか」

見事なデュエル脳だが何、気にする事はない。

それに遊里としてもカイトとのデュエルは興味があった。

その実力は現■からして知っている。興味が出ないという方が嘘である。

遊里もデュエルディスクを構える。

そんな戦意溢れる2人の様子にギャラリーが沸く。

お互いの実力の高さを知っているからだ。

遊里とカイトが離れた場所につく。

「行くぞー!」

「ああー!」

『デュエル!!』

デュエルが始まる。

そんな様子を離れた場所で1人の女性が見ていた。

「もしかして彼は……」

「まずは俺のターン、ドロー!」

先行を取ったのは遊里。

しかしその心の表情はあまりよろしくない。

(手札がモンスターが多い。このタイミングで使える魔法もセットするものもないし……これかな)

遊里の目の前に裏側表示でセットされたカードが現れる。

「俺はモンスターをセットしてターンエンドだ」

「俺のターン！」

遊里がエンドすると同時にカイトがカードをドロウする。

そのまま流れるようにカイトは1体のモンスターを召喚した。

「俺は《フォトン・スラッシュャー》を特殊召喚する！このカードは自分フィールド上にモンスターがいない時、特殊召喚できる！」

まばゆい剣戟と共に現れたのは光の剣士。

レベル4の下級モンスターだがその攻撃力は2100。非常に強力なモンスターだ。

普段のカイトならばここに更なるモンスターを召喚し、自身のエースを出すかエクスーツ召喚をしてくるであろう。

実際、原■でも多くとった行動だ。

しかし。

「行け、《フォトン・スラッシュャー》！セットモンスターに攻撃！」

「破壊されたのは《ライトロード・ハンター ライコウ》だ。そしてリバース効果発動。ライコウがリバースした時、フィールド上のカード1枚を破壊する、破壊するのは《フォトン・スラッシュャー》！」

「チッ！」

光の剣士が斬りかかったが、そこに現れたのは白き獣。

そこから放たれた光が光の剣士を飲み込み消滅させていった。しかし白き獣も力尽きたように消滅していった。

しかしその力は代償が伴うものだ。

「そして俺はデツキの上からカードを3枚墓地に送る」

「……俺はモンスターをセットしてターンエンド」

カイトの前にモンスターがセットされる。

慎重である。

少なくとも遊馬や凌牙達からそう見えていた。

「……カイトの奴、いつもより慎重じゃないか？」

「それだけあの野郎を警戒しているって事かもな」

普段のカイトならば「ターン目から《銀河眼の光子竜》を出していてもおかしくはな

いのだから。

「俺のターン！」

ドロローしたカードを見て悪くないと、遊里は思う。

（さつき落ちたカードはネクガ、ブレスル、ライデン。落ちは悪くない、手札もようやくここいつが来てくれた）

手札から1枚のカードを引き抜くと、そのままそれを発動した。

「俺は魔法カード、《ソーラー・エクステンジ》を発動！ライトロードと名のつくモンスター1枚を捨てて、カードを2枚ドロローする！俺が捨てたのは《ライトロード・エンジェル ケルビム》！」

ライトロードと名のつく天使が墓地に送られると、遊里のデッキから新たなカードが2枚手札に加えられる。

よくある2：2の手札交換カードだ。

だがそれだけではない。

「その後、俺はデッキの上からカードを2枚墓地に送る」

「デッキからカードを墓地に送り続けているだと……？」

困惑するカイトの様子に遊馬達も同じ思いを抱いていた。

自分からデッキ破壊をするようなものは見た事がない。

逆に一番冷静なのは凌牙であった。これは凌牙自身が遊里が使うデツキの事をよく知っているからであり、最初に見た時は困惑したものだ。

（自らのデツキ破壊、あれこそがあのデツキの本領を発揮する為に必要な事だなんて誰が思いつくかよ）

それと同時にカイトも冷静な頭でしつかりと相手のデツキを分析していた。

（奴は自分からカードを墓地に送っている。先程のライコウの効果を考えれば、カードを墓地に送る事に何か意味がある筈だ）

「俺は《ライトロード・サモナー ルミナス》を召喚。そしてその効果を発動！手札を1枚捨てて、墓地に存在するレベル4以下のライトロードと名のつくモンスターを1体、特殊召喚する！手札の《ネクロ・ガードナー》をコストに蘇れ《ライトロード・ウオリアー ガロス》！」

戦場に現れたのは扇情的な衣装に身を包んだ女性であった。

ルミナスが踊りのような儀式をすると、遊里の手札1枚を対価にして墓地から強靱な肉体を持つ戦士が蘇った。

（ライデンの本来の力を使えばあれを出せるが、使う訳にはいかないからな）

レベル7であり白き柀から繰り出される天使の名を持つドラゴンがいるが、この世界においてシ■※口召喚は使えない。

いや、使えるのだからその後が色々問題が出てくるのは必至である。

だからこそ蘇らせたのはライデンではなく、『ソーラー・エクステンジ』の時に落ちたガロスを蘇らせたのだ。

「バトル！ガロスでセットモンスターに攻撃！」

「俺のセットモンスターは『シャインエンジェル』！破壊され墓地に送られるがその効果を発動！デッキから攻撃力1500以下の光属性のモンスターを特殊召喚する！来い！『フォトン・チャージマン』」

ガロスの槍が光の天使を一瞬にして破壊されるが、その天使は最後の力を振り絞りカイトのデッキに光の道を作り出す。

その光の道を通って現れたのは光を溜め込み、己の力を上げる事が出来る戦士であった。

その攻撃力は1000と決して高くはない。

しかし攻撃力1850のガロスならばどうにかなるが、攻撃力1000しかないルミナスでは相打ちする事しか出来ない。

さて、どうするか。相打ちを狙うかどうか遊里は手札を見ながら悩む。

（カイトの場にあまりモンスターは残しておくのは良くないが、奴のデッキは特殊召喚する方法も多い。ネクガもあるしここは墓地肥やしを優先するべきかな）

墓地の溜まりは悪くないとは言え、十分とは言えない。

ここは相打ちせず、次のターンに繋げる事にした。

「バトルフェイズを終了。俺はカードを1枚セットし、エンドフェイズに移行する。この時、ルミナスの効果を発動！デッキの上からカードを3枚墓地に送る！」

「やはり墓地にカードを送り続けるのか……！」

「ルミナスの効果でデッキからカードを3枚送り、更にガロスの効果が発動！ライトロードと名のついたモンスターの効果でデッキからカードが送られた時、更にカードを2枚墓地に送る。そしてその中にライトロードと名のつくモンスターがあった時、その数だけカードをドローする！」

「デッキ破壊と同時にドロー加速するだ……！」

「でも凄い勢いでデッキが減ってる……！」

ルミナスの光によりカードが3枚送られ、更にその光に連動してガロスの効果によりカードが2枚墓地に送られる。

それだけではない。

「ガロスの効果で送られたカードの中に《ライトロード・モンク エイリン》があったので1枚カードをドローするぜ！」

この1ターンで遊里は10枚もデッキを削った事になる。

普通のデツキが40枚だとすると既に3割もカードがなくなった事になる。

しかし遊里の表情に変化はない。

それを見れば何かしらの意味があるのだと誰も気づくだろう。

「俺のターン、ドロロー！俺は《フォトン・サークラー》を召喚！」

カイトが1体のモンスターを召喚する。

これでレベル4のモンスターが二体揃った事になる。

となれば。

「俺はレベル4の《フォトン・チャージマン》と《フォトン・サークラー》でオーバーレイ！エクスリーブズ召喚!!現れる！《輝光帝ギヤラクシオン》!!」

二振りの剣を携えた銀河の竜を呼び出す事が出来る光帝が光臨した。

その攻撃力は2000だが、そのカードの本領は効果である。

「俺はギヤラクシオンの効果を発動！オーバーレイユニットを2つ使う事により、デツキから《銀河眼の光子竜》を特殊召喚する事が出来……っ!？」

「何っ!？」

効果を使おうとオーバーレイユニットの力を剣に蓄えたその瞬間、ギヤラクシオンの胸が次元の亀裂のような場所から現れたモンスターの手が貫いていたのだ。

そのせいもギヤラクシオンから光が消えていく。

同時にデツキから輝いていた光の竜の反応も消えていく。

「罨カード、《ブレイクスルー・スキル》！このカードによりフィールド上のモンスター1体の効果をエンドフェイズまで無効化する。これでギヤラクシオンの効果を無効化する」

「くっ！」

「カイトの《銀河眼の光子竜》を封じられたか……」

《銀河眼の光子竜》はカイトの切り札。

それを出す事が出来ないとは……。

「だがギヤラクシオンの攻撃力はそちらよりも上だ！行け、ギヤラクシオン！ルミナスを攻撃！」

「くっ！」

ギヤラクシオンの剣がルミナスを捕らえる。

攻撃力10000では20000のギヤラクシオンに対して成す術はない。一瞬にして破壊されてしまった。

これで遊里のライフは3000に減少する。

「俺はカードを1枚セットしてターンエンド」

「俺のターン、ドロー」

カイトの場にはオーバーレイユニットを使い切ったギヤラクシオンとセットされた魔法・罨カードが1枚。

さて、どうするべきか。

「……よし、俺は《ライトロード・マジシャン ライラ》を召喚する！」
杖を携えた美しき女魔術師がガロスの横に現れる。

攻撃力は1700とギヤラクシオンには届かないが、これでレベル4のモンスターが二体揃った事になる。

「まずはライラの効果を発動！ 相手フィールド上の魔法・罨カードを1枚破壊する！」
「させるか！ 俺は速攻魔法《月の書》を発動！ このカードはフィールド上のモンスター1体を裏側守備にする事が出来る。ライラに対して発動！」

魔力で魔法・罨カードを破壊しようとしていたライラに月の魔力が襲い掛かる。

驚きの表情を見せるが、ライラはあつという間に月の力により力を封じられ裏側表示に戻されてしまった。

攻撃表示でこのターンに召喚した以上、ライラは表示形式を変更する事が出来ない。

これによりエクシーズ召喚も行う事が出来なくなってしまう。

「やる……。俺はこのままターンエンドだ」

「ガロスが攻撃表示のままなのか？」

そのままエンドした遊里の行動に疑問を覚える遊馬。

明らかに何かを誘っているようにしか見えない。

そんな問いに答えたのは傍で見守っていたアストラルであった。

『《オネスト》だろうな』

「そう考えるのが妥当だろうな」

「ああ、なるほど！」

《オネスト》。遊里が何度か使用している手札から発動する強力なモンスターだ。

凌牙は何度もこれで倒された記憶があるし、遊馬達も最近目の前で見た事からはつきりと覚えていた。

つまりガロスを攻撃表示のままにしているのは《オネスト》による撃退を狙っているのだろう。

もしくはそれ自体がブラフなのかもしれない。

さて、カイトはどうするのだろうか。

「俺のターン」

そのカイトは手札を見ながらどうするべきか考えていた。

先程のドローでやるべき事は見えてきたが、確かに攻撃表示のままのガロスに何かあると感じ取っていた。

かと言って、このまま攻撃しないのもやはり問題だ。
ならば臆する事はない。

己の魂を信じるだけである。

「俺は手札の《フォトン・ケルベロス》を捨てて魔法カード《フォトン・トレード》を
発動！カードを2枚ドロウする！」

遊里が先程使った《ソーラー・エクステンジ》と同じく手札交換用のカードである。
光の獣が墓地に送られた変わりに新しいカードが2枚手札に舞い込む。

その2枚を見た瞬間、ニヤリとカイトが笑ったような気がした。

「俺の場にエクシーズモンスターがいる時、《フォトン・スレイヤー》を守備表示で特殊
召喚する！」

光の騎士とも言うべきモンスターが守備形態でフィールドに現れる。

攻撃力2100という数値を持っていながら、残念ながら現状その力を発揮する事は
ないだろう。

しかし遊里の目つきが変わる。何が来るか察したのだろう。

「俺は攻撃力2000以上のモンスターを2体リリース!!」

《輝光帝ギラクシオン》と《フォトン・スレイヤー》が光の渦となつて消えると共に
カイトの手に赤い十字架を形取った代物が現れる。

それを上空に投げる。

「闇に輝く銀河よ、希望の光になりて我が僕に宿れ！光の化身、ここに降臨！現れる、《銀河眼の光子竜》！」

十字架を中心に光が集まるとその中心から光の竜が現れる。

美しい閃光を放ちながら佇む《銀河眼の光子竜》。

ガロスも裏側表示のライラもその力の強さに圧倒されている。

「行け！《銀河眼の光子竜》！ガロスに攻撃！破滅のフォトン・ストリーム!!」

「俺は墓地にある《ネクロ・ガードナー》の効果を発動！こいつを除外して攻撃を1度だけ無効にする！」

光の竜から放たれた破滅の本流がガロスへと向かうが、その前に現れたのは幻影となった鎧を身にまとったモンスターだ。

それがガロスに放たれた破滅の光を完全に防ぎきっていた。

「くっ……」

《銀河眼の光子竜》には互いのモンスターを除外する効果はあるが、現状使う利点はない。

素直に攻撃を防がれる事にする。

しかし遊里の場にレベル4のモンスターが2体残ったままだ。《銀河眼の光子竜》は

対エクシーズモンスターの効果を持っているが、このままにしておくのは正直心もとないのが本音である。

だが悲しいかな、カイトの手札にセットできるカードはない。

「……俺はこのままターンエンド」

「俺のターン！俺はライラを反転召喚する！」

月の力で封じられていた魔術師が再び現れる。

しかし相手は攻撃力3000の光の竜。2体のモンスターをもつてしても勝つ事は出来ない。

「俺はレベル4のライラとガロスでオーバーレイ！エクシーズ召喚！来い《鳥銃士カステル》！」

銃を持った鳥人のようなモンスターが現れる。

しかし攻撃力は2000とやはり攻撃力3000の《銀河眼の光子竜》には及ばない。だがそれは攻撃力だけの話だ。

「カステルの効果を発動！オーバーレイユニットを2つ使い、表側表示のカード1枚をデッキに戻す！俺が選択するのは当然！」

「くっ、ギョラクシーアイズ！」

カステルが持つ銃にオーバーレイユニットの光が2つ集うと、銃を発射。その銃弾は

《銀河眼の光子竜》の中心部をあつさりと捕らえた。

それと同時に先程まで圧倒的な力を保持していた光の竜がデッキへと送り返される。

これでカイトの場には何もカードがない状態だ。

「カステルでダイレクトアタック！」

「ぐっ、ううっ！」

カイトのライフが一気に半分の2000に減らされる。

だがカイトの目から光が消える事はない。この程度のピンチなら慣れたものだ。

「カードをセットしてターンエンド！」

「俺のターン！俺は《フォトン・クラッシャー》を召喚！更に攻撃力2000以上のモン

スターがいる時、《オーバレイ・ブースター》を特殊召喚する事ができる！」

「ん……っであ！」

巨大な棍棒のようなものをもった戦士と背中にブースターを背負った戦士が現れる。

遊里は後者である戦士が攻撃表示のまま特殊召喚された事に驚くが一瞬にしてそ

の理由を悟った。

あれはO■G化されて調整されたものではなく本来の姿なのだ。だからこそ攻撃表

示のままなのだろう。

「まず《フォトン・クラッシャー》でカステルを攻撃！」

「相打ちだ……い！」

銃と棍棒で打ちあい殴りあう。一瞬にして攻撃力2000同士のモンスターはその姿を散らす事になった。

だが攻撃はまだ終わっていない。

「そして《オーバーレイ・ブースター》でダイレクトアタック！」

「俺は墓地の《ネクロ・ガードナー》を発動！攻撃は無効だ！」

2枚目の《ネクロ・ガードナー》が除外され攻撃を防ぐ。

しかしこれで墓地の《ネクロ・ガードナー》は消費された事になる。

「ターンエンドだ」

「俺のターン、《ライトロード・アーチャー フェリス》を捨てて《ソーラー・エクステーション》を発動！2枚ドロローして2枚墓地に送る……」

再び手札交換を行うが、遊里の表情は暗い。

今ので墓地に《ブラック・ホール》と《大嵐》が落ちてしまったのだから当然と言えば当然だが。

現状、展開できるような手札ではない。

ここは逃げの一手だと分かっているでもモンスターをセットしてエンドする事しか出来ないでいた。

「モンスターをセットしてターンエンド」

「俺のターン、《オーバーレイ・ブースター》でセットモンスターを攻撃！」

「《ネクロ・ガードナー》だ」

「……ターンエンドだ」

カイトもまた動けないでいた。

手札は悪くはないが、展開する事ができないでいた。

「俺のターン、ドロー」

ドローしたカードを見て遊里の目に力が入る。

それを見て何かが来ると一瞬で理解する。カイトだけではなくギャラリーの方にも力が入る。

「俺は魔法カード、《おろかな埋葬》を発動。自分のデッキからモンスターを1体、墓地に送る。俺が送るのは《ライトロード・ビースト ウォルフ》」

「自分のモンスターを墓地に？」

「ああ、見てな」

ただ1人、ライトロードデッキを知っている凌牙は何をするのかすぐに理解した。

ウォルフと言えば……。

「この時、《ライトロード・ビースト ウォルフ》の効果が発動する！こいつがデッキか

ら墓地に送られた時、こいつを特殊召喚する！」

「なんだと!？」

「蘇れ《ライトロード・ビースト ウォルフ》！」

白い獣戦士が墓地から蘇る。

攻撃力は2100。《オーバーレイ・ブースター》を上回った。

「更に《ライトロード・ウォリアー ガロス》を召喚する」

「これで先輩の場にはレベル4のモンスターが再び2体……」

「来るか……!？」

攻撃力2100と1850のモンスター。

両方で攻撃すれば、カイトに大ダメージが入るがそれでも50というぎりぎりの数値が残る。

勿論、そんな中途半端な数値を遊里が残すような真似をする筈もない。

「俺はガロスとウォルフでオーバーレイネットワークを構築！」

ガロスとウォルフが光に消えて新たな力を呼び起こす。

しかしそこから現れたのはライトロードを象徴する光ではない。

「これは……闇か!？」

「漆黒の闇より愚鈍なる力に抗う反逆の牙！今、降臨せよ！エクシーズ召喚！ランク4

！《ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン》！」

反逆を司る闇のドラゴンが光臨した。

しかし攻撃力は2500と総合ダメージは先程よりも低い。

ならばその効果こそが本命。

「ダーク・リベリオンの効果発動！オーバレイユニットを2つ使い、相手モンスターの攻撃力を半分にし、その数値分だけこのモンスターの攻撃力をアップする！トリーズン・デイスチャージ！」

《ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン》の翼が開くと雷のような光線が《オーバレイ・ブースター》に襲い掛かると縛り付けるように拘束する。

すると力が抜けるように《オーバレイ・ブースター》が沈黙すると、その力を吸収した闇のドラゴンが咆哮を上げる。

「これで《オーバレイ・ブースター》の攻撃力は1000。対して《ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン》は3500」

「こいつが決まれば遊里の勝ちだ」

「す、すげえぜ！」

「行くぞ！ダーク・リベリオンの攻撃！反逆のライトニング・デイスオベイ！」

「決まったか!？」

雷の翼を纏って、アゴ下にある刃で襲い掛かる。

これが決まれば2500のダメージ。カイトの敗北である。

しかしこれでカイトが負ける筈もない。

「俺は手札から《クリフトン》を発動！ライフを半分にしてこのターン自分が受ける全てのダメージは0になる！」

「チツ、だが《オーバーレイ・ブースター》は破壊だ！」

反逆の牙が《オーバーレイ・ブースター》を破壊するも、カイトに襲い掛かるダメージは《クリフトン》が発生する光の障壁により無効化されている。

しかしこれでカイトの残りライフは1000。

下手なモンスターを出すのが難しくなってきた数値だ。

「仕留めそこなった……これでターンエンドだ」

「俺のターン！俺は魔法カード《逆境の宝札》を発動！相手フィールド上に特殊召喚されたモンスターが存在し、自分の場にモンスターが存在しない時に発動できる。そしてデッキからカードを2枚ドローする」

「……欲しいな、あのカード」

カイトが発動したカードを見てぼそりと遊里が呟く。

色々なデッキに対して使えるし、手札アドも稼げるドローソース。欲しくない訳がな

い。

「よし、俺は速攻魔法《ギャラクシー・ストーム》を発動！オーバーレイユニットがないがエクシーズモンスター体を選択して破壊する！」

「くっ、ダーク・リベリオンが……！」

反逆のドラゴンが一瞬にして破壊される。

ここでドロローしてくるカイトのドロロー力の強さにさすがと言わざるをえない遊里である。

「そして《ダイブレーカー》を召喚！」

奇妙な形の剣を持った光の戦士が現れる。

本来、特殊召喚された時に発動する効果を持つているが今は残念ながらその効果を発動する事はない。

しかしそれでも十分だ。

「《ダイブレーカー》でダイレクトアタック！」

「くっ、通るぜ……！」

「これでターンエンドだ」

これで遊里のライフも1300になった。

カイトの操るギャラクシーアイズの攻撃力を考えれば残りライフが一瞬で消し飛ぶ

可能性がある。

迂闊な行動ができなくなったのは遊里も同じだ。

「俺のターン、ドロロー……よし、このタイミングで来たか！俺は墓地に眠る《裁きの龍》と《カオス・ソーサラー》を除外！」

序盤に落ちてしまった切り札を除外する。

それを聞いて一気にカイトの警戒心が高まる。

光と闇を除外。これだけ聞けばあるカードを思い出させるには十分すぎた。

「俺は《カオス・ソーサラー》を特殊召喚する！」

「……さすがに開闢ではなかったか」

若干だがカイトの声に安堵のようなものが混ざったのをなんとなくだがオービタル7は感じ取っていた。

それ程までに強力なカードなのである。

だが侮るな。《カオス・ソーサラー》とて決して弱いカードではないのだ。

（しかしどうするかな。除外するかライフを削るか……）

《カオス・ソーサラー》には表側表示のモンスターを除外する力を持っている。

その効果を使えばカイトの場のモンスターは次元の彼方に消え去るが攻撃はできなくなる。

本来ならばここで追撃のモンスターを出したい所ではあるが、残念ながら手札に追撃として出せるモンスターはいない。

《オネスト》の事を考えれば除外してもいいのだが、残りライフを考えれば攻撃してライフを削る選択肢も悪くはない。《ディブレイカー》自体は単独ではそれ程、強力なカードではないのだから。

数秒の思考の後、遊里が出した結論は。

「《カオス・ソーサラー》で《ディブレイカー》を攻撃！」
「くっ」

《カオス・ソーサラー》の次元の歪みのようなものが、《ディブレイカー》を襲うとねじ切りられるように破壊される。

これでカイトのライフはわずか400。本格的に追い詰められたと言っている。

「……ターンエンド」
「俺のターン、ドロロー！」

カイトの手札は4枚。逆転するには十分すぎる枚数だが……。

「魔法カード《フォトン・サブライメーション》を発動！自分の墓地にあるフォトンと名のつくモンスターを2体除外してカードを2枚ドロローする！除外するのは《フォトン・サークラー》と《フォトン・ケルベロス》！」

2体のフォトンモンスターが次元の狭間に消えると、そこから発生したエネルギーがカイトのデッキからカードを2枚ドロローさせる。

これで手札は5枚。

因みにそれを見て、遊里が羨ましそうに見ていたのは内緒だ。

「行くぞ！魔法カード《戦士の生還》を発動！墓地から戦士族モンスターを1体、手札に戻す。俺が戻すのは《フォトン・スラッシュャー》！そしてそのまま《フォトン・スラッシュャー》を特殊召喚する！」

光の剣士が生還すると同時に再びフィールド上に登場する。

だが攻撃力2300の《カオス・ソーサラー》の敵ではない。

勿論、カイトには織り込み済みだ。

「更に《フォトン・デルタ・ウィング》を召喚する！」

「これでカイトの場にレベル4のモンスターが2体揃った！」

戦闘機のようなモンスターが光の剣士の横に並び立つ。

ここまでくれば次の行動は誰にでも理解できた。

「レベル4の《フォトン・スラッシュャー》と《フォトン・デルタ・ウィング》でオーバーレイ！エクシーズ召喚！来い《輝光子パラディオス》！」

光の貴公子が光臨する。

その攻撃力は2000だが当然、その効果がそれを補う。

「パラディオスの効果を発動！オーバレイユニットを1つ使い、相手モンスターの攻撃力を0にし、このカード以外の表側表示の効果を無効化につ！」

「やらせないで、《ブレイクスルー・スキル》だ。効果は分かっているよな」

「ああ。だがまだ終わりではない！墓地の《オーバレイ・ブースター》の効果を発動！こいつを除外してオーバレイユニットを持ったエクシーズモンスター1体を選択する。選択したモンスターの持つオーバレイユニットの数かける500アップする！」

「これでパラディオスの攻撃力は2500か……！」

「その通りだ！行け、パラディオス！《カオス・ソーサラー》を破壊しろ！」

（どうする……？）

遊里は墓地に眠る最後の《ネクロ・ガードナー》で攻撃を防ぐか悩む。

攻撃を防げば次のターンにパラディオスを除外する事が出来る。

が、そこまでだ。

次のターンにもモンスターを引き込めなければ再び攻撃力2300のモンスターを立たせたままになる。今度は防御カードなしでだ。

数秒で思考を終わらせる。

「《カオス・ソーサラー》が破壊される」

「俺はカードを1枚セットしてターンエンドだ！」

これで遊里の場にはモンスターも魔法・罠もなし。

逆にカイトの場にはパラディオスとセットカードが1枚。

カイトが有利そうに見えるが、残りライフはわずか400。遊里もまた残りライフは1100しか残されていない。

今の所、互いにモンスターを繰り出して直撃は避けているも、それがなくなり無防備になれば一瞬でライフは0になるだろう。

それを見ている遊馬達の胸が熱くなってくる。

熱い2人の攻防に燃え上がらない方がおかしいのだ。

「……俺のターン、ドロー！」

遊里がドローしたカード。

それを見た遊里が初めて表情を変える。それは勝利を確信したような笑みに見えた。

「行くぜ！俺の墓地にライトロードと名のつくモンスターが4種類以上いる時、こいつを手札から特殊召喚する事ができる！」

「遂に来るか、ライトロードの真の切り札！」

「真の切り札!?!」

凌牙の声に遊馬達が反応する。

先程出した《ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン》以外にも切り札があるというのか。

「ライトロードの屍を超え！降臨せよ！《裁きの龍》!!」

審判を下すライトロードの龍が光臨した。

その攻撃力は3000。

カイトの《銀河眼の光子竜》にも負けていない数値だ。

だがそれ以外にも力がある。

「《裁きの龍》の効果を発動！ライフを1000支払って、このカード以外のフィールド上のカード全てを破壊する！」

「なんだとお!?!」

ライフ1000というコストを払うも、その効果は絶大だ。

モンスターも魔法や罠も関係なく破壊されれば、今度こそカイトは丸裸だ。

だがまだ勝利の女神はカイトを見放していない。

「俺は罠カード《ミラーシールド》を発動！ライフを半分支払ってこのターンの自分への戦闘ダメージは0になる！」

「くっ、どうしようもないな」

ライフ半分という対価を支払い、カイトの周囲に光の結界が展開される。

これでこのターン、戦闘ではダメージを与える事は出来ない。

それと同時に裁きの光が放たれ、パラディオスが一瞬で破壊される。

だが光の貴公子はただ破壊されるだけではないのだ。

「そして破壊された《輝光子パラディオス》の効果でカードを1枚ドローする！」

「カードを1枚セツトしてエンドフェイズに移行、《裁きの龍》の効果でデッキの上からカードを4枚墓地に送る」

落ちていくカードを見て顔を顰める。

落ちたのは《ライトロード・メイデン ミネルバ》に《ライトロード・ドラゴン グラゴニス》に加え《カオス・ソルジャー ―開闢の使者―》や《異次元からの埋葬》までもが墓地に送られた。

前者はともかく後者2つが落ちたのは痛い所だ。

「……墓地に落ちた《ライトロード・メイデン ミネルバ》の効果発動。更にカードを1枚デッキの上から墓地に送る」

更に落ちたのは《オネスト》。

これもまた手札に欲しかったカードだ。

今ので決められなかった事を考えると、流れが悪く感じられる。

「ターンエンド」

「俺のターン、ドロー！」

しかし追い詰められているのはカイトも同じ。

このターンでどうにかしなければ敗北は必至であろう。

そしてそんな中、ドローしたのは……。

「行くぞ！俺は《銀河眼の光子竜》をコストに《トレード・イン》を発動！レベル8のモンスターを捨てる事でカードを2枚ドローする事ができる！」

「えっ、《銀河眼の光子竜》を捨てた!？」

「どうして……?」

《銀河眼の光子竜》はカイトが自らの魂とまで評したカード。

それを墓地に送るなんて考えられなかった。

しかしそれこそが《銀河眼の光子竜》を出す為に必要な行為だとしたら？

「来たか！俺は《死者蘇生》を発動！蘇れ、我が魂！《銀河眼の光子竜》！」

墓地から光の竜が再び舞い戻る。

なるほど。これならばリリース要員など必要なくフィールドに特殊召喚する事ができる。

だがこれだけでは足りない。

「更に魔法カード《銀河遠征》を発動！自分フィールド上に《銀河眼の光子竜》が存在す

る場合、自分のデッキから《銀河騎士》1体を特殊召喚できる！」

銀河の道を通じて、銀河の騎士が戦場に現れる。

これで攻撃力3000と2800のモンスターが2体揃った事になる。

このまま攻撃すれば《銀河眼の光子竜》の効果で《裁きの龍》を除外して《銀河騎士》でダイレクトアタックすれば勝ちだろう。

(だが奴の墓地には3枚目の《ネクロ・ガードナー》が残っている)

例え除外できたとしても《銀河騎士》の攻撃は通らないだろう。

そして返しのターンに《銀河騎士》を破壊されればこちらの負けだ。

攻撃に対する備えは用意できるが、やはり攻撃力3000の《裁きの龍》を残しておくのは厄介だ。

ならば。

「そして魔法カード《アステニー・オーバーレイ》を発動！」

「《アステニー・オーバーレイ》？」

遊里には聞きなれないカードだ。

だが確か何かあったような……。

「相手フィールド上に表側表示で存在するモンスターと自分フィールド上に表側表示で存在するモンスターを選択して発動できる。選択したモンスターを素材にして俺はエ

クシーズ召喚する事ができる！」

「なん……だと……!?!」

「フィールド上にはレベル8の《銀河眼の光子竜》に《銀河騎士》、そして遊里の《裁きの龍》の3体！」

「これはあれが来るぞ！」

驚愕一色に染まる遊里。

そして思い出す。あれはO■G化されていないカード。

確かにそれならば遊里は持つていないし、その存在に関する記憶も希薄だろう。

しかしそんなものはデュエルには関係ない。無慈悲に3体のモンスターが光に包まれオーバーレイネットワークを構築していく。

するとカイトが再び巨大な、そして先程とは違う槍のパーツを取り出す。

気がつけばカイトの体も赤く染まっているではないか。

「逆巻く銀河よ、今こそ怒濤の光となりて、その姿を現すがいい！降臨せよ、我が魂！《超銀河眼の光子龍》!!」

《青眼の白龍》や《サイバー・エンド・ドラゴン》などと同じ系譜。

三つの首を持った紅の光を放つ龍が光臨した。

それと同時に遊里のフィールド上にはカードが1枚セットされているだけになる。

裁きを下す龍の姿は何処にもない。

「《超銀河眼の光子龍》の攻撃！」

本来ならば幾つかの効果を持っている《超銀河眼の光子龍》だがそれは対エクシーズモンスター用のものが多く、現状ではその力を発揮する事はない。

だが攻撃力には関係ない。

4500という怒涛の数字は遊里を倒すには十分すぎる量だ。

三つに増えた龍から怒涛の光が遊里へと放たれる。

だが。

「アルティメット・フォトン・ストリーム！」

「まだまだあ！墓地の《ネクロ・ガードナー》を除外して攻撃を無効にする！」

三度、カイトの攻撃を防ぐ《ネクロ・ガードナー》。

だが今度こそ全て使い切った。

除外したカードを戻す《異次元からの埋葬》も既に墓地に送られている以上、もう使う事は出来ないだろう。

「俺はカードを一枚セットしてターンエンド！」

さて、困った事になったなど遊里は呻く。

相手の場には攻撃力4500のモンスター。

あれを対処するには《裁きの龍》やカオスモンスターが必要だ。

だと言うのに開闢とソーサラーは全て墓地に送られているし、《裁きの龍》も2体墓地や除外されており残り1枚だ。

そして遊里のライフはたった100。その効果を使う事すら出来ない状態だ。

カイトのライフも残り2000だが、攻撃力4500のモンスター相手では非常に高い壁だと言っている。

後は手札補強しつつ墓地のカードを回収できる《貪欲な壺》だが残念ながら先日、デッキから抜いており使う事はできない。

となると。

(《オネスト》引きたい所だが……)

オネストを引けばなんとかなる可能性はある。

しかし都合よく引けるものか。

(まあ、考えても仕方ないか。ドローしてから考えよう)

ドローする前に考えても仕方ないと遊里がカードをドローする。

「俺のターン、ドローー！」

ドローしたカードは…… 《オネスト》ではない。

しかし強力なカードには違いない。

さて、どうするかと自分の墓地を確認する遊里。

そこである事に気づく事になる。

「……ん？」

あるカードの枚数を確認する。

2 回数数えなおせば、なるほど足りている。

「行くぜ天城カイト！勝つのは俺だ！」

「来るがいい、青山遊里！」

「魔法カード《死者蘇生》を発動！」

「……でか！」

では蘇らせるモンスターは何か？

《裁きの龍》は手札から自身の効果でしか特殊召喚できないし、カオスモンスターの大半も蘇生条件を満たしていない。1枚蘇生できるが出してもこのターン、カイトを倒せる訳でもない。

ならば何か？

「答えはこいつだ！蘇れ《ライトロード・ドラゴン グラゴニス》！」

「なんだと!?!」

蘇ったのは《裁きの龍》よりも弱いだろうドラゴン。

なぜこいつを？

その答えは非常に簡単であった。

「こいつは墓地にあるライトロードと名のつくモンスタアの種類だけ攻撃力と守備力が300アップする！」

「何、それでは……？」

「俺の墓地に眠るのは！」

《ライトロード・ハンター ライコウ》。

《ライトロード・アサシン ライデン》。

《ライトロード・エンジェル ケルビム》。

《ライトロード・パラディン ジェイン》。

《ライトロード・モンク エイリン》。

《ライトロード・サモナー ルミナス》。

《ライトロード・ウォリアー ガロス》。

《ライトロード・マジシャン ライラ》。

《ライトロード・アーチャー フェリス》。

《ライトロード・ビースト ウォルフ》。

《ライトロード・メイデン ミネルバ》。

合計11種類のモンスター達。

つまり。

「攻撃力と守備力が3300アップして、グラゴニスの攻撃力は5300だ！」

「《超銀河眼の光子龍》をも上回っただと……!?」

その攻撃力だけなら《裁きの龍》すら及ばない数値になっている。

《超銀河眼の光子龍》も敵ではない。

「行くぞ！グラゴニスの攻撃！奴を噛み砕け！」

「まだだ！罨カード《光子化》を発動！攻撃してきたモンスター1体の攻撃を無効にしてその相手モンスター1の攻撃力分だけ自分フィールド上に存在する光属性モンスター1体の攻撃力を次の自分のエンドフェイズ時までアップする！これでグラゴニスの攻撃は無効化になり《超銀河眼の光子龍》の攻撃力は9700になる！」

「いいや、これで終わりだ！罨カード、《トラップ・スタン》を発動！このターン、このカード以外の罨カードの効果は無効化にする！これで《光子化》は無効化！」

光子になりその力を吸収しようとしていた《超銀河眼の光子龍》が強い衝撃を受ける。すると先程までの力が消滅している。

こうなれば逃げ場は……もうない。

「終わりだ、グラゴニス！《超銀河眼の光子龍》を攻撃！」

「ぐっううっ！」

正義のドラゴンが光の龍を噛み砕き散らす。

この一撃でカイトのライフが0になる。

勝ったのは遊里だ。

「お疲れさん」

「ふん……」

最後の一撃で倒れこんだカイトに手を伸ばす遊里。

悪態をつきながらも、その手を握ってカイトは立ち上がった。

「一つ言っておく」

「おう」

「次は勝つ」

短いカイトの言葉に遊里が頷く。

認めただろう遊里の事を。

「はっ、そう簡単に行くかな」

「凌牙は何連敗だったかな」

「……言うな」

煽ろうとした凌牙だったが遊里の言葉にあっさりとし黙する。

似たような台詞を吐いて、ボコボコにされた事の方が多いのだから当然か。

先程のデュエルを見て思う事があったのだろう。

遊馬はやる気満々でやるぞー！と叫んでいるし、他のメンバーも色々カードを弄りだしている。

それを見て遊里は思う。楽しい合宿になりそうだな、と。

尚、速攻で挑んできた遊馬と凌牙をあっさり返り討ちにしたのはいつもの光景である。

「ボチヤミサンタイ」

「おいばかやめろ」

ダムド様は強かった、ただそれだけである。

3. 5 将来の進路

カラスが鳴き、人々が家路につく夕暮れ時。

青山遊里と天城カイト。

2人は何故かキツチンにいた。

「んじやとりあえず野菜をばぼつと切るか」

「ああ」

遊里がまずはと玉葱を取り出す。

包丁でまず半分^に切った後、皮を全て剥き丁寧^にみじん切りにしていく。

カイトが取ったのはジャガイモだ。

「こちらはまず、皮をピーラーで剥いていき、食べやすい大きさに乱切りしていく。

「あつちは盛り上がってるなあ」

「今は遊馬と神代凌牙のデュエルか」

「ああ。どっちが勝つと思う?」

「……遊馬だ」

「んじや俺は凌牙に賭ける」

「……賭けか？」

「いや、適当に言っただけだ」

玉葱のみじん切りを終えると新しい玉葱を取り出す。

今日は人数も多いし、きつと大量に食べるだろう。1つや2つでは足りないに違いない。

カイトも同じように新しいジャガイモを取り出すと黙々と切っていく。

「あつ、勝ったのは遊馬か」

「勝ったのはいいが、最後は博打同然だな」

「そこで勝ち札を引つ張つてくれるのは強きの1つだと思うけどな」

ある程度、玉葱のみじん切りをすると次はくし型に切っていく。

ジャガイモを切り終えると、次に取り出したのは人参である。

こちらも皮を剥いた後、乱切りで切っていく。

「将来の夢、か」

「そろそろ進路を決める時期だからなあ」

「そういう貴様はどうする気だ？」

「んー……」

玉葱を切る作業を終えると、次は肉を取り出す。

本日はビーフカレーだ。

一口サイズに切つて、食べやすい状態にしていく。

「家族からはデュエルアカデミアを進められてるんだけどね……」

「……プロになるのではないのか？」

カイトが人參を切る作業を終える。

さて本番とばかりに大きいなべにサラダ油を入れて鍋を温めて行く。

最初に炒めるの肉だ。

「俺のデュエルつてプロ向きじゃないんだよね」

「……なるほど、そういう事か」

「ああ。どっちかっていうと賞金稼ぎみたいな感じかな。そういうカイトはどうなんだよ……」

肉の表面にしっかりと焼き色がつくまで炒めると、1度肉を別皿に移す。

改めてサラダ油を入れると玉葱のみじん切りを炒めて行く。玉葱が茶色になるまでしっかりとだ。

「俺は研究者としての道に進もうかと思ってる」

「親父さんの跡を継ぐんだ」

「そこは分からないが……嫌いではないからな」

「ふうん」

玉葱が茶色になってくると、残りの玉葱と人参、ジャガイモも入れて更に炒めて行く。

一方、遊里はゆで卵作りや野菜を切っていた。サラダを作る為である。

「そういえば瑠那が世話になったみたいだな、礼を言う」

「ああ、気にしないでくれ」

「父さんの助手で前から世話になっていたからな、改めて言わせてくれ」

「んじゃ受け取っておくよ」

炒めている野菜全体に火が通ると、最初に炒めておいた肉を入れてしっかりと混ぜて行く。

その後は水を入れてしっかりと煮込んで行く。

沸騰したら火を弱めてアク取りだ。

ジャガイモなどが柔らかくなるまでしっかりと煮込む。

「しっかりと遊馬達はどうするんだらうな」

「さてな。ただ……」

「ん？」

「まずはバリアンの問題はどうにかするしかないだろう」

野菜を盛り付けながらふむ、と思う。

そうだ。

まずはこの世界を狙っているというバリアンをどうにかしなければならぬ。

将来の進路について考える事など世界を救ってからでも遅くはない。

「頑張ってくれ」

「お前は協力しないのか？」

「俺にできる事ならやらせてもらうさ。でも洗脳とか色々あるからなあ」

アクを取りながらそれもそうだった、とカイトは瞠目する。

この青山遊里というデュエリストはデュエルの腕は間違いなく一流のものを持っているが、ナンバーズやバリアン達に対する耐性は皆無なのだ。

ナンバーズを持つていれば乗っ取られる可能性は高いし、バリアンには実際に洗脳されてしまったのだ。

ナンバーズの真の所有者であるアストラルと共にある遊馬達とは違うのだ。

「……そういえば凌牙の奴はなんで平気なんだ？あいつもナンバーズを持つて聞いたぜ」

「奴は何度かナンバーズを所有していた事がある。予測にすぎないが、何度もナンバーズを持った事により耐性を得たのだろう」

「カイトは？」

「今の俺はナンバーズを持っていない。持っていた頃はある装置を使って影響を無効化していた」

「へえ……」

ゆで卵の殻を剥きながらへえ、と遊里が呟く。

元々ナンバーズの洗脳効果は非常に強い。

大体の人物はナンバーズを持てばあつさり洗脳されてしまうのだ。

しかし同時に対抗策もしつかり用意できている。

因みにほんのわずかではあるが、取り込まれる事がなかった人物がいたりする。

「まっ、必要なら呼んでくれ」

「ああ、そうさせてもらおう」

「おう。さて、そろそろ仕上げに入りますか」

「ああ」

遊里はサラダを。

カイトはカレーを仕上げに行く。

既にご飯は炊けている。後はカレーが完成すれば完成だ。

「しかし他の連中、飯の事を考えてなかったのかねえ」

「普段なら瑠那が作っているんだがな……」

「あの人か。というか助手に料理とか作らせてるのかよ……」

呆れた様子で呟く遊里に、珍しく申し訳なきような表情になるカイト。

とは言え、現在の天城家で料理ができるのは助手の瑠那とカイトのみ。ハルトは要練習だし、フェイカーは残念ながら問題外である。

「悪いとは思っているんだがな……」

「まあ、大変みたいだしな」

カイトはバリアン対策で色々と動いている。

最近では《銀河眼の光子竜》についての伝承があるらしくそれについて調べているらしい。

カードに伝承とは一体、と思うのだが残念ながらこの世界では割とよくある話である。突っ込みなんてものはない。

「だがバリアンについて何か分かるかもしれない」

「バリアンについてはみんなよく知らないんだっけか」

「ああ。だからこそ情報が必要なんだ」

今まで交戦しているものの、バリアンについては未だに謎が多い。

いや、殆ど分かっていないというのが本音だろうか。

「まっ、とりあえず飯を食おうぜ、今は」

「そうだな」

煮込んでいた鍋の火を止めると、ルウを入れていく。後は弱火でじっくりと煮込んでいけば完成だ。

その間にサラダの盛り付けをすませる。

少し待てばトロミも出てきた。これで完成である。

「んじや盛るか」

「ああ」

「おーい！お前ら！飯作るの手伝えー！」

未来はまだ分からない事ばかりだ。

でもとりあえず今は目の前の食事である。

「飯だ！飯だー！」

「ご、ごめんねカイト君！準備するの忘れてたわ！」

「気にするな……運ぶのを手伝ってくれ」

腹を空かせたデュエリスト達が押し寄せてくる。

やれやれと2人が呆れながらカレーを盛っていく。

「遊里」

「おう、凌牙。手伝ってくれ」

「ああ。しかしお前が料理を出来るとは思わなかったぜ」

「基本的な事を守ってレシピを見れば出来ると思うぞ、ちゃんと見れば」
言え悲しいかな。

そういう基本的な事を無視して調理する阿呆がいるのも事実である。

だからムド○ンカレーとか認めない。

「……そんな料理を食った事があるのか？」

「……愛華がなあ」

「……悪かった」

思わずため息を吐く2人。幸せが逃げていきそうである。

「おい！2人とも早くー！」

「ああ」

「今行く」

遊里とカイトが作った料理は非常に美味しかったとだけここに残す。

4 VS神代凌牙

九十九遊馬が失われたアストラルを救いにアストラル世界へと向かっていたその頃。神代凌牙はハートランドシティにある展望台にいた。

「……」

少し前から凌牙は1つの悩みを抱えていた。

それは己がバリアンなのではないかという事だ。

遺跡での出来事。

クラゲ野郎の言葉。

実家にあつた紋章。

数々の要素が凌牙がバリアンだという事を証明していた。

そしてバリアン世界に残されているかつての仲間達の魂。

それを見て決心した。

凌牙はバリアン世界の1人。

バリアン七皇のナツシユになると決めたのだ。

そして今、バリアン七皇が揃った以上、人間世界に攻め込むと決めていた。

しかしその前にナツシユ、いや神代凌牙にはやるべき事があった。だからこそこんな誰も来る事がないような展望台で人を待っているのだ。

「悪いなドルベ……」

ポツリとナツシユが不在であつた間、バリアン世界を守っていた男に無意識のうちに詫げる。

だがそれでもこれはやらなくてはいけない事なのだ。

自分自身、神代凌牙としての決着をつけないければならない。

「……来たか」

「ああ、遅くなつて悪かつたな」

凌牙が振り向くと、展望台の入り口に1人の男が立っていた。

青山遊里である。

真剣な表情の凌牙に対して、遊里はいつもの友人に会いにきた気軽さを現すような笑顔である。

その笑顔を見てチクリと凌牙の心が痛みを上げる。

未だに凌牙を友人だと思つている遊里を裏切るような行為をこれから行うのだから。

「どうしたんだよ、急に呼び出して」

「悪いな。どうしてもやらなくちゃいけない事が出来た」

おもむろに凌牙が言葉が発すると、遊里の表情もまた真剣なものに変わる。ただ事ではない事に気づいたらしい。

「それは最近のお前の悩み事に関する事か？」

「……ああ」

やはりと言うべきか気づかれていたらしい。

確かにここ最近は自分自身の事について悶々とした日々を送っていたのだから当然と言えば当然かもしれないが。

「で、俺を呼びだした理由は？」

「お前と本気のデュエルを望む」

「……」

「手加減も何もいらねえ。俺と本気のデュエルをしてくれ」

「いつだって俺は本気だったぜ」

「ああ、分かっている。だがデツキは別だろう」

凌牙の言葉に、遊里が黙る。

勿論、今までデュエルしてきて遊里が手加減などをしてきた事がないのは凌牙も知っている。分かっている。

だがデツキ。デツキだけは別だ。

遊里は色々なデツキを使う。

どれもこれも強力なデツキなものには違いないが、やはり遊里が使う本気のデツキとは違うのだ。

だからこそナツシユになる前にこのデュエルを望むのだ。

遊里はナンバーズに対する適性もなければ特殊な力もない。遊馬やカイト達とは違い、これからの戦いにはついてこれないだろう。

故に、だ。

今ここで戦いたいのだ。

神代凌牙と青山遊里の本気のデュエルを。

「……分かった」

「ああ……ありがとよ」

「気にするな……さあ、やろうぜ凌牙！」

「行くぜ、遊里！」

デュエルディスクを構える2人。

それを遠く放たれ場所から見ている2つの影があった。

1人は凌牙の妹である神代璃緒。

そしてもう1人は眼鏡をかけた真面目そうな男。こいつこそバリアン世界の住人、ドルベである。

「始まるのか」

「ええ」

「……やはり疑問を抱く。何故、ナツシユはあの男とデュエルをするのだ？」

九十九遊馬がアストラルを取り戻す為にあのアストラル世界に出向いている事は既に彼等にも知れ渡っている。

だからこそその内、こちらに少しでも有利な状況を作っておきたいと思うのがドルベの本心だ。

だと言うのに肝心のナツシユは何故か、何の力も持っていない人間とデュエルをするのだという。

少なくともあれとデュエルする利点は何一つもない。
だが違う。

「……決着をつけたいのよ」

「決着？」

「ええ」

ドルベの横にいる璃緒、否、メラグがぼつりと呟く。

「人として、神代凌牙として、1つの区切りをつけたいのよ。結果がどうであれね……」
切磋琢磨するライバルはきつと九十九遊馬であり天城カイトなのだろう。

だが青山遊里は何よりも乗り越えるべき強大な壁なのだ。
勝ちたい。

だからこそ人として勝ちたいと思っているのだろう。

「……頑張れ凌牙」

メラグは神代凌牙として戦う兄に対して、神代璃緒として声援を送るのであった。

「俺が先行だ！ドロー！」

先手を取ったのは凌牙。

力強くカードを引き抜く。

凌牙はドローしたカードを見て、目を細める。

行うべき行動はすぐに決まった。

「俺は《キラー・ラブカ》を召喚する！」

まるで蛇のようなモンスターがフィールド上に泳ぐように現れる。

だがフィールド上に現れたのはそれだけではない。

それに付き添い泳ぐように現れた鋭い矢のような青い魚モンスターがそこに姿を現していた。

凌牙の新たなモンスターである。

「自分フィールド上に魚族モンスターが召喚した時、こいつを手札から特殊召喚する事ができる！来い！《シャーク・サッカー》!!」

これで凌牙のフィールド上には2体、レベル3のモンスターが揃った事になる。

同じレベルのモンスターが2体揃えば、行うのは当然エクシーズ召喚。

だが攻撃できない1ターン目に呼び出しても利点は多くはない。

勿論、そうでないモンスターもいる。

そして凌牙が今呼び出さんとしているモンスターもまさにその1体だ。

「俺はレベル3の《キラー・ラブカ》と《シャーク・サッカー》でオーバーレイ!!2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築！エクシーズ召喚！」

《キラー・ラブカ》と《シャーク・サッカー》が光になって上空に飛翔。

上空が上がったエネルギーを解放せんと、渦巻く光の中へと飛び込んでいく。

「深き水底から浮上せよ！《潜航母艦エアロ・シャーク》！」

何も映さぬ漆黒の水底から船の外殻を纏った2体の鮫モンスターが現れる。

これこそが先行1ターン目にエクシース召喚する意味のあるモンスターだ。

「エアロ・シャークの効果発動！オーバレイ・ユニットを1つ使い、自分の手札1枚につき400のダメージを与える！やれ！エアー・トルピード!!」

エアロ・シャークから魚雷が4つ放たれる。

それは一直線に遊里へと襲い掛かる。直撃すればライフが1600もダメージを減らさるだろう。

先行1ターン目だと遊里のフィールド上にはカードがない。

防ぐ手立てがない以上、確実にダメージが通るだろう。

だが甘い。

「させるか！俺は手札から《エフェクト・ヴェーラー》の効果を発動！こいつを手札から墓地に送る事で相手フィールド上のモンスター1体の効果を無効化する！」

遊里の手札から1体の天使が舞い降りる。

すると襲い掛からんと飛んできた魚雷が次々と爆発していく。

天使から放たれる光によって破壊されたのだ。

これでエアロ・シャークの効果は無効化にされた。凌牙の先制パンチはあえなく回避されたのだ。

「チツ、俺はカードを2枚セットしてターンエンド！」

「俺のターン！ドロー……俺は《レスキュー・ラビット》を召喚！」

遊里のフィールドにゴグルをかぶった可愛らしいウサギが現れる。

だがそれを見て凌牙は顔を一瞬で顰める。

そのモンスター効果の強さを知っているからだ。

「《レスキュー・ラビット》の効果を発動！こいつを除外して、自分のデッキからレベル4以下の同名通常モンスター2体を特殊召喚する！」

《レスキュー・ラビット》が次元の穴へと飛び込むと、そこから光が放たれるとデッキから二対の光が閃光のように飛び出す。

剣を持った闇色の岩石の体を持ったモンスターが2体現れる。

《ヴェルズ・ヘリオロープ》だ。

その攻撃力は1950。

1900の攻撃力しかないエアロ・シャークでは太刀打ち出来ないだろう。もしこのまま攻撃が通れば合計2000という大ダメージが直撃するのだ。

だが遊里はすぐにバトルフェイズに移行しない。

その原因はやはり凌牙の場に伏せられている2枚のカード。

例えば《聖なるバリアー—ミラーフォース—》だった場合、一気に場のモンスターは全滅してしまい、逆に攻撃力1900と強力なバーン効果を持ったモンスターを場に残

してしまおう。

一応、フォローするカードがない訳ではないがやはりあのまま残すのは決してよいものではない。

(ならば、こゝは確実に叩く！)

ダメージよりも場の維持を優先する事にする。ダメージを取りに行く時は確実にやれる時だけだ。

「レベル4の《ヴェルズ・ヘリオロープ》2体でオーバーレイ。オーバーレイネットワークを構築、エクシーズ召喚」

2体の《ヴェルズ・ヘリオロープ》が光の渦へと消えて行く。

巨大な閃光が放たれるとそこに新たなモンスターがその姿を現していた。

その体は漆黒。かつてあらゆる物を貫く名を冠した世界を滅ぼす氷竜が負の邪念によつて闇に堕ちた姿。

「戦場を制圧せよ！《ヴェルズ・オピオン》!!」

海を凍てつかせて、氷結の大地を切り裂いて現れた闇の氷竜。

そこから放たれる威圧感はそのモンスター達を凍てつかせんとしているようだ。

「この《ヴェルズ・オピオン》がフィールド上に存在する時、お互いレベル5以上のモンスターを特殊召喚できなくなる！」

しかしこの効果がそれ程、凌牙に負担をかけている訳ではない事に遊里は気づいている。

凌牙のデッキは基本的にレベル3、4のモンスターが主流である。特殊召喚するにしてもレベルではなくランク扱いのエクシーズモンスターであり、『ヴェルズ・オピオン』の効果範囲外だ。

だが本命はそこではないのだ。

「『ヴェルズ・オピオン』の効果発動！オーバーレイユニットを1つ使ってデッキから『侵略の』と名のついた魔法・罠カード1枚を手札に加えられる事ができる！」

『ヴェルズ・オピオン』の周囲を漂っていたオーバーレイユニットの光の1つがオピオンの口に移動すると、オピオンはそれを一瞬にして噛み砕く。

その次の瞬間、オピオンから放たれた光が氷結の大地を再び砕き散らす。

するとそこから1枚のカードが現れると、光の軌跡を描きながら遊里の手元にと収まった。

「俺が手札に加えたのは速攻魔法『侵略の汎発感染』だ。効果は自分フィールド上の『ヴェルズ』モンスターはこのターンの間、このカード以外の魔法・罠カードの効果を受けなくなる」

「チツ、めんどくせえカードだ」

凌牙が忌々しげに遊里の手元にきたカードを見て呟く。

モンスター効果は無理だが、魔法と罠の効果を受けなくする効果は非常に強力だ。

これならば《聖なるバリア——ミラーフォース——》などが来ても回避する事が可能になる。

「行くぜ！《ヴェルズ・オピオン》で《潜航母艦エアロ・シャーク》を攻撃だ！」

闇の氷竜から黒い氷のプレスが潜水母艦へと一直線に放たれる。

エアロ・シャークは必死に回避行動を取ろうとするが、遅すぎる。

オピオンが首を動かすと黒い氷の吐息はやはり一直線にエアロ・シャークに襲い掛かると一瞬にして凍らせ砕け散らせていた。

「ぐうっ！」

エアロ・シャークが破壊された衝撃が凌牙へと襲い掛かる。

同時に凌牙のライフポイントが4000から3350へと減る。

大ダメージとはいかないが、先制の一撃は遊里が奪い取ったのだ。
だが。

「行くぜ！罠発動！《ゴースト・フリート・サルベージ》！」

「何っ!？」

遊里の予想とは違い発動したのはまるで違うカード。

そして《侵略の汎発感染》を発動しても意味のないカードだ。

「このカードは水属性モンスターエクシーズ1体が戦闘によって破壊された時、その効果を無効化にしてそのモンスターエクシーズ1体と召喚素材となったモンスターを2体まで特殊召喚する！」

上空から無数の鎖が降り注ぐと、地の深く底へと落下していく。

そしてその鎖を伝うように破壊された《潜航母艦エアロ・シャーク》、そしてエクシーズ素材である《キララー・ラブカ》と《シャーク・サツカー》が浮上してきたのだ。

だがどのモンスターも鎖でその身を縛られて効果を無効化されている。

しかしあの凌牙が何の目的もなく蘇生する筈がない。

そしてもう一枚の伏せられたカードが開かれた。

「更なる罠カード、《フル・アーマード・エクシーズ》を発動する！」

「そのカードは……！」

「このカードは相手ターンであってもエクシーズ召喚を可能にする！俺は《キララー・ラブカ》と《シャーク・サツカー》でオーバーレイ！！2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築！エクシーズ召喚！」

再び2体のモンスターが光を放ち、1つの形になっていく。

その光から現れたのは赤き魔槍を携えた漆黒のモンスターであった。

「漆黒の闇より出でし赤き槍！《ブラック・レイ・ランサー》！」

凌牙が愛用するモンスターエクシーズの1枚だ。

だが攻撃力は2100。相手モンスターの効果を無効化にする効果もあるが《ヴェルズ・オピオン》相手ではそれ程、効果がある訳ではない。

だからこそ《フル・アーマード・エクシーズ》なのだ

「そして《フル・アーマード・エクシーズ》の効果で《ブラック・レイ・ランサー》にエアロ・シャークを装備し、その攻撃力をプラスする！」

鎖に縛られていたエアロ・シャークが光と共に分解され、そのパーツが鎧となり《ブラック・レイ・ランサー》に装備されていく。

その姿に遊里は見覚えがある。

《F.A.ブラック・レイ・ランサー》だ。

だがあのカードとは違い攻撃力は4000。

《ヴェルズ・オピオン》では対処のしようがない状態だ。

「カードを2枚セットしてターンエンド」

「俺のターン！ドロー!!」

さて、と凌牙は手札を確認する。

確かに攻撃力4000のモンスターを繰り出す事には成功したが、相手はあの遊里。

攻撃力が高いモンスターを出しただけでは安心できる筈もない。

「俺は魔法カード《エクシーズ・ギフト》を発動！フィールド上にモンスター・エクシーズが2体以上いる場合、発動できる！俺はカードを2枚ドローする！」

それを見て思わず遊里は顔を顰める。

手札を補充された事もそうだが、その効果の強さに思わずだ。O■G版を知っている身としてはなんともいえない気持ちになる。

「バトル！《ブラック・レイ・ランサー》で《ヴェルズ・オピオン》を攻撃！ブラックスピア!!」

「させるか！ダメージステップに速攻魔法を発動！《禁じられた聖槍》！《ブラック・レイ・ランサー》を選択！」

「なんだとっ!?!」

赤き魔槍が《ブラック・レイ・ランサー》の手から《ヴェルズ・オピオン》に向かって放たれる。

《ヴェルズ・オピオン》もその口から闇氷のブレスで迎撃するが、赤き魔槍はブレスを容赦なく引き裂いていく。

その勢いは止まる事はないと思われていたが聖なる槍が《ブラック・レイ・ランサー》を貫くと装備していた筈のエアロ・シャークの鎧から力が抜けていく。

「《禁じられた聖槍》の対象となったモンスターは攻撃力が800下がり、魔法や罠の効果を受け付けなくなる！つまり装備カードの効果もだ！」

つまり聖なる槍の力により本来ならば己の身を守る為の力が、今は逆に己の鎧の効果を受け付けなくしているのだ。

装備された鎧の力がなくなった事により魔槍の力は段々と弱まっていき、闇氷の吐息が押し返して行く。

このまま行けば、《ブラック・レイ・ランサー》は闇氷によってその身を砕かれる事になるだろう。

そう。このまま行けば、だ。

「舐めるなあ！俺は手札から速攻魔法を発動！《収縮》！」

「なにっ!？」

「このカードの効果により《ヴェルズ・オピオン》の攻撃力を半分にする！」

魔槍を押し返していたブレスの勢いがどんどんと弱まっていく。

何事かと思えば、闇の氷竜の体が小さくなっているのだ。

速攻魔法《収縮》により攻撃力が半減したのだ。

これにより《ブラック・レイ・ランサー》の攻撃力は1300であるが、《ヴェルズ・

オピオン》は1275。

本当にほんの僅かではあるが、《ヴェルズ・オピオン》の攻撃力を上回ったのだ。

「行け！ 《ブラック・レイ・ランサー》!!」

お互い弱体化するも、最終的に赤き魔槍がその勝利をもぎ取る事になる。

闇水の吐息を突き破った赤き魔槍は氷竜の頭部を正確に撃ち貫いていた。

「チツ……」

遊里のライフがほんの少し減り、3975になる。まだライフ上は遊里の方が優位であるがそれはあくまでフィールド上の話だ。

凌牙の場にはこのターンが終われば、聖なる槍の力攻撃力4000の《ブラック・レイ・ランサー》が凌牙のフィールド上に残ったままだ。

「これで俺はターンエンドだ」

「俺のターン!」

手札を見て遊里はどうあの攻撃力4000のかぶつを処理するか考える。

アーマード・パーツを装備したあのモンスターは破壊される時、装備したモンスターを墓地に送る事で破壊を免れる事が出来るのだ。

攻撃力を単純に上げて殴っても、《ブラック・レイ・ランサー》は残ってしまう。

ここはやはり破壊以外の方法でどうにかするしかないのだ。

そしてそれを可能にできるモンスターは2体ある。

で、どちらを出すかだが。

(まだ汎発感染はセツトされたままだし、ヴェルズのあっちの方が利用できるな)

とは言え3体もモンスターを使う事になるので手札の消費は大きい。

もう1つは2体で出せる分、そちらの方がいいのかもしれない。

だが後々の事を考えれば温存という手もある。

幸い、今の手札なら3体のモンスターも準備できる。

1分程で思考を終える。

「行くぞ、相手フィールド上より自分フィールドのモンスターが少ない時、《ヴェルズ・マンドラゴ》を特殊召喚できる！」

大地を切り裂き、闇に染まった植物型のモンスターが現れる。

「更に《ヴェルズ・ケルキオン》を召喚！」

3つの玉を携え、杖を持った魔法使い。

これこそ世界を滅ぼした竜が集合した姿。

《ヴェルズ・ケルキオン》の効果発動！自分墓地のヴェルズモンスター1体を除外する事で、自分墓地のヴェルズモンスター1体を手札に加える！俺はオピオンを除外してヘリオロープを回収！」

《ヴェルズ・ケルキオン》の杖から放たれた光が、墓地に眠るオピオンを除外する。

すると除外されたオピオンから放たれたエネルギーが、同じく墓地で眠っていた《ヴェルズ・ヘリオロープ》を現世へと舞い戻したのだ。

遊里の手札に収まる《ヴェルズ・ヘリオロープ》。

だがケルキオンの効果はそれだけではない。

「そしてこの効果を使った時、1度だけ手札のヴェルズモンスター1体を召喚する！ 来い《ヴェルズ・ヘリオロープ》！」

手札から飛び出すように戦場へと飛び出す岩石の剣士。

これで遊里のフィールドには3体のレベル4モンスターが揃った事になる。

「レベル4のマンドラゴ、ケルキオン、ヘリオロープでオーバーレイ！ エクシーズ召喚！ 来い！ 《ヴェルズ・ウロボロス》!!」

そこに現れたのは3つの首を持ったドラゴン。

これもまたオピオンと同じく世界を破滅へと誘った水竜である。

しかしこのドラゴンであっても攻撃力は2750。戦闘ではどうしようもない。

だが《ヴェルズ・ウロボロス》には3つの効果があるのだ。

「《ヴェルズ・ウロボロス》の効果発動！ オーバーレイユニットを1つ使う事でフィールド上のカード1枚を手札に戻す！」

「チッ！」

「俺は当然、《ブラック・レイ・ランサー》を選択！」

《ヴェルズ・ウロボロス》の首の1つが《ブラック・レイ・ランサー》に噛み付く。もがく《ブラック・レイ・ランサー》であるが、意外とその力は強固である。

振り払うように啞えた槍戦士を放り投げると、装備されたエアロ・シャークの鎧が外されていき気がつけば何も装備されていない状態のままエクストラデツキへと戻されていった。

「これで邪魔者はいなくなつた！ウロボロスで凌牙にダイレクトアタック！」

「やらせるか！墓地の《キラー・ラブカ》を除外して攻撃を無効化にする！」

3つの首全てから放たれた光線を受け止める《キラー・ラブカ》。

だが攻撃を無効化にするだけではない。

「この効果で無効化した時、攻撃モンスターの攻撃力を500下げる！」

「……カードを1枚セットしてターンエンド」

《ブラック・レイ・ランサー》こそなんとかしたものの、攻撃力が下がったウロボロスではすぐに対処されるのは間違いないだろう。

その力を間違いない凌牙は持っているのだから。

「行くぜ！俺のターン！俺は《ダブルフィン・シャーク》を召喚！そして自分フィールド上に水属性モンスターがいる時、《サイレント・アングラー》を特殊召喚する！」

尾が2つある鮫型モンスターとアンコウモンスターが凌牙の場に揃う。

これでレベル4のモンスターが2体。

だが《ダブルフィン・シャーク》の効果がある。

「《ダブルフィン・シャーク》は水属性モンスター・エクシーズの素材にする場合、こいつは2体分となる！」

つまり3体分の扱いになるという事だ。

「2体分の《ダブルフィン・シャーク》と《サイレント・アングラー》でオーバーレイ！
エクシーズ召喚！」

2体のモンスターから3つの光が交じり合っていく。

それを見て遊里は顔を顰める。

そこから放たれる力の強さは普通ではない。

遠く離れている璃緒もそれを見て思わず驚愕の声を漏らした。凌牙が呼び出そうとしているモンスターが分かったからだ。

「吼えろ！No.32！海咬龍シャーク・ドレイク!!」

巨大な鮫のモンスター・エクシーズ。

そしてこの力強さは先程のオピオンやウロボロスの比ではない。

「ナンバーズ……！」

ナンバーズ。

アストラルの記憶の結晶。

そこに秘められた力はあまりにも強く、遊馬や凌牙はナンバーズ同士やバリアン相手にしか使った事がなかった。

だが遊里はナンバーズの使い手でもなければバリアンでもないのだ。

だと言うのに凌牙は何の躊躇いもなくナンバーズを繰り出したのだ。

「卑怯とか言わないよな、これが俺の全力だ」

「ハッ、言う訳ないだろう。かかってこいよ凌牙！」

「行くぜ！《エクシーズ・トレジャー》を発動！フィールド上のモンスター・エクシーズの数だけカードをドローする！フィールド上には2体、2枚ドローだ！」

「便利だよな、それ」

凌牙が手札を補充する。

ニヤリと凌牙の表情が変わる。このドローで攻め手の札は揃った。

「更に魔法カード《ブレイク・ストリーム》を発動！このカードの対象となったモンスターが攻撃する時、相手は魔法・罫を発動できなくなる！」

「それだけじゃないのは知っている。チェーンして《禁じられた聖杯》をシャーク・ドレイクに対して発動！効果を無効化する！」

「チツ、だがシャーク・ドレイクの攻撃力はこのターンのエンドフェイズまで400上がるぜ」

《ブレイク・ストリーム》の対象となったモンスターが戦闘でモンスターを破壊した時、相手の魔法・罠カードを1枚破壊する効果がある。

そしてシャーク・ドレイクは戦闘でモンスターを破壊した時、オーバーレイユニット1つを使い戦闘破壊したモンスターの攻撃力を1000下げて蘇生し、再び攻撃する効果を持っているのだ。

つまりこのまま行けば1600のダメージ+セットしたカード2枚を破壊されてしまう。

なので聖杯を使い、効果を無効化にしておけば追撃効果は使えない。セットしたカードは全てなくなってしまうがダメージは最小限で抑えられる。

「行け！シャーク・ドレイク！《ヴェルズ・ウロボロス》を攻撃！デプス・バイトオー！」
「ぐうっ！」

聖杯によって力が強化されたシャーク・ドレイクが、《キララ・ラブカ》によって弱体化しているウロボロスを攻撃する。

攻撃を繰り返しながら逃げようとするが、海の中を素早く移動するシャーク・ドレイクを捕らえる事もそこから逃げる事も出来ない。

一瞬の隙をついたシャーク・ドレイクはウロボロスの首を丸ごと噛み砕いた。そして破壊された衝撃が遊里に襲い掛かる。

オピオンが破壊された時、以上の衝撃は遊里の体を簡単に吹き飛ばした。

「シャーク・ドレイクが戦闘破壊した時、相手フィールド上のカード1枚を破壊する！」

「くっ、汎発感染が……！」

伏せられた《侵略の汎発感染》が破壊される。

これで遊里のライフは3025に磨り減る。

加えてフィールド上のカードは全てなくなつた状態だ。

「はっ、こいつがナンバーズの力か……！」

「ああ。俺はカードを1枚セットしてターンエンドだ」

「俺のターン、ドロォー！」

遊里の手札は2枚。

あまり多いとは言えない状態だが、なんとか出来る手はまだある。

「俺は《ヴェルズ・ケルキオン》を召喚！」

「またそいつか……！」

「便利だからな。ケルキオンの効果発動！墓地のウロボロスを除外して、《ヴェルズ・ヘリオロープ》を手札に加える。そして効果によりヘリオロープを召喚だ！」

魔法使いの力により再び、レベル4のモンスターが2体揃う。

ナンバーズのモンスターはナンバーズでしか戦闘破壊できない以上、対処出来るカードは限られてくる。

故に呼び出すのはそれを可能とするモンスター。

「ケルキオンとヘリオロープでオーバレイ！エクシーズ召喚！来い！《鳥銃士カステル》！」

「相変わらずめんどくせえ奴を……！」

銃を構えた鳥人型モンスター。

その銃口はしっかりとシャーク・ドレイクに向かっている。

攻撃力は圧倒的に足りず、あらゆる方法で攻撃力を上げても戦闘破壊できない。

ならばどうするか。

簡単だ。

先程と同じくバウンスしてしまえばいい。

「カステルの効果発動！オーバレイユニットを2つ使い、このカード以外の表側表示のカード1枚をデッキに戻す！対象はシャーク・ドレイク！」

鳥人の構える銃の口にオーバレイユニットの光が2つ集まっていく。

その光は銃に火を入れていく。

狙いは深海の鮫。

引鉄が引かれると、銃口から放たれた光が一直線にシャーク・ドレイクに襲い掛かる。これが直撃すればシャーク・ドレイクはその戦闘破壊耐性を生かす事なく、デツキへと戻っていくだろう。

「罨発動！ 《超水圧》！ 自分フィールド上のモンスターを1体破壊してカードを1枚ドロ―する！」

「なにっ!？」

予想外の行動に遊里が声を荒げる。

何かしらの行動を取る可能性は考えていたのだが、まさか凌牙自身がシャーク・ドレイクを破壊するとは思っていなかったのだ。

だがこれで墓地は一応は肥えて、カードもドロ―する事が出来る。

結局、ダイレクトアタックされるとしてもこちらの方がアドを取っているという事なんだろうか。

(《貪欲な壺》を持っている可能性があるからその為にか……?)

凌牙の墓地のモンスターはこれであろう5枚になったのでその可能性は非常に高い。

とは言え、もつと別の狙いがある可能性があるから油断は出来ないな、と遊里は思う。

「効果は不発だがカステルでダイレクトアタックだ！」

「ぐっ……はあっ……！」

カステルの銃撃を受けて凌牙がよろめく。

これで一気に凌牙のライフは2000減り、残り1350となった。

もう一度直撃を受ければ今度こそ終わりだろう。

「カードを1枚セットしてターンエンド」

「俺のターン！ドロー！」

遊里の手札は0。凌牙はシャーク・ドレイクを破壊してまで手に入れたカードを含めて3枚。

さて、どうするのだろうか。

「行くぜ！《マーメイド・シャーク》を召喚！」

鮫でありながら、人魚の少女がくつついた摩訶不思議なモンスターが現れる。

レベル1であり、その攻撃力も100と圧倒的に弱い。

カステルの攻撃力2000に対して出すモンスターではないのだが。

「《マーメイド・シャーク》の効果発動！こいつが召喚された時、デッキからシャークと名のつくモンスターを1枚手札に加える事ができる！俺が手札に加えるのは《パンサー・シャーク》！」

《マーメイド・シャーク》の声か、もつと別の何かに反応して深海の底から一体の鯨が浮上してくる。

そのままその鯨は光となって凌牙の手札に収まる。
なるほど、サーチカードという事か。

「俺はカードを一枚セットしてターンエンド」

「俺のターン」

凌牙の手札には《パンサー・シャーク》がある。

あのカードは相手フィールド上にモンスターが2体以上いる場合、リリースなしで召喚できる効果を持つ。

そしてもう一つ。対となるモンスターがいるのだ。

わざわざサーチしたという事はもう一枚のカードこそがそのカードである可能性は非常に高い。

ならば先に仕留めるかという考えがある。

だが攻撃力100のモンスターを攻撃表示のままという訳ではないだろう。

十中八九、あのセットカードはライフ対策のカードだろう。

攻撃を無効化にするか、ダメージを0にするか。色々なカードがある。

ドローしたカードはモンスターカード。

カステルで攻撃すれば倒せる以上、出す意味は若干薄い。

全体破壊効果の《聖なるバリアー——ミラーフォース——》でも踏んだら目も当てられない。

勿論、まったく違うカードである可能性もあるのだが問題は凌牙の目だ。

あの自信に満ち溢れた目。そして攻撃してこいという挑発した様子も見られる。

少しの間、考えを纏める。

だが答えはすぐに出た。

「行くぞ！カステルで《マーメイド・シャーク》に攻撃！」

カステルの銃から弾丸が放たれる。

攻撃力1000の《マーメイド・シャーク》に成す術はない。

この一撃をどうするのか、そう思ったが次の瞬間、遊里は賭けに負けた事を理解してしまった。

「畏発動！《ゼウス・ブレス》！相手モンスターの攻撃を無効化にする！だがそれだけじゃない！」

「っ！」

「無効化にした時、自分フィールドに水属性モンスターがいる時、相手に800のダメージを与える！」

「つつー！づあつ?!」

天界から降り注ぐ神の息吹が遊里に襲い掛かる。

これにより遊里のライフは2225に減る。着実に凌牙のライフに並びつつある。

「くそっ！やつぱり800ダメージってでかいぜ……」

遊里がポツリと呟く。

初期ライフが4000なのだ。

O ■Gでは微々たるダメージもこちらでは初期ライフの2割も吹き飛ばす一撃。痛くない訳がない。

「さあ、どうする!?!」

「……俺はこのままターンエンド」

挑発の言葉をこちらにかけてくる凌牙だが、遊里は冷静に手札を見る。

手札はモンスター1枚だけだし、出す利点はない。

このままターンエンドする遊里。

「俺のターン、ドロー!」

カードをドローした凌牙は心の中で安堵の息を吐いた。

遊里のデッキならば魔法・罫を1枚破壊する《サイクロン》が3枚積まれていてもおかしくはない。

全体破壊の《大嵐》の事も考えれば4枚。デッキにもよるが魔法・罫カードの破壊を多様する遊里相手に魔法・罫カード1枚に頼るのは肝が冷える思いだなと凌牙は思った。

だがなんとか凌ぐ事は出来た。

あちらにもカードは1枚セットされているが、ここが勝負の決め所である。

「行くぜ！俺は《マーメイド・シャーク》をリリースして《パンサー・シャーク》をアドバンス召喚！」

人魚鮫の命を喰らい凌牙の場にヒヨウのような鮫が現れる。

遊里の場に2体以上モンスターがあればリリースなしで出せたのだが仕方ない。出せるだけいいと考えるべきだろう。

「そして《パンサー・シャーク》がフィールドにいる時、手札からこいつを特殊召喚できる！」

《パンサー・シャーク》の口からブレスが放たれる。

するとブレスの光が形作っていき一体のモンスターになっていく。

「来い！《イーグル・シャーク》!!」

鷹のような鮫が現れる。

これでレベル5のモンスターが2体。

「来るか……!」

「行くぜっ!俺はレベル5の《パンサー・シャーク》と《イーグル・シャーク》でオーバーレイ!2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築!」

豹と鷹。

2体の鯨が光の渦となり交わっていく。

そこから発生されるエネルギーは先程の《No. 32 海咬龍シャーク・ドレイク》と比べて勝るとも劣らない。

つまりこれから出されるモンスターは……。

「現れる、No. 73!カオスに落ちたる聖なる滴。その力を示し、混沌を浄化せよ!激瀧神アビス・スプラッシュ!」

水の神の如く現れたモンスター。

これこそが凌牙の、いや、ナツシユの……。

「行くぜ!アビス・スプラッシュの効果発動!オーバーレイユニットを1つ使いターンの終わりまでアビス・スプラッシュの攻撃力を2倍にする!」

アビス・スプラッシュの攻撃力は2400。この効果があればなんと攻撃力は4800まで上昇する。

そうなれば攻撃力2000しかないカステルは一瞬で破壊され、遊里のライフも一撃

で奪い取るだろう。

「させるか！速攻魔法発動！《禁じられた聖杯》！これでアビス・スプラッシュの効果は無効化にする！」

「チイツー！」

思わず悪態をつく凌牙。

先程のシャーク・ドレイクにも使われこうも攻め手を潰されると苛立ちを覚えてしま
う。

だが聖杯によって上昇した攻撃力抜きにしてもカステルを破壊するなら十分だ。

「ならアビス・スプラッシュで攻撃だ！ファイナル・フォール!!」

手に持つ杖から放たれた青の閃光がカステルに襲い掛かる。

なんとかカステルは己の翼で逃げようとするも、直線ではなく左右上下に動き回る光は確実に襲い掛かっていく。

逃げ切れず、光に飲み込まれるカステル。

光の力に耐え切れず、あっさりと撃破されてしまった。

「……っっ！」

破壊された衝撃が遊里に襲い掛かる。その衝撃はやはり強大。

膝を思わずついてしまう。

これで遊里の残りライフは1425。こちらもそろそろ一撃で倒される可能性の数値だ。

「俺はカードを1枚セットしてターンエンド」

「俺の……ターン！」

残り2枚の手札を見る。

既にお互い手札もライフも尽き掛けている。一歩間違えればそこで終わりだろう。

「俺は最後の《ヴェルズ・ケルキオン》を召喚！」

「しつこい奴だぜ！」

「効果発動！墓地のマンドラゴを除外してヘリオロップ。そしてヘリオロップを召喚！」

流れるようにフィールドに2体のレベル4モンスターを揃える遊里。

次の行動も既に決まっている

「マンドラゴとヘリオロップでオーバーレイ！エクシーズ召喚！」

2つの光が交じり合い1つに収束していく。

その光は巨大な爆発をすると、1体のモンスターがその中から飛び出るように現れた。

「漆黒の闇より愚鈍なる力に抗う叛逆の牙！今、降臨せよ！エクシーズ召喚！ランク4

！《ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン》！」

反逆の闇の牙。

それを持つドラゴンが今、光臨した。

「ダーク・リベリオンの効果発動！オーバーレイユニットを2つ使い、相手モンスターの攻撃力を半分にし、その数値分だけこのモンスターの攻撃力をアップする！トリーズン・デイスチャージ！」

反逆の竜の翼が開くとそこから放たれる雷がアビス・スプラッシュに襲い掛かる。

アビス・スプラッシュはなんとか回避しようとするも、雷の速度にはついてこれない。一瞬にして拘束、そしてその力を奪い取られていく。

「行け、ダーク・リベリオン！アビス・スプラッシュを攻撃！反逆のライトニング・デイスオベイ！！」

「その瞬間、アビス・スプラッシュの効果発動！攻撃力を2倍だ！」

「それにチェーンして《禁じられた聖杯》！この効果でアビス・スプラッシュの効果は無効だ！」

襲い掛かるダーク・リベリオンに対して、アビス・スプラッシュは自身の効果を使って迎撃しようとする。

勿論、使ったからといって攻撃力2400では、攻撃力3700になったダーク・リ

ベリオンに勝つ事は出来ない。

それでもわずかなライフを残す事は出来る。

しかしそこに待っていたのは再び放たれた無慈悲な聖杯の雫。

これにより攻撃力は400上がるも、効果は無効化。これでは凌牙のライフは残らない。

「終わりだ！ダーク・リベリオン！」

「まだだっ！速攻魔法《禁じられた聖槍》を発動！ダーク・リベリオンの攻撃力を800
ダウンする！」

「なん……だどっ!？」

その反逆の刃で切り裂こうとしていたダーク・リベリオンに聖なる槍が突き刺さる。

これにより魔法や畏から身を守る力を得たが、その攻撃力は下がってしまう。

とは言え攻撃力は圧倒的にダーク・リベリオンの方が上。

その刃はしっかりとアビス・スプラッシュへと届いていた。

「……ぐうっ!!」

本来、ナンバーズにある戦闘破壊耐性も聖杯によりかき消されてしまっている。

ナンバーズを破壊された衝撃は疲労が溜まっている凌牙に容赦なく襲い掛かると、その体を後方へ吹き飛ばしていた。

だが凌牙のライフは0ではなく残り50になった。

ほんの僅かだが希望を残したのだ。

「さすがだよ、凌牙。俺はこれでターンエンド」

倒れ伏した体を起き上がらせる凌牙。

手札は0で残りライフもわずか50しか残されていない。

次のドロー次第という事だ。

「俺のターン……ドローー！」

一瞬、躊躇うように動きを止めるもしつかりとカードをドローする凌牙。

ドローしたカードは……。

「俺は《貪欲な壺》を発動！墓地のカードを5枚デッキに戻し、カードを2枚ドローする！俺が選ぶのはこいつらだ！」

凌牙が選択したのは《シャーク・サツカー》《マーメイド・シャーク》《ダブルフィン・シャーク》《サイレント・アングラー》《No. 73 激瀧神アビス・スプラッシュ》の5枚

ここで相手の墓地のカードを除外などできれば《貪欲な壺》の効果を阻害できるが、残念ながら手札0の遊里にはどうしようもない。

相手がどんな行動をしようが攻撃力3700の《ダーク・リベリオン・エクシーズ・ド

ラゴン》に頼るしかないのだ。

凌牙がデッキに5枚カードを戻してしつかりとシャッフルする。

全てはこのドローにかかっている。

「……」

シャッフルし終えたデッキを見つめる凌牙。

2枚。このドローするたった2枚のカードに全てがかかっているのだ。

息を吐く。

そして凌牙はしつかりと遊里を見ると、いつものようにデッキトップに指をかけた。

「ドローー！」

2枚のドロー。

きたカードは……。

「来たぜ！俺は《死者蘇生》を発動！蘇れ！《No. 32 海咬龍シャーク・ドレイク》
!!」

凌牙のエースであるシャーク・ドレイクが墓地より蘇る。

だが墓地から蘇生したシャーク・ドレイクではオーバレイユニットはない為、効果を使う事は出来ず、ダーク・リベリオンを倒す力もない。

しかしそれを理解していない凌牙ではない。

シャーク・ドレイクと神代凌牙にしかできない事があるのだ。

「俺は海咬龍シャーク・ドレイクをエクシーズ素材としてカオスエクシーズ・チェンジ!!」

光と共にシャーク・ドレイクの姿が変わっていく。

体は白に。そしてそのフォルムはより洗練されたものに。

これこそがカオスエクシーズ・チェンジ。

ランクアップマジックに頼らない九十九遊馬と神代凌牙のみが使える力だ。

「現れよ、C N O . 3 2 ! 暗黒の淵より目覚めし最強の牙よ! 海咬龍シャーク・ドレイク・バイス!」

純白の鎧に身を包んだ最強の鯨が凌牙のフィールド上に現れる。

カオスの力を得たそれはただのシャーク・ドレイクやアビス・スプラッシュを超える力を醸し出していた。

だがそれでもダーク・リベリオンを倒す事は出来ない。

「シャーク・ドレイク・バイスのモンスター効果発動! オーバーレイユニットを1つ使い、墓地にあるシャークと名のつくモンスターを除外!」

シャーク・ドレイク・バイスの口から放たれたブレスが大地を引き裂いていく。

墓地にあるモンスターを呼び起こす為。

引き裂かれた裂け目から飛び出してきたのは潜水母艦。

「除外するのは……エアロ・シャーク！」

すると光を纏ったエアロ・シャークは一直線にダーク・リベリオンに体当たりするよ
うに襲い掛かる。

ダーク・リベリオンがそれを叩き落そうとするがもう襲い。

「そしてその攻撃力分の1900をダーク・リベリオンから奪い去る！」

「くっ！」

エアロ・シャークの特攻により大ダメージを負うダーク・リベリオン。

先程まで3700に上がっていた攻撃力は1800にとダウンする。

これでダーク・リベリオンを破壊できる。

「シャーク・ドレイク・バイス！ダーク・リベリオンに攻撃！デプス・カオス・バイトオ
！」

カオスの鮫から放たれたブレスは雨のようにダーク・リベリオンにと降り注がれる。

傷ついたダーク・リベリオンにその身にブレスの雨を受けながら沈んでいった。自分
を破壊したシャーク・ドレイク・バイスを睨みながら。

「いっ……」

遊里のライフもこれで600となる。

お互い即死圏内だ。

「俺はカードをセットしてターンエンド」

しかし勝ちを確信しているような凌牙の表情だが、何処かさえない様子がある。それも当然か。

モンスターがあれば追撃で倒せたのにドロローできなかった事に対する苛立ちだ。

「まったく……ここまでやられるとはな……」

「お前とのデュエルだけじゃない。遊馬やカイト、奴等とのデュエルで俺も成長したんだ」

「……そうだな」

お互い初めて会った時の事を思い出す。

あの時は確か。

「お前が俺に一方的に突っかかってきたんだっけか」

「……あの時は悪かったと思ってる」

遊里はちやうど公式大会から身を引き、凌牙は大会で失格してしまった頃の話だ。

荒れていた凌牙が学園一強いと密かに言われていた遊里に喧嘩を売るようにデュエルを挑んだのである。

「まあ、速攻で振り返り討ちにしたけどな」

「ぐっ！」

後攻1ターン目で瞬殺されたのだ。あれは一種のトラウマものである。

ある事情で失格してしまったが、自分の実力に自信を持っていた凌牙は一瞬にして心が折れそうになったのは内緒である。

「手札0からあんなに回るとは思ってたなかった」

「あのデッキは手札0からが本番だからな」

ハンドレスコンボである。

その後も何度も凌牙がデュエルを挑んできたのだ。

結局、勝ち星を拾えたのはほんの僅かだ。

よっと、という声と共に立ち上がる遊里。

さあ、そろそろ終わりにしよう。

「俺のターン、ドロー……はっ、俺もこいつを引いたぜ」

「《貪欲な壺》……！」

遊里がドローしたカードを見せると呻くように呟く凌牙。

まさかお互いの運命を同じカードに託す事になるとは思ってもいなかった。

「俺が戻すのはこの5枚だ」

《ヴェルズ・ヘリオロップ》《ヴェルズ・ヘリオロップ》《ヴェルズ・ケルキオン》《鳥

銃士カステル《《ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン》の5枚。

5枚戻したデッキをシャッフル。

遊里はするとあっさりとカードを2枚ドローした。

なんて事はない。いつもと変わらない様子だ。

ドローしたカードを数秒見つめると、遊里が凌牙をしつかりと見る。

その目を見て一瞬で凌牙は理解した。

「ここが決着の時だ。」

「……行くぜ、凌牙」

「ああ！来い、遊里！」

「俺もこいつを引いた！《死者蘇生》を発動！蘇れ、《ヴェルズ・ケルキオン》!!そして効果発動だ！」

4度、戦場に現れる魔法使い。

すると魔法使いはすぐに杖から光を放つ。

除外されるのは同じ《ヴェルズ・ケルキオン》。そして手札に舞い戻るのは《ヴェルズ・ヘリオロップ》。

「そして《ヴェルズ・ヘリオロップ》を召喚！」

「来たか！」

「俺は2体のモンスターでオーバーレイ！エクシース召喚！！」
あつさりとレベル4のモンスターを2体、揃える。

「再び現れる反逆の牙よ！《ダーク・リベリオン・エクシース・ドラゴン》！！」
シャーク・ドレイク・バイスの前に再び現れる反逆のドラゴン。

さあ、リベンジだとばかりにダーク・リベリオンが咆哮を上げると、シャーク・ドレイク・バイスも咆哮を上げる。

お互いのエースは揃った。

これで決着をつけよう。

「だが勝つのは俺だ！罨発動！《強制脱出装置》！！」

「な……………につ……………」

凌牙の伏せられた最後の1枚。

遊里が愛用する罨カード《強制脱出装置》。

フィールド上のモンスター1枚を手札に戻す強力な効果だ。

「てめえにいつもやられた事、今こそ返すぜ！」

遊里によって何度も使われてきたこのカード。

それを今、凌牙が遊里に対して使ったのだ。

巨大な機械装置によって拘束されるダーク・リベリオン。

拘束から逃げるようにもがき暴れるが、そこから逃げ出す事が出来ない。

このままでは手札、いやエクストラデッキに戻されてしまうだろう。

「これで終わりだ！」

召喚権は残っているだろうが、あれはモンスターではないという確信が凌牙にはあった。

だからこれで遊里の攻め手はなくなる。

そう思う凌牙。

しかし遊里は……笑っていた。

「……遊里？」

「いや、本当に強くなったよな凌牙」

「……」

「だけど……まだ負けないぜ！」

「なにつ!？」

遊里の宣言。

つまりまだ何かあるという事だ。

それは何か。

その正体は遊里の最後の1枚。

「速攻魔法《禁じられた聖槍》！こいつの効果で脱出装置からダーク・リベリオンを守る！」

「なあっ!?!」

遊里と凌牙が使ったカード。しかしどちらも攻撃力を下げる事をメインに使われた為、その真価を發揮できないでいた。

しかし今、その真なる効果が發揮される。

禁じられた聖なる槍がダーク・リベリオンを貫き、その身に魔法や罠から守る力を与えるのだ。

これにより拘束されていた反逆のドラゴンは一瞬にして機械装置を破壊する。

攻撃力はわずかに下がったが、自由を得たのだ。

そして《ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン》にはあの力がある。

「《ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン》の効果発動！オーバーレイユニットを2つ使い、相手モンスターへの攻撃力を半分にしてその数値だけ攻撃力をアップする！トリーズン・デイスチャージ!!」

再び反逆の翼から放たれる雷がシャーク・ドレイク・バイスを拘束する。

身を守るものは何もない状態。

シャーク・ドレイク・バイスの力を吸収し、ダーク・リベリオンに力を与えて行く。

ナンバーズでしか破壊できない耐性も、先にライフが尽きれば意味はない。

「さあ、終わりだ！」

「……ああ」

「行くぞ！ 《ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン》の攻撃！」

雷の翼を纏い突撃する反逆のドラゴン。雷で拘束されたシャーク・ドレイク・バイスには逃げる事もできない。

「反逆のライトニング！ デイスオベイイイ！！」

その刃は一撃でカオスの鯨を両断した。

ライフ0。

勝者、青山遊里。

「……」

デュエルが終わり、凌牙は後ろに大の字で倒れていた。

負けた。

あれだけ覚悟を決め、デッキを作り上げたというのにだ。

ああ、くそつ。

悔しい。

凌牙の心の中にあるのはそれだけであった。

だが同時に、心の中は澄み渡っていた。

全てあの一撃で吹き飛ばされたように。

あの雲一つない青い空のように。

「……よう凌牙」

「ああ」

「俺の勝ちだ」

「お前の勝ちだ」

たったそれだけの確認。

だけどそれで十分だった。

遊里が倒れた凌牙に手を伸ばす。

それを掴み、立ち上がる。

「なあ、凌牙。悩みはいいのか？」

「……ああ、ありがとよ」

そうだ。

このデュエルで覚悟は決めた。

もうこの道に進むのだと。

「そうか。じゃあ最後に1つだけ」

「……おう」

「何度でもかかってきな」

「……ああ」

4. 5 激突する世界

「ナツシユ」

「ドルベか、すまなかつたな」

「いや……」

青山遊里とのデュエル後、凌牙は、いやナツシユはバリアン世界へと戻っていた。

そこに声をかけてきたのはドルベ。

バリアン世界に転生する前からの友であり、ナツシユが不在の時にバリアン世界を守っていた人物である。

「あれは俺の我侭だからな、悪いな時間をかけて」

「それはいいさ。メラグからも聞いた。必要な事だったのだろう」

「……ああ」

ナツシユが頷く。

ドルベの優しさが身に染みるようだ。

「だが一つ気になる事がある」

「なんだ？」

ドルベの抱く疑問。

それはなんなんだろうかとナツシユが内心で首を傾げる。

「……最後の場面、何故あれを使わなかった？」

「……何の事だ？」

その言葉の意味をナツシユは正確に理解しながら惚ける事にした。

しかしドルベには通用しなかったようだ。

「ナツシユ。君はあの場面、シャーク・ドレイクではなくあれを呼ぶ事だって出来た筈だ」

「……」

「そう、本来の切り札。オーバーハンドレッド・ナンバーズを」

オーバーハンドレッド・ナンバーズ。

バリアン七皇の切り札であるカード達。

ナンバーズは本来、アストラルの記憶の結晶であるのだがこれは違う。

バリアン世界に伝わりし、七皇に授けられているカード達だ。

その効果は絶大であり1度でも出せば戦場を制圧出来る程のスペックを持っていると言つてもいい。

そして、先程のデュエル。

最後の場面、ナツシユは死者蘇生で《No. 32 海咬龍シャーク・ドレイク》を蘇らせた。

だがもし、あの場面で《ダブルフィン・シャーク》を出していたら？
そうしたら呼べたであろう。

ナツシユの切り札、《No. 101 S・H・Ark Knight》を。
呼び出せば後は簡単だ。

効果を使えば、相手の場にいた《ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン》を処理し、他にカードがなかった遊里のライフを一瞬にして0に出来ただろう。

それを理解しているからこそその疑問である。

「……奴とのデュエルは神代凌牙として戦いたかった。だから、な」

「しかしその結果敗北してしまった。それで良かったのか？」

ドルベの言いたい事も分かる。

確かにS・H・Ark Knightを出せば勝利の女神はナツシユに微笑んでいただろう。

だがそれを理解した上で出さなかったのだ。

「ああ、いいんだ。これで俺はナツシユとして戦う事が出来る」

と、言いつつもやはり全てを断ち切れないでいるのをナツシユ自身も理解していた。

本当の意味で断ち切るのはきつと、ナツシユとして遊馬達の前に立ち誰かを倒す事では出来ないだろう。

「そうか。それならばもう何も言う事はない」

「助かる」

やはりこの友人はありがたいとナツシユは礼を言う。

そして次にはナツシユの表情はバリアン七皇の長の顔になっていた。

「ドルベ、他の連中を全員集めろ」

「ではついに？」

「ああ。人間世界を攻め、九十九遊馬とアストラルを倒す」

「分かった」

ナツシユの言葉に頷くとドルベは他の七皇を集めるべく、姿を消す。

1人になった所でナツシユは大きく息を吐いた。

「……ナツシユならば勝っていたか」

それはもはや確認の言葉だ。

既に終わったデュエル。今更である。

ナツシユならば勝てた。だが逆に言えば神代凌牙としては青山遊里には勝てなかったという事だ。

それがやはりどうしても悔しいのだ。

あの超えるべき壁を結局越える事が出来なかった。

遊里は言った。何度でもかかってこいと。

だがその機会は2度と訪れないだろう。

もはや青山遊里や九十九遊馬が知っている神代凌牙は死んだ。

ここにいるのはバリアン世界を守るべく剣を取ったナツシユなのだから。

「……遊里、お前はどうか動く？」

バリアン七皇が本格的に動く。

そうすれば気持ちちがうであれ遊馬達は戦うだろう。

その時、遊里はどうするのだろうか。

少なくとも今まで遊里は自分からバリアンの戦いに介入した事はない。

遊馬達に乞われて特訓に付き合ったりはしたが、積極的に動いた事は1度もなかった。

そこまで考えてナツシユは1つの考えが浮かんできた。

どうしてこうまで遊里の事を考えるのか。

今回も遊里には動いてほしくないのだ。

そしてそれは巻き込みたくないとかそんな甘っちょろい感覚ではない。

「奴がきたらどうなるか分からん……」

勿論、ナツシユ自身は勝てる自信はある。

だけど本当に？

自分が真の意味で本気でなかったように、遊里もまだ隠しているものがあるのではないかと思ってしまうのだ。

だが遊里の考えなど分かる筈もない。

動かないでくれと祈るぐらいしか出来ないのだから。

しかし。

「悪い予感程、当たりやすいか……」

嫌な予感がする。

それが当たって欲しくないと願いながらも、当たってしまうという確信がナツシユの中にはあるのであった。

「……遊里？」

「ん、愛華かどうしたんだ？」

花添愛華がふと見かけた先にいたのはバイク型の乗り物にのった幼馴染である青山

遊里の姿であった。

既に空は暗く、異常気象が起きているし、世界は人々の暴動が起こつたりしていると大混乱を起こしている。

愛華は家族達と共に避難をしようと話していたのだ。

だと言うのにこの幼馴染は何処かに行こうとしているのだ。

少なくとも避難をするという様子ではない。

家族を大事にしている遊里が一人で避難するなど考えられないからだ。

「どうしたじやありませんわ。何処に行くつもりなのです？」

「ああ、ちよつくら世界を救う手助けをしてくる」

「はあ？」

遊里の発言に思わず愛華らしからぬ言葉が出てしまう。

何処か頭でもぶつけたのだろうか。

「真面目な話さ」

「真面目な話って……」

何処をどう考えたら世界を救うとか考えるのだろうか。

「この世界に侵略してくる奴等がいて、それを迎え撃とうとしている連中がいる。俺は脇役だがまっ、手助けぐらいは出来るさ」

「何を言って……」

「愛華は避難しな。ついでに父さん達も一緒に連れて行ってくれ」

「ま、まっってください！」

与太話と愛華が切り捨てて、遊里の表情は未だに真剣そのものだ。

こここの段階に来て、遊里は本気なのだど理解する。

その内容さっぱり分からないが、本当に世界を救うつもりなのだろう。

「一体何をやる気なんですの？」

「ああ」

愛華が質問をすると遊里の表情が変わる。

思わず聞かなければ良かったと思う程、凜猛な顔つきになる遊里。

「ちよつとしたリベンジと足止めさ」

「ふん、たいした事がない奴等だ」

遊馬の師匠だという爺とその弟子らしき男の2人組みを倒したギラグはふん、と息を

吐き出した。

確かに途中まではそのコンビネーションの前に苦戦したが、所詮はただの人間。

バリアン七皇の1人である己に勝てる筈もなかったのだ。

だが多少の時間稼ぎをされてしまったのは事実だ。

既に遊馬達は遠くへと逃げ出している事だろう。

急いで追わなくてはならない。

そう考えて、足を動かそうとした時。

「よう、会えて嬉しいぜでかぶつ」

「……なんだ、テメエは」

後ろから声をかけられた。

まるで長年会えなかった友人に再会した時のような声だ。

しかしギラグはその声の中に隠された殺気を感じ取っていた。

だからこそ、こうして足を止めてしまったのだ。

振り向くとそこにいたのは1人の男。

そしてこの男にギラグは見覚えがあった。

青山遊里。

かつて自分が洗脳した男である。

「どうしてここに?とか聞くんじゃないだろうな。用件なんてたった1つだろう」

「遊馬達を逃がす為の足止めか。そんな無駄な事はやめておきな。人間のテメエじゃ」

「はあ、遊馬達を逃がす?」

ギラグの言葉に驚いたような様子を見せる遊里。

それを見て逆に言葉を失ってしまふギラグ。

遊里の様子からそれが本心だと理解してしまつたからだ。

ならば何故、こんなビルの上に行ってきて、ギラグの前に立つというのだ。

「おいおい、理解してないのかよ。やる事なんてたつた1つだろう」

「何……?」

デュエルディスクを構える遊里。

その表情には隠しきれない程の歓喜と狂気が交じり合っている。

それを見て、思わず後ずさるギラグ。遊里の威圧に負けたのだ。

「俺はテメエをぶつ潰して借りを返しに来ただけだ」

「……ハッ!」

遊里の威圧を無視するようにギラグも大声を上げた。

確かにその気迫は驚嘆するべき点だが、所詮は人間。

先程の2人組みと同じように倒してしまえばいいのだ。

そしてそれを可能にする新たな力をナツシユから与えられている。

負ける要素など何処にもないのだ。

「だったら返り討ちにしてやるぜ！」

「さあ、デュエルだ！」

ギラグと遊里。

その2人が激突。

そして……。

その数分後、ハートランドシティにギラグの断末魔が響く事になる。
ギラグは負けたのだ。

5 VSギラグ ドルベ ベクター

「まずは俺のターン！ドローー！」

先手を取ったのはバリアン七皇の1人であるギラグ。

そのドローの力強さは確かに皇と名乗るだけの事はあった。

しかし相手である青山遊里は一切動じるような様子は見られない。

「俺は《ファイヤー・ハンド》を召喚するー！」

ギラグが最初に呼び出したのは炎の手であった。それがギラグの肩にと装備される。

するとギラグの表情に苦痛が浮かび上がる。

モンスターを装備するとそれだけの代償がくるのだろう。

攻撃力は1600とレベル4のモンスターとしては普通の部類である。

だがそれだけで終わる訳がない。

「更にフィールド上に炎族モンスターがいる時、こいつを特殊召喚できる！来い！《プロ

ミネンス・ハンド》！」

更に手型のモンスターが特殊召喚され、《ファイヤー・ハンド》と逆のギラグの肩に装

備される。

これでレベル4のモンスターが2体揃った。

「レベル4の《ファイヤー・ハンド》と《プロミネンス・ハンド》をオーバーレイ！エクシーズ召喚！」

炎を司る2つの手が光を重ねて行く。

呼び出されるのは分かっている。

オーバーハンドレッド・ナンバーズだ。

「この世の全てを握り潰せ！《No.106 巨岩掌ジャイアント・ハンド》！」

2つの炎の手が合わさり巨大な手となる。

これこそがギラグのオーバーハンドレッド・ナンバーズなのだ。

「そしてカードを2枚セットしてターンエンド！さあ、貴様のターンだ！」

己のフィールドはこれで磐石だとギラグは思う。

相手のモンスター効果を無効化にするジャイアント・ハンドがいる。

加えてセットしたカードは攻撃された時に攻撃表示の相手モンスターを全て破壊する《聖なるバリアー―ミラーフォース―》と効果ダメージを0にする事が出来る《リフューズ・ハンド》があるのだ。

簡単にこの布陣を突破できる筈もあるまい。

そうギラグは考えている。

だがもし、もしもだ。

この場にナツシユがいたら、こう答えるだろう。

馬鹿めが、と。

その程度の布陣など役に立たないと、そう答えていたに違いない。

そしてその遊里はと言うと笑っている。

「テメエ……何がおかしい!？」

「いや、その程度でいいのかって思ったな」

「なんだと……!？」

あまりの遊里の態度にギラグに怒りがこみ上げてくる。

たかが人間ごときがバリアン七皇の1人である自分を馬鹿にするなど許せないとは
かりだ。

「この俺を舐めてるのかあ!」

「舐めちやいないさ。だが1つ言っておくぜ」

「何……!？」

これだけ威圧し、力を見せ付けているというのに遊里はなんら1つぶれた様子がない。
い。

そして何を言うつもりなのだ。

「このターンでテメエのライフは0になる」

「ふざけるなあ！この俺を1ターンで倒すだと！いい加減にしやがれえ！」

今度こそギラグがぶち切れる。

デュエルが始まってまだ2ターン目。遊里のターンは実質1ターン目だ。

だと言うのにギラグを倒すと宣言したのだ。

既にギラグの場には強力なモンスターと2枚のカードが伏せられている。この状況を突破するのは容易ではない筈なのだ。

しかし遊里の目は本気である。

本気でこのターンにギラグを倒す気なのだ。

「さあ、覚悟はいいか？俺は出来てるぜ」

「やれるもんならやってみやがれえ！」

「ドロー。じゃあお言葉に甘えて。まずは《大嵐》を発動！フィールド上の魔法、罫を全て破壊する！ま、俺の場にカードはないからお前のカードだけだな」

「なんだとお!?!」

遊里のカードから放たれた嵐が次々のギラグの魔法・罫カードを破壊しつくしていく。

巨大な嵐が過ぎ去った後には魔法や罫が何もない綺麗なフィールドだけが残る。

だがそれでも巨大な手であるジャイアント・ハンドがいる。

しかしその余裕は次の一手で完全に吹き飛ばされる事になる。

「更に速攻魔法！《禁じられた聖杯》を発動！これでジャイアント・ハンドの効果は無効化となる！」

「ば、馬鹿な……」

一瞬と言っている。

たった2枚のカードでギラグのフィールド上のカードは無効化されてしまった。

対策として伏せてあった罫は破壊され、エースモンスターはその効果を発動する事すら出来なくなってしまうている。

「だ、だがまだ攻撃力2400のジャイアント・ハンドが残っている……」

呻くように、自分に言い聞かせるようにギラグは己のエースモンスターを見上げる。

効果は無効化されてしまったが、攻撃力2400になっている。これを簡単には突破出来ない筈だ。

万が一突破されてもこのターンでライフ4000を削りきれぬ筈もない。

ギラグはそう考えている。

だが甘い。

青山遊里はこのターンでお前のライフを0にすると言った。

それはつまり実際、妨害がなければやれると確信しているのだ。

そしてギリグの場に妨害出来るカードは残っていない。

「さあ、行くぜ！俺はライフを半分支払って《ヒーローアライブ》を発動！自分のデッキからレベル4以下のE・HERO1体を特殊召喚する！」

「いきなりライフを半分支払うだ?!」

ライフ4000制において、ライフを半分支払うというのは決して安いものではない。

しかもライフが減っている後半ではなく、ライフが1も変動していない序盤にも支払えばその量は非常に多い。

事実、遊里のライフが一瞬にして2000になっている。

だが遊里の表情に変化はない。

いや、その目は狩りをするような目つきに変貌している。

「来い！《E・HERO エアーマン》！」

竜巻と共にデッキから飛び出してきたのは風を操る戦士。

2000という遊里の命を対価に特殊召喚されたのだ。

「そしてエアーマンの効果発動！こいつが召喚、特殊召喚された時、デッキからHEROと名のつくモンスターを1体手札に加える事が出来る！俺が加えるのは《E・HERO

「ブレイズマン！」

エアーマンの背中にある機械的な翼。その翼に内蔵されているプロペラが回転していく。

すると、それが新しい竜巻を発生させると遊里のデッキから1枚のカードが飛び出してくる。

カードをサーチしたのだ。

「だが攻撃力1800程度で……！」

「おいおい慌てるなよ。俺は《ブリキンギョ》を召喚する」

更に遊里の場に現れたのは金魚の玩具を思い出させるモンスターが現れる。

そのレベルは4。

これで遊里の場にもレベル4のモンスターが2体揃った事になり、ギラグはエクシズ召喚かと身構えるが、まだ早い。

「召喚された《ブリキンギョ》の効果発動！手札からレベル4のモンスターを特殊召喚する！こい《E・HERO ブレイズマン》！」

玩具の金魚から1体のモンスターが飛び出してくる。

炎を纏い、孔雀のような炎の翼を持った英雄。

それこそが《E・HERO ブレイズマン》だ。

これで3体。

「《E・HERO ブレイズマン》の効果発動！こいつが召喚、特殊召喚された時、デッキから《融合》を1枚手札に加える事ができる！」

「《融合》だと……!?!」

「ま、今回は必要ないんだがな」

ブレイズマンの背中から炎が飛び散る。

それが巨大な炎となり、エネルギーとなりデッキから1枚のカードを引つ張り出す。

魔法カード《融合》だ。

「俺はレベル4の《E・HERO ブレイズマン》と《ブリキンギョ》でオーバーレイ！
エクシーズ召喚！」

炎の戦士が巨大な焰を作ると、玩具のキンギョがその中に飛び込んで行く。

その焰は巨大な光となり、新たなモンスターを導く灯火となる。

「漆黒の闇より愚鈍なる力に抗う反逆の牙！今、降臨せよ！エクシーズ召喚！ランク4
！《ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン》！」

「ぐおおお!!」

反逆の闇竜が灯火を伝い遊里のフィールド上に現れる。

その咆哮の強さは物言わぬ巨大な手を圧倒する程だ。

「だ、だが攻撃力2500なら……」

「ダーク・リベリオンの効果発動！オーバレイユニットを2つ使い、相手モンスターの攻撃力を半分にし、その数値分だけこのモンスターの攻撃力をアップする！トリーズン・デイスチャージ！」

「な、なにい!?!」

オーバレイユニットの2つの光がそれぞれの両翼に宿ると、翼の装甲が開かれる。そこから雷が放たれる。

その雷は一直線にジャイアント・ハンドに襲い掛かる。

本来ならば、モンスター効果を阻害できる力を持つジャイアント・ハンドも聖杯の力に物言わぬ手になっている。

あつという間に雷に捕まると、その攻撃力の半分以上を奪われていく。

これでジャイアント・ハンドの攻撃力は1200に下がる。

逆に《ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン》の攻撃力は3700。

そしてこの時点でギラグの敗北は確定したのだ。

「攻撃力3700……」

「だがまだ終わりじゃない。俺は魔法カード《ミラクル・フュージョン》を発動！こいつは自分のフィールド、もしくは墓地にあるカードを除外してE・HEROの融合モンス

ターを融合召喚できる！」

「墓地のカードを使って融合だとお!?」

「俺は墓地の《E・HERO ブレイズマン》と《ブリキンギョ》を除外!融合召喚!来い!全てを凍てつかせる氷結のE・HERO!《E・HERO アブソルートZero》!!」

奇跡の輝きが放たれると、墓地から凄まじい冷気がフィールドに流れ込む。

その冷気と共に現れたのは氷。

何の汚れもない。まるで全てを透き通すような、そして全てを反射するような氷の体を持った英雄が現れたのだ。

「さあ、閉幕の時間だ」

「……馬鹿な」

「まずはエアーマンの攻撃!ジャイアント・ハンドを破壊しろ!」

再び背中のプロペラが大きくうねりを上げ、巨大な風を発生させていく。

先程と違うのは、今度は明確な殺気と力がある事だ。

その風は巨大な力の渦となって、ジャイアント・ハンドへと襲い掛かる。

本来ならば攻撃力1800しかないエアーマンよりもジャイアント・ハンドのほうが攻撃力は高い。

しかし反逆の翼から放たれた雷はその身を拘束し、力を奪い取っていたのだ。

もう一つ、ナンバースはナンバースでしか破壊できないという効果もあるのだがこちらは聖杯の力により、無効化されている。

故にエアーマンの風から身を守る事すら出来ず、ジャイアント・ハンドは破壊されてしまった。

ギラグのライフが3400に減る。

だがこれで終わりなどではない。

「そして速攻魔法発動！《マスク・チェンジ》！このカードでエアーマンを新たな姿に変身させる！来い！《M・HERO カミカゼ》！！」

「変身だと……!?!」

エアーマンの前に現れた仮面。

それをエアーマンがかぶると、新たな姿になっていく。

巨大なマントを靡かせる風の戦士に変身したのだ。

ギラグはそれらを見て、もうどうしようもない事に気づいてしまった。

《ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン》。

《E・HERO アブソルートZero》。

《M・HERO カミカゼ》。

その攻撃力の合計は8900。

初期ライフが2倍あったとしても即死する威力だ。

そしてその攻撃を止める術をギラグはもう持っていない。

「ありえねえ……俺は……俺はバリアン七皇なんだぞ！」

ありえないものを見るように叫び続けるギラグ。

しかしどれだけ叫ぼうが喚こうが目の中の現実が変わる事はない。

もはやギラグは詰んでいるのだ。

「これが現実だ。お前の負けだ」

「……」

「さあ、終わりにするぞ！俺はモンスター3体でギラグ！貴様にダイレクトアタック！」

「ぎっ、ぎいやあああああ!!」

無防備のギラグに遊里のモンスター達が一齐に攻撃を仕掛ける。

その攻撃によりギラグのライフは一瞬にして0となった。合計ダメージは9500。

オーバーキルである。

ショックからか、ギラグの目から光が失われるとその体は地面に倒れ伏す。

「ライフ8000。確かに削りきったぜ」

初期ライフは4000だと言うのに、ポツリとそんな事を呟く遊里。

その言葉を理解できるものは残念ながらこの場にはおらず、誰も理解される事はないだろう。

何か懐かしむように黄昏ていると、ギラグのデッキから一枚のカードが遊里の下に飛んでくる。

それをキャッチし、確認すると何か納得したように遊里が頷いた。

「なるほど、こいつのせいか」

そのカードは《No. 58 炎庄鬼バーナー・バイサー》。

ナンバーズだ。

遊里が勝利した事により所有者が移ったのだろう。

しかしそれでもオーバーハンドレッド・ナンバーズは遊里の元にはやってこなかった。

が、それは割とどうでもいいと遊里は思っている。

知識により不可能だと知っていたし、奪うつもりもなかったからだ。

それより問題なのはこの手元に来たナンバーズか。

やはりと言うべきか、こちらを乗っ取るうとする様子が見られる。

気迫で無視するが、やはり負担が大きいのは事実だ。

「……行くか」

倒れたギラグを放置し、ビルを降りて行く。

目的地はただ一つ。

次のバリアンがいる場所だ。

「……ギラグからの反応はない」

「何者かに負けたというのか」

「その可能性が高いわね……」

バリアンの白き盾であるドルベ。

真の銀眼使いであるミザエル。

灼熱の太陽すら瞬間凍結、氷の剣であるメラグ。

ハートランドシティにある橋の中心で3人のバリアン達が集結していた。

既に先程、こちらの足止めをやってきた2人のナンバーズ使い、IIIとVはミザエルが倒している。

こちらの動きを封じていた結界も解かれ、行動可能になった訳だがどう動くべきかをこうして相談しているのだ。

とは言っても行動指針は決まっている。

遊馬とアストラルはバリアン世界に向かっているらしいし、カイトは月に向かっている。

ならば遊馬達を追えばいいだけだ。

「私はカイトを追う」

ミザエルはぶれる事なくそう言い放った。

確かにバリアンの本懐を果たすならば、遊馬を追うべきなのだろう。

だがそれ以上にミザエルはカイトとの決着をつけなければならぬのだ。

本当の真の銀河眼使いを決める為だ。

「待て、ミザエル」

「止めるな、ドルベ」

ドルベとしては全員で遊馬を追いたい筈だ。

だがミザエルはその程度では止まらないだろう。

どうしたものかと、メラグが声をかけようとした時、音が聞こえてきた。

何の音かと、音がする方向に顔を向けるとこちらにやってくる一台のバイク型の乗り物。

そしてそれにメラグは見覚えがあった。

「まさかっ!？」

3人の前に急停止する乗り物。

そこから降りてきたのはメラグが良く知っている人物であった。

「青山遊里……!」

「よう、神代妹。先日ぶりだな」

いつも以上に獰猛な表情した遊里。

そしてそれを見てメラグは一瞬にして理解した。

この男が原因に違いないと。

「貴方ね……メラグを倒したのは」

「何っ!?!」

「こいつが……!?!」

「ああ、あのでかぶつか。歯応えも何もなかったぜ、あいつ」

メラグの言葉に対して、なんでもないように言う遊里。

その言葉に3人の表情が一変する。

ギラグは確かに脳筋と言っているいい人物であり、七皇の中でも格下扱いされる事はあるが、その実力は誰もが認めている事であった。

それをたいした事がなかったと言う遊里。

ミザエルは憤慨している様子だが、その実力を知っているメラグにははったりには聞

こえなかった。

確かにこの男ならばやりかねない、と。

だが1つ疑問がある。

「……なぜここに来たのかしら？」

「ん？」

「ギラグを倒した理由はなんとなく分かる。でも貴方がここまで来る理由が思いつかない」

青山遊里はバリアンとの戦いには積極的に動かない事を知っている。

ギラグは洗脳されたという借りを返したのだろうと推測は出来るのだが、どうしてここにやってきたのが不思議でならない。

普段の遊里ならば、ギラグを倒した時点で手を引いていただろう。

「ま、そう思うよな」

「ええ」

いつもの様子でメラグの言葉に頷く遊里。

「なんとなくさ」

「なんとなく……ですって……!？」

「そうさ。なんとなくで、お前等を倒しにきた」

足止めではなく倒しに来た。

遊里のはつきりとした言葉に3人の表情が変わる。

自分達を倒せるのだとはつきりと言ったも同然だからだ。

「舐められたものだ……ならば先程の兄弟と同じように私が倒してやろう！」

カイトと戦う為の準備運動だとばかりに前に出るミザエル。

既にお互いにデュエルディスクを構え、臨戦態勢に移っている。

だがそんなミザエルを止めたのはドルベであった。

「待て」

「ドルベ、何故止める!？」

「我々の目的は九十九遊馬を倒し、ナンバーズを回収する事。奴に構っている暇はない」

正論である。

ナンバーズ使いではない遊里と戦う必要性ははつきり言えばないに等しい。

確かにギラグの仇を取りたい所ではあるが、今はバリアン世界を救う事を優先するべきなのだ。

だがそれは遊里がナンバーズを持っていないという前提なのだが。

「ナンバーズならここにがあるぜ」

「なんだとっ!？」

遊里がケースから取り出した一枚の黒いカード。

それこそ先程、ギラグを倒した時に奪ったカード、《No. 58 炎圧鬼バーナー・バ
イサー》だからだ。

「ナンバーズ……貴様も持っていたのか」

「ちよつと奪ってきた一枚だが……欲しいんだろ、これ」

まったくもってその通りである。

勿論、遊馬に比べれば優先度は圧倒的に低いがそれでもナンバーズである事に間違いはない。

「……ミザエル、君はカイトを追え」

「ドルベ!?……いいのか?」

「ああ。だが早くカイトと決着をつけ、ナツシュと合流するんだ」

「……分かった、恩に着る」

ミザエルは一言、それだけ呟くとその姿を消す。

カイトを追い、月へと向かったのだろう。

「メラグ、君はナツシュと合流してくれ」

「ドルベ! 奴との相手は私がするわ!」

その言葉でドルベがどうするつもりなのかを理解した。

青山遊里と戦うつもりなのだろう。

だがその実力は強大だと分かっているし、それ以上に未知数な部分が多すぎる相手だ。戦うならば先日まで間近でよく見ていたメラグの方が適任なのだろう。

しかしドルベは首を横に振る。

「ここは任せて欲しい。私はバリアンの盾だからな。矛の役目は君達だ」

「……ドルベ、後でバリアン世界で会いましょう」

「ああ」

その強い意志を感じ取ったのだろう。

メラグはそれだけ言うと言姿に消す。バリアン世界へ向かった遊馬を追う為に。

2人が姿を消すと、ドルベは遊里の方へと向き直る。

「待たせて悪かったが、良かったのか？」

「俺も全員を倒せるとは思ってたないさ」

「そこまでは傲慢ではないようだな」

「いや」

関心したようなドルベの言葉を否定する遊里。

「俺が全員倒したら、獲物がいなくなつて遊馬達が倒す相手がなくなつちまうだろう」

「貴様……！」

この男はバリアン七皇、全てを倒せるのだと言っているのだ。

さすがにここまで傲慢な発言をドルベは許せるような男ではない。

「貴様はこの私が倒す！」

「来いよ、白き盾！お前もここで終わりにしてやる！」

「リアルフオオオゼエエ！」

人間の姿だったドルベの姿がバリアンとしての真の姿に変わる。

それと同時にお互いにデュエルディスクを構える。

さあ、後は何も語る事はない。

デュエルをするだけだ。

『デュエル！』

「俺のターン……俺はモンスターとカードをセットしてターンエンドだ」

先手を取ったのは遊里。

しかし先程の威勢とは違い、モンスターとカードを一枚ずつセットするだけで終了する。

「私のターン、ドロー！」

手札を確認する。

これならば早々に切り札を呼び出す事が出来る上に、相手のライフに先制打撃を与える事が出来る。

「私は《光天使ウイングス》を召喚する！」

ドルベの場に現れるのは翼を具現化したような天使モンスター。

それが光を纏って飛翔する。

だが攻撃力は僅か1200しかないが、勿論そんなモンスターをただ出す訳ではない。

「このモンスターを召喚した時、光天使モンスターを手札から特殊召喚する事が出来る！現れる《光天使ブックス》!!」

《光天使ウイングス》の光の軌跡を辿り、ドルベの手札から新たなモンスターがフィールド上に現れる。

それはまるで本のような天使モンスター。

これで2体。

だがドルベの手は緩まない。

「ブックスは1ターンに1度、手札の魔法カードを墓地に送る事で手札から光天使モンスター1体を特殊召喚する事が出来る！来い《光天使ソード》!!」

ブックスがドルベの魔法カードの力を得て輝きだすと、ページが開かれていく。そこから新たなモンスターが飛び出してくる。

それは天使の剣。

これでドルベのフィールドには3体のレベル4モンスターが揃った。

条件はこれで揃ったのだ。

「私はレベル4の《光天使ウイングス》、《光天使ボックス》、《光天使ソード》をオーバーレイ！エクシーズ召喚!!」

3体の天使が光を纏い、1つへと重なり合っていく。

それは少しずつ大きくなっていき最終的には巨大な爆発と共に新たな光天使を戦場へと呼び出す事になる。

「さあ、見るがいい！現れろ！No. 102！光天使グローリアス・ヘイロー!!」

今までの天使達を遥かに圧倒するその力強さ。

それを抱いた大天使が現れたのだ。

「バトル！グローリアス・ヘイローでセットモンスターを攻撃！ライトニング・クラスター!!」

大天使はその手に光の槍を取り出すと、遊里のセットモンスターへと投げつける。その槍は光のビームのように放たれ、容赦なくセットモンスターへ襲い掛かった。

強大なエネルギーの前にセツトモンスターは耐える事なく消滅する事になる。

「この瞬間、手札から速攻魔法を発動！《ラス・オブ・ホーリーライトニング》！私の場に光天使モンスターがいる時、相手モンスターが破壊された場合、相手に1000ポイントのダメージを与える！喰らうがいい！」

「つつつ！」

グローリアス・ヘイローの手に巨大な弓が現れる。

その手に光の矢が番えられると、同時に矢が遊里に向かって放たれる。

よける事も出来ずに直撃する矢。

それと同時に遊里のライフが3000に減る事になった。

「どうだー！」

「破壊されたモンスターは《E・HERO シャドー・ミスト》だ。こいつが墓地に送られた時、デッキからシャドー・ミスト以外のHEROモンスターを1枚手札に加える事が出来る。俺は《E・HERO エアーマン》を手札に」

光の槍に破壊された闇霧の戦士から黒い霧が立ち上る。

するとその霧は遊里のデッキに取り付くと、1枚のカードを抜き出すと遊里の手札に収まる。

確かに破壊されたが、リカバリーは出来た事になる。

「……私はカードを1枚セットしてターンエンドだ」

「俺のターン!……さあ、終わらせようかドルベ!」

「何っ!?!」

先制パンチを受けたというのに飄々とした様子の遊里。

いや、もつと細かく見れば遊里の顔には汗が酷く浮かんでいる。

ギラグから取ったナンバーズの影響が遊里を蝕んでいるのだ。

だがドルベに余裕はない。

遊里の実力を聞いているからだ。

「俺は《E・HERO エアーマン》を召喚する!こいつが召喚された時、デッキからHEROモンスターを1枚手札に加える事が出来る。俺が加えるのは《E・HERO シャドー・ミスト》」

エアーマンが巻き起こす竜巻によってデッキからカードが飛び出してくる。

それを遊里は掴み取ると次の行動に移る。

「魔法カード《融合》を発動!モンスターを融合させる!俺は手札の《E・HERO シャドー・ミスト》と《E・HERO ブレイズマン》を融合!全てを飲みこむ闇のE・HERO!エスクリダオ!」

闇霧と焔が重なりあい、新たな姿を示す。

遊里のフィールド上には闇のエレメンタルを操るHEROが光臨していた。

まさに漆黒の化身とも呼ぶべき存在であり、光を操るグローリアス・ヘイローとは対極の存在であろうだろう。

「そして墓地に送られた事によりシャドー・ミストの効果が発動する。手札に加えるのは《E・HERO バブルマン》！」

「くっ、融合の手札消費を抑えたというのか」

再び黒い霧に導かれてデッキからカードが1枚遊里の手札に渡る。

だがまだ遊里の行動は終わっていない。

「そしてカードを3枚セット」

「このタイミングでセットだと……？」

まだバトルも行っていないこのタイミングでの魔法・罠のセットにドルベに疑問を抱かせる。

速攻魔法や罠ならばバトルが終わった後の方がいいだろう。セットしたターン、発動できない速攻魔法なら尚更だ。

しかしそんな疑問は突如、遊里のフィールド上に泡が現れた事により吹き飛ばす事になる。

「馬鹿な!このターン、貴様は既に召喚した筈だ!」

「バブルマンの効果さ」

「なんだと!」

突然フィールド上に現れた泡の正体。

それこそが水のE・HEROであるバブルマンなのだ。

既に召喚権を使用した遊里がフィールド上に出す術などない筈だが、それはあくまで遊里では出せないだけである。

そう。バブルマン自身の効果ならば話は別なのだ。

「俺の手札にあるカードがバブルマンだけの場合、特殊召喚する事が出来る!」

「それか!」

「そして俺はエアーマンとバブルマンでオーバーレイ!エクシーズ召喚!」

エアーマンとバブルマンが新たな光を生み出す。

そして呼び出されたのは金剛の肌を持った狼。

「《恐牙狼 ダイヤウルフ》!」

だが攻撃力は2000。

隣のエスクリダオに比べるとその力が足りないようにも見える。

しかしそれはあくまで攻撃力の話だ。

「ダイヤウルフの効果発動!オーバーレイユニットを1つ使い、自分フィールド上の獣、

獣戦士、鳥獣族モンスターを1体破壊し、相手フィールド上のカードを破壊する！」

ダイヤウルフが自身のオーバレイユニットを喰らうと、その肌が光輝き始める。

しかし遊里のフィールド上で破壊できるカードとは一体なんだとドルベが思ったが、1つの答えが見つかる。

「俺はダイヤウルフ自身とドルベ、お前のセットカードを破壊する！」

「馬鹿な！自身のモンスターを破壊するというのか!？」

「それが仕事なんでな！やれ、ダイヤウルフ！」

光輝く狼は大天使の横をすり抜け、伏せられていたカードへと飛び掛る。

グロリアアス・ヘイローが慌てるように動くがもう遅い。

その光が大きくなった瞬間、爆散するようにダイヤウルフとセットカードが破壊されたのだ。

「なんと……!？」

「そして更に魔法カードを発動！」

「何っ!？」

遊里の手札は0。

となれば先程、伏せたカードに違いない。

通常魔法は伏せられたターンであつても発動する事が可能なのだ。

「俺は《簡易融合》を発動！ライフを1000払い、エクストラデッキからレベル5以下の融合モンスターを融合召喚扱いで特殊召喚する！来い！《旧神ノーデン》！」

「だが確かそのカードで特殊召喚したモンスターは攻撃できない筈だ！」

「知ってるか。付け加えるならこのターンのエンドフェイズに破壊される。だが関係ないね。俺はノーデンの効果発動！こいつが特殊召喚された時、自分の墓地のレベル4以下のモンスターを効果を無効にして特殊召喚する！蘇れブレイズマン！」

古き神々。海神を思わせるようなモンスターだ。

そのノーデンの持つ道具から放たれる光に導かれるように焔の戦士が蘇る。

だがその効果は封じられている状態だ。

そしてここでドルベもようやく気づく。

これ呼び出した理由などただ一つ。レベル4のモンスターを揃える事なのだ。

「エクシーズ召喚か！」

「ああ！俺は《旧神ノーデン》と《E・HERO ブレイズマン》でオーバーレイ！エクシーズ召喚！」

旧神に導かれるように焔が世界を巻き込んで行く。

呼び出されるのは遊里にとっての対ナンバース用のモンスター・エクシーズ

「来い《鳥銃士カステル》！」

「そのモンスター・エクシーズは……!」

「対ナンバーズ用のモンスターさ。カステルの効果発動! オーバーレイユニットを2つ使い、表側表示のカードを1枚デッキに戻す! 俺が戻すのは当然、グローリアス・ハイロー!」

「ば、馬鹿な!?!」

大天使があつさりとエクストラデッキに戻される。

その効果が生かされる事はもはやない。

「更に魔法カードを発動! 《ミラクル・フュージョン》! こいつは自分のフィールド、もしくは墓地にあるカードを除外してE・HEROの融合モンスターを融合召喚できる!」

「なん……だと……!?!」

「墓地のブレイズマンとバブルマンを除外する! 来い! 氷のE・HERO! 《E・HERO アブソルートZero》!!」

「(、(、これは……!」

既にドルベも悟っていた。

もはや勝ち目はないと。

「さあ、バトルだ! まずはアブソルートZeroの攻撃!」

ふわりとアブソルートZeroのマントがゆれる。

「っ！」

ドルベが息を飲む。

次の瞬間、己に一瞬で接近する純白の姿を見る事になる。

「瞬間氷結——Freezing at moment！」

ドルベは自身の体が一瞬で凍りつくようなイメージを覚える。

それまでにこのモンスターの一撃は重すぎた。

この一撃でドルベのライフは2500も減り、一瞬で1500へと減る。

しかし攻撃はこれで終わりではないのだ。

「そしてこの瞬間、リバースカードオープン！速攻魔法《マスク・チェンジ》！」

「っ！最初のターンに伏せたカードか！」

「その通り！変身しろ！アブソルートZero！」

仮面が攻撃したばかりのアブソルートZeroの前に現れる。

それをかぶった瞬間、水と氷の乱舞が巻き起こった。

そんな中を突き破って現れる新たな戦士。

《M・HERO アシッド》。

それが姿を現したのだ。

既にドルベの場にカードはないというのに、手加減などしないとはかりの大展開。もはやドルベの命運は尽きたも同然だ。

「は……はは……ナツシュ。君の言う通りだ」

3体のモンスターを前に呻くように呟くドルベ。

「奴こそが……九十九遊馬すら超える最大の障壁だったのかもしれん」

「3体のモンスターでダイレクトアタック！」

「?!?!」

一瞬にしてドルベのライフが0になる。

総ダメージは9800。

その衝撃を一身に受けながら、ドルベの意識は闇に落ちていった。

「……うっ」

「よう、目覚めたか」

「貴様は……」

バリアルフオーゼが解け、人間の姿になったドルベが目覚まして最初に見たのは倒れているドルベの横に座ってリラックスしている遊里の姿であった。

「どうやらデュエルが終わってからずっと近くにいたらしい。

「あれから……どれ程、経った……?」

「ま、30分つて所か」

「そうか……」

「それ程、時間が経った訳ではないらしい。

「ならば急いでバリアン世界に戻らなくてはと、体を動かそうとするがまるで動かない。い。」

「遊里に負けた衝撃はかなりものだったようだ。

「あんまり動かない方がいいぜ。見た目だけならさうとうポロポロだけ、あんた」

「どうやら中身もさうらしい」

「そうか」

「それだけ言うと2人は静かに時間が過ぎす。

「さすがの遊里も疲れているのだろうか。」

「ドルベも本来は今すぐにでもナツシユやメラグの元に行きたいのだろうか、その身に受けたダメージは遥かに大きい。」

「指1つ動かすのも億劫である。」

「貴様は……」

「うん?」

「貴様はどうして戦うのだ……」

純粹な疑問だった。

自分達はバリアン世界の為に、九十九遊馬達はきつとこの世界を守る為に戦っているのだろう。

だがなんとなくだがこの男は何かが違う気がしたのだ。

「……さあ?」

「何?」

「よく分からん。正直、関わるつもりはなかったしやる気もなかったんだがな」

けどなんとなくやってきたのだという。

訳が分からなかった。

そんな曖昧な理由で自分は負けたのかと思うと、何も言う気力がなくなってしまったようだ。

「それに信じてるからな、遊馬を」

「九十九……遊馬をか?」

「ああ。きつとあいつならいいようにしてくれると思つてな。俺達の世界もお前達の世界もな」

「馬鹿な……我等はお前達の敵だぞ……」

「そうかもな。だけど遊馬にとってはどうかかな」

遊里の何か確信したような言葉に目を見開くドルベ。

一体どういう事なのだろうか。

「とりあえず、だ」

「？」

「お前を守ってみるかな」

「何っっ!？」

突然、遊里が跳ね起きると、倒れているドルベを掴んでその場から離脱する。

一体何がとドルベを見ると、先程まで自分がいた場所に触手なようなものが伸びているではないか。

「い、一体何が……!？」

「それはそいつが教えてくれるんじゃないか？」

「何……?？」

痛む体を無理やり動かしてみると、そこにはドルベが見知った人物が立っていた。

バリアン七皇の1人であるベクターだ。

かつて人間界で真月零と名乗っていた男でもある。

「べ、ベクター……!?!」

「チツ、よけない事をしやがって。ドルベの魂を食えなかったじゃねえか」
「き、貴様何を……!?!」

味方であるベクターがどうして自分を殺そうとしてくるのか。

それが分からず混乱の渦に叩き落されるドルベ。

しかし遊里はそんなドルベを無視するかのようにベクターに話かける。

「久しぶりだな、真月。随分とイメチェンをしたみたいだな」

「ハツ、久しぶりだなあ、遊里先輩よおー!」

先輩と後輩の再会。

だがベクターの声色にはそんな懐かしむような色は何一つない。

むしろ忌々しいと言わんばかりの色を出している。

逆に自然体なのは遊里だ。

ごく普通に後輩に話しかけるような声だ。

「な、何をやってるんだ貴様は……?」

「ああん? わからねえのかよドルベ。オレはお前等他の七皇を倒して、その力を全て貰おうとしてるだけさ」

「ば、馬鹿な……そんな事ができる訳がない……!」

ベクターの言っている事はまさに世迷言だ。

そんな事が出来る筈もない。

しかしベクターの表情には自信とそして優越感が漂っている。

「できるさあ！何故ならドン・サウザンドをオレの体に蘇らせたからなあ！」

「な、何っ!？」

ドン・サウザンド。

バリアン世界の創造神。

それが今、蘇りベクターの中にいるという。

「な、何故バリアンの神であるドン・サウザンドが……!？」

「奴に言わせれば、七皇なんてただの餌なんだよ。ざーんねんでした！」

「だ、だがそれは貴様も同じ筈だ！」

「馬鹿め！今のオレはドン・サウザンドと一体化してるんだよ！つーまーりー、オレがテ
メエらを喰らえばドン・サウザンドもパワーアップ！オレもパワーアップ！つまり両方
ハッピー☆って事さ！」

つまりベクターとドン・サウザンドは運命共同体という事か。

既に餌という存在を超えたのだろうベクターは。

「って事だ！人間にボコボコにされたドルベさんよお！大人しく俺に喰らわれてくれよ

！後はお前とナツシユ、ついでにミザエルだけなんだからなあ！」
「な……何……!?」

ベクターの言葉を聞いてドルベの目の前が真つ暗になる。

後はドルベとナツシユ、ミザエルだけ。

それはつまり他の七皇は……。

「アリトとギラグの野郎は相打ちした所を喰らってやったぜ！アリトの野郎は遊馬に寝返りやがったからなあ！邪魔な事をされる前に片付けられて良かったぜ。メラグは俺に歯向かって来てな、返り討ちにしてやったぜ」

メラグ。

後でまた会おうと約束した彼女。

それがもういない。

奴に。ベクターに喰われた。

「ベクタアアアアアアアア！」

怒りのあまりに体の痛みを忘れて咆哮するドルベ。

中にあるのは純粹な怒りと憎しみ。

仲間を。そして親友の妹を失った事に対する怒りだ。

「貴様あ！許せん！」

「ハッ！そんな傷だらけの姿で何が出来るってんだ！」

「貴様だけは私の手で……っ!？」

ベクターを倒そうとデュエルディスクを構えようとするドルベの前に立ちはだかった男がいた。

蚊帳の外にいた遊里である。

「待てよ真月。こいつとやるならまずは俺の相手をしてもらおうか」

「なんだと……!？」

「こいつは俺が倒したんでね。つまりこいつの所有権は今、俺にあるって事だ。こいつを喰らいたいならまずは俺を倒していくのが筋つてもんだろ」

「どうしてオレがテメエなんかと戦わなくっちゃいけないんだ？」

「当然の事を言っただけだぜ。それとも怖いのか、ベクター」

「ハッ——!」

何を言ってるんだこいつと言ったベクターの表情が一変する。

どうやらやる気になったらしい。

「まあ、いい。ナツシユが来るまでの時間潰しにはなるだろ。ポロポロのドルベなんぞ時間はかからないからなあ！」

「ああ、やろうか」

「ま、待て青山遊里！奴の言葉が本当ならバリアン界の神の力を持っている事になる！ただの人間であるお前に」

勝てる訳がない。

そう言おうとしたドルベの動きが止まる。

遊里は何も言わないが、その顔に浮かんでいるのはただ一つだ。

「なら見せてもらおうか、カミサマの力つて奴をな！」

「くひひひ！テメエを倒してナツシユを倒す為のエネルギーにさせてもらうぜ！」

『デュエル!!』

俺は負けない。

ただそれだけであった。

そしてその言葉はあっさり現実になる。

デュエルが始まって2ターンが経過した。

そう、まだ2ターン目だ。

「な……なんだと……！」

「どうしたベクター、さっきの威勢はどうしたんだよ」

先行を取ったベクターは永続魔法《ドン・サウザンドの玉座》を出し、《No. 96 ブラック・ミスト》をエクシーズ召喚し、セットカードを展開。

見た事もないカードばかりだがそこから放たれる威圧感の本物だった。だというのに、だ。

青山遊里はあっさりとそれを覆した。

こちらは先程と違い、儀式を中心としたデッキ。

その名を影霊衣——ネクロスと呼んだ。

それを巧みに使い、セットカードであった《屍の合星》はあっさり破壊され《トリシューラの影霊衣》によりナンバーズでしか破壊できない《No. 96 ブラック・ミスト》を除外してしまった。

勿論、それだけで止まる筈もなくエクストラデッキから儀式素材を送るという《影霊衣の万華鏡》により合計レベル12の《ヴァルキュルスの影霊衣》と《ユニコールの影霊衣》を展開。

最初に出した《マンジュ・ゴッド》とあわせればそのダメージ量は9300。一撃死である。

これにはあのベクターの顔色も一瞬で変わる程だ。

「ド、ドン・サウザンドの力を得たオレが負けるだとお!？」

「さっさとくたばりな。モンスター4体でダイレクトアタック!」

「がっ、ハアアア!？」

決着。

瞬殺もいい所である。

先程のドルベとのデュエルといい、これが青山遊里の本気だと言うのか。

「て、テメエ……今まで……三味線を弾いてやがったな……!」

ドン・サウザンドの力の影響か、あれだけのダメージを受けてもなんとか意識を失わずにいるベクター。

しかしそのダメージ量は凄まじいらしく今にも倒れそうだ。

「さあつてどうかな」

「チツ……テメエとやりあうのは得策じゃねえな……今は退いてやる……!」

「おう、さつさと帰りな」

「だがな! 駄賃は頂いていくぜ!」

「何っ!?!」

最後の力を振り絞つてとばかりに触手が伸びる。

遊里は虚を尽かれたものの、あつさり回避に成功する。

だが遊里の後ろにいたドルベはそうではなかったようだ。

「ぐっ、あああつ!?!」

「ドルベ!?!」

触手に体を貫かれるドルベ。

ベクターの目的は最初から遊里ではなくドルベであったようだ。

「遊里！ テメエはナツシユや遊馬を仕留めて完全体になつたら改めてぶつ潰しにきてやるよ！ 楽しみに待つてな！」

「チツ！」

遊里がドルベに駆け寄ろうとするも、その姿を消してしまうベクターとドルベ。

こうして遊里はただ一人残される事になる。

ここで青山遊里の戦いは終わりである。

バリアン世界に行く方法はない遊里にこれ以上の介入は不可能だ。

「……結局、変わらないか」

ポツリと呟く遊里。

ベクターの言葉が本当ならメラグ、ギラグ、アリトは既に喰われ、ドルベも多分喰われてしまったのだろう。

流れは違うもののほぼ原■と同じ流れだ。

となればナツシユとベクターはこれから戦い、遊馬が追いつく。

カイトとミザエルは月で決着をつけるのだろう。

多分だが、後の流れは変わる事なく同じになるに違いない。

自分がやった事は無駄だったのだろうかと思う遊里。

だが神ではない自分がやれる事など限られているのだ。

今やれそうな事はやったのだ。後は遊馬やカイト、そして凌牙に任せよう。空をもう1度だけ見上げると。

「頑張れよ」

それだけポツリと呟いて、止めてあるバイク型の乗り物に乗り込む。

愛華や家族の所に戻る。

きつと怒っているに違いないのだから。

5. 5 最後の出会い

結論だけ言えば、世界はあつという間に救われる事になった。

ドン・サウザンドは倒れ、その力を受け継いだナツシユもまた九十九遊馬に敗北したのであった。

青山遊里の持つ記録の通りの流れ。

結局、遊里がやった事は殆ど意味をなさなかったという事だ。

そんな光景を見ながら、避難先で遊里はまあいいかと納得する。

自分が介入して変わらなかったからと言って、不利益が出る訳ではないのだ。

世界は救われる。

そしてきつとヌメロン・コードにより、倒れた者達はみんな帰ってくるのだろう。

そう思えば、遊里の努力の空振りなどどうでもいい話になるだろう。

それにこれからの方が大変だろう。

世界は荒れてしまった。

バリアン七皇の攻撃やドン・サウザンドの攻撃の影響もあるだろうが、恐慌状態になった人間が被害を出している事もある。

これらを復興させるのは簡単な話ではないだろう。

しかし未だ子供の年齢から抜け出せていない遊里が何か出来るという訳でもないのだが。

それでも、と大人達に混じり手伝いをしていく訳である。

そんな事をやっている事、2日程した朝。

遊里のDゲイザーに一通のメールが届いた。

送り主は九十九遊馬。

「どうしたんですの、遊里？」

「遊馬からのメール」

「彼からですか？」

一緒に食事を取っていた愛華が聞いてくるので答える遊里。

内容は多分だが遊里には分かっていた。

バリアンとの決着がついた後の最後の最後の大舞台があるのだ。

九十九遊馬とアストラルの決戦。

ヌメロン・コードをかけた対決だ。

メールを開けば、アストラルとデュエルをするから見に来て欲しいとの事。

遊里は数秒、思考すると了解とメールを送り返す。

指定された場所と時間を確認する。

デュエル開始の時間は夕方近い。

今日の作業は早めに切り上げて向かおうと決める。

「何かあつたんですの？」

「ああ。デュエルをするらしい」

「デュエルですか……？」

こんな状況でデュエルをする。

色々と言われそうな気もするだろう。

しかし遊里の表情に何かを感じ取ったのだろう愛華はすんなりとそれを受け入れていた。

「見に行くんですの？」

「ああ、頼まれたし興味もある。愛華はどうする？」

「……いえ、私はやめておきますわ」

遊里の誘いにそつと辞退をする愛華。

勿論、愛華自身も興味がない訳ではない。

しかしなんとなく、なんとなくだが自分には見に行く資格がないような気がしたのだ。

「私は今回、何も関わっておりませんから……」

「気にする必要はないと思うけどな」

「遊里とは違うのですよ、私は」

「あー……知ってたか？」

「なんとなくですが」

愛華の頷きに遊里がバツの悪そうな顔になる。

「あんな思わせぶりな事を言っていれば誰でも分かりますわ」

「そりやそうか」

何せ世界を救うの手伝ってくる、とか言い出した上での今回の騒動。

さすがの愛華とて気づくというものだ。

「……何もなかったんですよね」

「ちよつとデュエルをしてきただけさ」

因みに内容は全部、瞬殺である。

それを見たら愛華のトラウマが刺激されるのには違いなだろう。

幼い頃の少女に対して、シャドールとか言うデッキを使うものではない。

因みに大の大人も何人かトラウマになった。

「勝ったんですわよね？」

「そりやあな」

ガツチャ、楽しいデュエルだったぜ、こっちだけが。

酷い奴である。

「ですがまだ終わっていない、という事ですか」

「ああ。それも今日終わると思うけどな」

「そうですか。なら私は終わった後、聞かせてもらいましょう。もう、やれる事はないんですわよね？」

「そうだな。俺もやれる事はデュエルを見届けるだけだ」

既に全て終わっているのだ。

今日のデュエルは一種の儀式、区切りをつける為のものでしかない。ただどとても大切な、大切な事なのだ。

「なら私はここで待っていますわ、貴方の帰りを」

「そっか。んじや行って来るよ」

そして全ての決着がついた。

《F N O . 0 未来皇ホープ》

アストラルの記憶のカケラではない、遊馬が生み出した新たなナンバース。その輝きはその場にいた者達に確かに希望と未来を見せたのだ。

遊馬の勝ちである。

それを遠くから見ていた遊里はそれだけ2人を見ながら色々と大変だっただろうな、と思った。

記憶を全てなくしてしまったアストラルもだが、訳も分からない幽霊のような存在が取り付き、死ぬかもしれないデュエルを繰り返してきた遊馬。

大変だった、の一言で済ませられるレベルではない。

涙を流してアストラルとの別れを告げる遊馬。

こうして遊馬とアストラルのナンバースを巡る物語は終わりを告げたのである。

遊里は遊馬達に挨拶だけして、自宅へと戻っていった。

今日はもう遊馬に声をかける必要がないと判断したからだ。

後には必要なのは時間だけだろう。

そうすれば少しずつ心の中を整理する事が出来る筈だ。

それに遊馬の横には小鳥がいる。

最初から最後までずっと遊馬の横で見続けていた彼女がいるならば、悪い事にはならない筈だ。

そうしたらまたデュエルをやりようと思う。

そこまで考えて1つ忘れていた事があった。

「……遊馬とアストラルとデュエルをしていなかったな」

2人と知り合ってから不本意な形でデュエルをしたが、それ以降は遊馬1人とのデュエルしかしていなかった事を思い出す。

とは言え、それは仕方ない事なのだが。

アストラルが加わるという事はナンバーズとのデュエルという事だ。

ナンバーズはこの世界の人達からすれば戦闘耐性は非常に強いし、オカルトパワー的な意味でも強力すぎるのだ。

遊里のような一般デュエリスト相手に使うものではない。

だけど遊里からすれば関係のない話だ。

強いデュエリストと戦いたいと願うのは当然の事であった。

自宅の布団に寝転がりながら、ふと思う。

何かもう1つ忘れている事はないだろうか。

そう、この世界に来た時に何か話したような……？

「……なんだったっけか」

目蓋を閉じながら、そう呟くと遊里の意識は闇に飲まれていった。

『では、最後の願いを叶えに行きましよう』
そんな言葉が聞こえてきた。

「……………」

気がつけば青山遊里はポツンと一人で立っていた。
はて、と思う。

記憶が確かならば先程、自分は自室の布団に倒れるように寝転んだのではなかったのか。

夢遊病にでもかかったのだろうかと思う。

しかし違和感を感じる。

何処となくここは現実世界ではないような気がするのだ。

そんな思いを抱きながら周りを見渡した遊里だが、ここでは、と思う。

周りを見渡すと高層ビルばかり。

こんなビルだらけの世界に既視感を抱き始めたのだ。

どういふ事なのだろうか、再び周りを見渡す。

遊里が立っているのも道路のど真ん中だが、車が通る様子もなければ人もいない。こんな昼間の都会なら誰かいそうなものだが、人影を見つける事すら出来ない。

試しにDゲイザーの通信機能やメール機能を使ってもなんら反応がない。

困った遊里はとりあえず、と適当に歩き出す。

ここには何もなければいけないが、探せば何か見つかるかもしれないと思ったからだ。

しばし歩いてみるが、やはり人影も何もない。

ビルやときおりみつけるスーパールの扉は硬く閉じており中には入れそうにもない。

ここまで来て、ある事に気づく。

歩き始めて30分程だが、周りにあるものがまったくみられないのだ。

普段の生活なら普通にあるものだが、ここにはまるでない。

どういふ事なんだろうかと思った、その瞬間。

「誰かいなかー！」

そんな声が聞こえたのだ。

その声を聞いた途端に遊里は走り出していた。

さすがにこんな所にずっと1人でいたいと思わなかったからだ。

「あつ」

「ああつ！」

『君は……！』

走つた先にいたのはよく見知つた人物、九十九遊馬。

そしてこの世界から去つていつた筈のアストラルがそこにいたのだ。

一先ず、状況確認をするべく話し合う3人。

と、言つたもののやはりと言うべきかさっぱり分からないという。

遊馬も遊里と同じく自宅で寝ていたらここにいたとの事。

アストラルは元の世界に戻つたらここにいたらしい。

結局の所、原因はさっぱり分からないのが現実だ。

少し話ただけで、なるようになるしかないという結論に達した3人は地面に座りこ

んで、色々と話始めた。

デュエルの事やこれからについてと色々とだ。

アストラルと遊里は特に色々な話をした。

遊里にはアストラルの事を見えていなかったから、話してみたいとは思つていたのだ。

アストラルとしても遊里と話してみたい事は沢山あつたようだ。

しかし時間が経てば話題も少なくなる。

体感で2、3時間程、話していたような気もするが戻れる気配もない。

遊馬と話してみれば、やはり彼もまたこの世界にいる事に対して現実感がもてないらしい。

「ぶつちやけると夢の中って事か」

「そうなのかあ」

ぶつちやけた結論であった。

しかし夢ならばいつかは覚めるものである。

暫くすれば覚めるだろうと結論付ける。

だが目が覚めるまで非常に暇である。

しかし遊馬と遊里はデュエリスト。

ならばやる事は1つ。

しかし遊里には思っていた事がある。

青山遊里は普段は本気を出さないようにしている。

あまり本気を出しすぎると相手の心を折るかねないからだ。

しかし遊里の本心としては思いつきりやりたいと思っているのだ。

そういう意味では何度も心を折る事なく挑戦しにやってくる神代凌牙という存在は

貴重なのである。

では九十九遊馬という存在はどうか。

こちらは遊里と違いいつだって本気である。

手加減するような失礼な真似は出来る筈もない。

だがある方面から見れば、彼もまた普段のデュエルには本気を出していないのだ。

それは彼、というよりはアストラルの持つナンバーズのせいである。

普段、一般人との相手に遊馬はナンバーズを使う事はない為だ。

だから、だ。

寝る前に考えていた事。

そしてあの時、聞こえてきたような言葉を思い出したのは。

『最後の願いを叶えに行きましょう』

そうだ。

まだ青山遊里は、遊馬と本当の意味で本気のデュエルをしていない。

だから、だ。

アストラルが去ってしまった今、それは出来ないと思っていたのだが。

「なあ、遊馬。デュエルをしようぜ」

「おっ！いいぜ！」

「だけど一つ条件がある」

「条件？」

遊里の言葉にハテナマークを頭上に出す遊馬。

デュエルを挑まれたら、何かない時以外は必ずデュエルを受ける遊里がわざわざ条件を出すとは。

「アストラル」

『むっ、どうした遊里？』

「俺は遊馬とアストラル。2人と楽しくデュエルをしたい」

「えっ、それは」

そんな遊里の言葉に、すぐに察した遊馬。

アストラルもまたその言葉に意味を理解していた。

『それはつまりナンバーズを使い、という事か』

「ああ。あつ、今更、躊躇う事はないぞ。凌牙の奴は普通に使ってきたし」

「じゃ、シャークの奴……」

実力的にはともかく一般人に分類される遊里相手にナンバーズを使っているとは思っていないかった遊馬。

だがアストラルは逆に冷静にそれを聞いていた。

元々実力の高さは理解していたし、バリアン世界に行く途中に出会ったギラグやバクターからも話を聞いていたのだ。

バリアン七皇を一方的に倒せる程の実力を持ったデュエリスト。

アストラルから見ても間違いなく青山遊里は一番強いと言っていいレベルの決闘者だ。

「だから気にするなよ遊馬。俺はあの時出来なかった、2人とのデュエルをやりたかった」

「あの時……」

ギラグによって洗脳されてしまった遊里との不本意なデュエル。

あの時は遊馬が勝利したが、あれはあくまで洗脳された遊里とのデュエル。本当の意味での遊里とのデュエルはした事がない。

そしてきつとこれが最後のチャンスだろう。

アストラルは元の世界に戻ったのだから。

偶然か奇跡か。

夢だと思われる場所で再会し、出会ったのだ。

ならば。

「アストラル」

『私は構わない。青山遊里。きっと我々が出会ってきた中で彼が最強に近いデュエリストなのだから』

「なら行こうぜアストラル！」

『ああ、遊馬！』

「遊里、勝負だ！」

「全力で楽しいデュエルにしようぜ！」

遊馬と遊里がその手にデュエルディスクを装着する。

目にはDゲイザー。

遊馬とアストラル、そして遊里の最後かもしれないデュエル。

「デュエルディスク、セット！」

「Dゲイザー、装着！」

2人がそれぞれ装備すると、ARリンクが完了する。

遊里と遊馬の視線が交差する。

これは世界の命運をかけたとか誰かの未来を決めるとかそんなものではない。

単純にデュエルが好きなの同士楽しいデュエル。

それが今、始まるのだ。

『デュエル!!』

6 VS 九十九遊馬&アストラル

「まずはオレのターン！ドロー!!」

先行を取ったのは遊馬。

力強くカードをデッキからドローする。

手札は6枚。しっかりと全てのカードを確認する。

相手はあの青山遊里。

シャークやカイトですら勝てなかったデュエリストなのだ。

慎重に行動しなければならないだろう。

『遊馬、まずは』

「ああ、こいつを使おう」

アストラルの言葉に遊馬もまた頷く。

示されたカードは遊馬もまた使おうと考えていたカードなのだから。

「オレは《手札抹殺》を発動！」

「いきなりか！」

お互いの全ての手札を入れ替える強力なカード。

遊里としても遊馬が1ターン目からそれを使ってくるとは思っていいいなかった。お互いの手札は5枚。全てのカードを墓地に送り込む。

遊里の墓地には《N・グラン・モール》や《サイクロン》、《リビングデットの呼び声》などが落ちて行く。

逆に遊馬の墓地に《タスケナイト》、《ガガガガール》が落ちて行くのを確認した。

(《タスケナイト》か。他に落ちたのは《ダメージ・メイジ》や《投下交換》、《オーバーレイ・イーター》か。序盤ではあまり役に立たないカード達だな)

墓地に落ちた遊馬のカードを見て、そう思う遊里。
なるほど。

《タスケナイト》を墓地に送りつつ、あの手札を入れ替えるのは悪くない。

『遊里の墓地に落ちたカード、あれは』

「ああ、E・HEROだ」

墓地に送られた《E・HERO オーシャン》と《融合》などを見ながらそう呟く。

遊里が融合モンスターを使う時によく見たカード達だ。

E・HEROと特定の属性を持っていればどのモンスターとでも融合するモンスター達。
達。

そして仮面をかぶる事によりたった1枚で変身召喚もとい融合召喚するM・HERO

O。

どれもが強力なモンスター達である。

「だけど恐れる訳にはいかないぜ！」

『その通りだ！遊馬！』

「おう《カードカー・D》を召喚するぜ！」

遊馬のフィールド上に召喚されたのは平べったいカード上の車。

それが激しい音を鳴らして登場したのだ。

そんな車を見て遊里の表情が変わる。

OCG環境においてもドロウ効果という点では、確かに非常に強力な効果を持つ1枚

だが、デメリットが非常に重い存在である。

しかしそれはあくまでOCGでの話。

こちらの世界ではそうでもないのだ。

「このカードが召喚したターン、《カードカー・D》をリリースしてデッキからカードを2枚ドロウできる！」

「ただし、このターンは特殊召喚する事ができない、だったか」

『その通りだ！《カードカー・D》の効果発動！リリースしてカードを2枚ドロウする！』

激しい音を鳴らしながら発車する《カードカー・D》。

遊馬のデッキの元まで走ると、後ろから伸びる2つのロープがカードを2枚掴み引つ張っていく。

デッキの上から2枚のカードがロープに引つ張り取られると、その2枚のカードは遊馬の手札へと向かっていく。

しかしその代償に全力で走った車は墓地へと落ちていつてしまった。

「オレはカードを1枚セットしてターンエンド！」

これこそがOCGよりも強力な効果。

エンドフェイズに強制的に移行するOCGとは違い、ドロートした後も行動可能なのだ。

「なら俺のターン・ドロート！」

手札抹殺により入れ替えられた手札を見ながら、どうするべきか考える。

遊馬のフィールド上にはカードが1枚セットされているだけでモンスターはいない。

普通に考えれば一気に攻めるチャンスだ。

だが遊馬とアストラルが何も考えずに場を開けっ放しにしたまま、遊馬のターンに回すとは考えにくかった。

(間違いないセットカードは攻撃を防ぐカードか、手札に《ガガガードナー》などがある筈だ)

あれならば戦闘を経由する攻撃ならば防ぐ事が可能だ。

そしてそれを突破した上で遊馬のライフを0にする手段は遊里にはない。

それに何よりも、1つ大きな問題がある。

(このデッキって間違いなく『アレ』だよなあ……)

手札や墓地のカードを見ながらぼやく。

普段使わないものや使えないカード達があるのだ。

だがこのカード達を見ればこのデッキがどういうデッキなのかはすぐに理解できた。

1度だけ作った事はある。しかし絶対に回せない自信があつたし、ネタという領域すら突破できないようなデッキだったのだから。

とはいえ、運がいい事になんとかかなりそうなカードはある。

「まずはこいつだ。自分フィールド上にモンスターがいない時、発動できるカード!《コンバート・コンタクト》!手札とデッキからそれぞれ1枚ずつネオスペーションと名のつくモンスターを墓地に送る事でカードを2枚ドロウする!」

『手札交換用のカードか』

「俺は手札の《N・フレア・スカラベ》とデッキの《N・エア・ハミングバード》を墓地に送って2枚ドロウする」

遊里の手札とデッキからカードが1枚ずつ墓地に送られると、新しいカードが2枚手

札へと補充される。

「自分フィールド上にモンスターがいない時、限定なんて使いにくいんじゃないかな」

『いや、そうとも言えない』

「どういう事だ？」

遊馬としては手札1枚をコストにして発動する手札交換用のカードを見ているから、更に制限が多い《コンバート・コンタクト》は使いにくいように見えたのだ。

だがアストラルの見解としては違った。

確かに遊馬の言うように制限は多いが、見返りもある。

『遊馬は墓地にモンスターを増やし、それを使って展開してくる傾向が多い。つまり手札だけではなくデッキのカードを墓地に送れるあのカードは非常に有能なカードなのだろう』

「そ、そうか！」

なるほど、と遊馬は頷いた。

確かに墓地を使って融合したり、墓地のモンスターを蘇生したり色々してくるのが遊里だ。

手札を2枚ドロしつつ、墓地にも2枚モンスターを送れるあのカードは確かに見返りも大きいのだろう。

「そして俺は《カードガンナー》を召喚！」

戦車のような下半身を持つた機械族モンスターだ。

立派な下半身とは違い、上半身は貧弱そうに見えるあまり強いといったイメージはない。

実際イメージ通り、攻撃力はたった400と低いレベルだ。

しかしそうだからと言って遊馬もアストラルも油断する様子はない。

攻撃力400のモンスターをわざわざ出してきたのだ。

何かあるに違いないと思うのは当然の事であった。

「《カードガンナー》の効果発動！デッキの上から3枚まで墓地に送って発動する」

《カードガンナー》のサーチアイが光出すと、大砲のような右手を遊里のデッキに向ける。

発射された光弾がデッキに直撃すると、デッキの上から3枚のカードが墓地に送られていく。

(墓地に落ちたのはブラックパンサーにダンディ、アライブか。悪くない落ち方だ)

効果で墓地に送られたカードを見ながら、そう思う遊里。

モンスターが二体も落ちれば十分である。

「墓地に送られた《ダンディ・ライオン》の効果発動！このカードが墓地に送られた時、

自分フィールド上に綿毛トークンを2体、特殊召喚する！」

フィールド上にたんぼの綿毛のようなモンスターが2体現れる。

綿毛トークンである。

「そして墓地に送った枚数の数だけ攻撃力を500アップする！」

『これで《カードガンナー》の攻撃力は1900……！』

下級モンスターの攻撃力としては十分な数字だ。

「バトル！ 《カードガンナー》で遊馬にダイレクトアタック！」

この攻撃が直撃すれば、遊馬のライフは大きく減る事になるだろう。

だが遊馬が思っていた通り、なんの対策もなく遊馬とアストラルが場を空にする訳が

なかったのだ。

『遊馬！』

「おう！ この瞬間、俺は手札の《ガガガガーディアン》の効果発動！ ダイレクトアタックを受ける時、こいつを表側守備表示で特殊召喚できる！」

「だろうな。攻撃中断。バトルフェイズを終了し、カードを1枚セットしてターンエンド。そしてこの時、《カードガンナー》の攻撃力は元に戻る」

攻撃態勢に移っていた《カードガンナー》の目の前に現れたのはガガガの守護者。

それが遊馬を守るように立ちふさがったのだ。

その守備力は2000もあり、1900の攻撃では届く事はない。なのでバトルを終了し、カードをセットしてターンを終える。

しかし気になるのはやはり攻撃力400になってしまった《カードガンナー》か。

遊馬もまた遊里が攻撃力を低いモンスターを対策なしでそのままにしておくとは思えなかった。

「よし、オレのターン……オレは《ゴゴゴゴースト》を召喚！」

ゴゴゴの名を持つ幽霊戦士が現れる。

攻撃力1900と先程の《カードガンナー》と同じく下級モンスターとしては非常に高い数値だ。

このまま攻撃すれば十分なダメージを与えられるだろう。

だがそれで満足する遊馬ではない。

「行くぜ、アストラル！」

『ああ！見せてやろう、彼に！』

「オレはレベル4の《ガガガガーディアン》と《ゴゴゴゴースト》でオーバーレイ！」

遊馬の《ガガガガーディアン》と《ゴゴゴゴースト》が光となり、1つの姿へと渦巻いていく。

それはやがて1つの大きな光へと形を変えて行く。

「2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築、エクシーズ召喚!!」

その大きな光はやがて巨大な爆発を起こす。

そしてその渦から一対の剣のような白き塔が現れる。

あれこそが始まりの希望。

九十九遊馬とアストラルの希望の象徴。

「オレの……オレ達の戦いはここから始まる！白き翼に望みを託せ！現れるNO. 39
!!光の使者 希望皇ホープ!!」

純白の鎧を身に纏った騎士皇。

《NO. 39 希望皇ホープ》。

九十九遊馬がもつとも一緒に長く戦ってきた希望の戦士。

それが今ここに降臨したのだ。

「かっこいいな」

「へへ、そうだろ」

「ああ」

その希望の翼は本当にかっこいいな、とかつて自分が使っていた時の事を思い出しながら遊里は小さく呟く。

だが今はその希望は敵なのだ。

「ホープ、攻撃だ！オレはホープで《カードガンナー》を攻撃！」

白翼を広げ、その剣を構えて機械兵へと斬りかかる皇。

機械兵も必死に後退しながら、その両手の砲で攻撃をしかけるが先程とは違い圧倒的に攻撃力が下がった状態だ。

攻撃力2500のホープに勝てる筈もない。

砲撃を軽やかに回避すると、その剣を一閃する。

「ホープ剣！スラッシュュ!!」

この一撃が通れば、遊里には2100のダメージが通る。

だが遊馬達がそうだったように遊里もまたしつかりと対策を立てていたのだ。

「畏発動！《ガード・ブロック》!!」

希望剣が《カードガンナー》を容赦なく切り裂いていく。

たちまち切り裂かれた影響で火花を散らしながら爆散していく。

その爆発は遊里の身を焼き、ライフを削る一撃となる筈だったが、遊里の周りには壁のような膜が出来上がっており爆発から身を守っているではないか。

「この攻撃の戦闘ダメージを0に俺はカードを1枚ドロウする！」

『凌がれたか』

遊里を守った膜は爆発が収まると同時にデッキの頂上に集まり、カードを1枚、遊里

の手元に運んで行く。

だがそれだけではない。

「更に《カードガンナー》の効果発動！こいつは破壊された時、デツキからカードを1枚ドローする！」

更に破壊された《カードガンナー》の残骸からカードが1枚飛び出して遊里の手札へと収まる。

なるほど、とアストラルは頷く。

デツキを墓地に送りつつ、カードをドローできるカードは間違いなく遊里の戦術とは相性がいいのだろう。

これで遊里の手札は6枚へと戻る。

しかしフィールドには2体の綿毛トークンが残っている。

先程のターンはアドバンス召喚のリリースには使えなかったが、次のターンには使用可能になる。

他にも単純に壁としての使用も可能だろう。

二重の意味で厄介な綿毛である。

「オレはこれでターンエンドだ」

「俺のターン！」

これで手札は7枚。

動くには十分すぎるカードの枚数だ。

そして遊里はドローしたカードを見てこれは、と気づく。

間違はなくアレを出せと言っているようなものだ。

手札もフィールドもそれを出させる準備は出来ている。

しかしこれを使ってもいいものかと思ってしまう。

だがこれはある意味ちようどいいのではないか。

観客は誰もいない夢の世界だと思われる場所。

ここならばこれを使っても何も言われる心配はない。

そう決めると遊里は決意した。

「遊馬、アストラル」

「どうしたんだ？」

『遊里？』

「お前のナンバーズは凄かった。だから俺もお前達にとっておきを見せてやる」

「とっておき！」

遊里の言葉に目を輝かせる遊馬。

あの遊里がわざわざとっておき、とまで言うカードだ。

間違いないと凄いに違いない。

アストラルも興味深そうに遊里を見る。早く見せろと催促しているようにも見えた。

「なら行くぜ！俺はチューナーモンスター、《デブリ・ドラゴン》を召喚！」

「チューナー？」

召喚されたのは小さな竜。

子供のようなヤンチャそうな雰囲気を持っている。

しかし一つ気になる事が遊馬達にはあった。

遊里の言うチューナーとは一体なんなのか。

だがその答えはすぐに示される事になる。

「《デブリ・ドラゴン》の効果発動！こいつが召喚された時、自分の墓地から攻撃力500以下のモンスターを1体、効果が無効にして攻撃表示で特殊召喚する！蘇れ、《カードガンナー》！」

岩屑の竜が小さなゲートをその翼で作り出すと、そのゲートを通って攻撃力400の機械兵が墓地から蘇る。

しかし攻撃力400で攻撃表示な上に効果は無効化。

更に《デブリ・ドラゴン》はレベル4に対して、《カードガンナー》はレベル3。

レベルがあわない為、エクシーズ召喚は不可能。

一体どうするつもりなのだろうか。

「まずは《カードガンナー》の効果発動！デッキからカードを3枚墓地に送る！」

『馬鹿な！効果は無効になっていてる筈だ!?!』

アストラルが驚きの声を上げる。

それは遊里自身が言った筈なのだ。

効果が無効にして特殊召喚する、と。

ならば《カードガンナー》の効果は使えないのではないか。

だが遊里のデッキから3枚のカードが墓地に送られていく。

これはどういう事なのか。それに答えたのは遊里であった。

「《カードガンナー》のデッキのカードを墓地に送るのは効果処理ではなくコストな
さ。だから効果が無効になっていても墓地に送る事は出来る」

効果モンスターの効果発動は他の魔法・罫・モンスター効果で無効になっていても発
動ができる。

それを利用して、効果が無効化されていても墓地にデッキの上からカードを3枚送っ
たのだ。

だが送られたカードを見て遊里は顔を顰める。

送られたのは《ヒーローアライブ》、《オーオーバーソウル》、《E・HERO フォレ

ストマン』。

出来れば手札に欲しかったカード達だからだ。

とは言え、最初に使った時の落ち方が非常に優秀すぎただけな話なのだろうが。

「さて、と。見てな、遊馬、アストラル」

「？」

「お前達が見た事のないだろうこの召喚方法を！」

『何っ!?!』

「俺はレベル3の《カードガンナー》とレベル1の綿毛トークンをレベル4の《デブリ・ドラゴン》でチューニング！」

空へと高く舞い上がっていく《カードガンナー》と綿毛トークン。

それに追従するように飛翔していく《デブリ・ドラゴン》が光へと変わり、星を生み出し、リングを作り出して行く。

「さ、これは……!?!」

『一体何が起こっているというのだ!?!』

遊馬とアストラルの驚きの声が聞こえてくる。

そう。これはこの世界にはない召喚方法。

2人が見た事がある筈がない。

リングの中を通る2体のモンスターもまた《デブリ・ドラゴン》と同じように星を生み出していく。

これで生み出された星の数は8。

そこでアストラルが気づく。生み出された星の数は3体のモンスターのレベルの合計数と同じだと。

つまりこれは。

「集いし願いが新たに輝く星となる。光さす道となれ！」

生み出された星達が1つに集まっていき、輝きをます。

そこから生み出される大きな光から一体のドラゴンが飛び出してきた。

「シンクロ召喚！飛翔せよ！《スターダスト・ドラゴン》!!」

白銀の翼で羽ばたき、天空を舞い飛ぶ星屑の竜。

本来ならば、この世界に存在する事がない存在。

それが今、飛翔したのだ。

「す、すげえ……！」

『シンクロ召喚……』

「ああ。重ねあう力ではなく、繋ぎあう力。これがシンクロ召喚」

普段使われているエクシーズ召喚とはまるで違う召喚方法。

チューナーと呼ばれるモンスターとそれ以外のモンスターのレベルをあわせて繰り出される繋ぎあう力。

「チューナーモンスターとそれ以外のモンスターの合計レベルを足した数字と同じモンスターをエクストラデッキが呼び出す方法だ」

『なるほど。そのドラゴンはレベル8。《デブリ・ドラゴン》、《カードガンナー》、綿毛トークンのレベルを足せば確かに8になる』

「エクシーズは同じレベルのモンスター同士だけど、シンクロは足し算なのか」

まさかの算数に遊馬が若干頭を抱える。あまり勉強は得意ではないのだ。だがそれ以上に天空を舞う竜を見て、その輝きに遊馬は目を輝かせる。

一言で心境を表すならばカッコいいだ。

空を舞っていた《スターダスト・ドラゴン》が遊里の傍に舞い降りる。

その美しい姿に驚いていたものの、アストラルは再び冷静な目を向ける。

『確かに驚いたが、攻撃力は2500。ホープと同じだ』

「ああ。そしてナンバーズはナンバーズでしか破壊できないんだったな」

ナンバーズはナンバーズでしか破壊できない。

これがホープをはじめとしたナンバーズモンスター、全てが持っている特性である。

同じ攻撃力同士であると言っても、ナンバーズではない《スターダスト・ドラゴン》で

は《No. 39 希望皇ホープ》に勝つ事は出来ない。

「だけどやりようはあるさ。俺は手札の《チューニング・サポーター》を墓地に送って魔法カード《ワン・フォー・ワン》を発動！ デッキからレベル1モンスターを特殊召喚する！」

遊里の手札からまるでフライパンをかぶったようなモンスターが墓地へと飛び込んで行く。

するとーという輝きが道を開き、デッキからレベル1のモンスターが呼び出される。

「俺が呼び出すのはレベル1、チューナーモンスター《アンノウン・シンクロン》！」

呼び出されたのは丸っこい機械。

レベル1の下級モンスターであり、効果自体も意味をなしていないが故に脅威ではない。

だが、先程の光景を思い出せば自ずと答えは出ていた。

『チューナーモンスター……まさかつ！』

「またシンクロ召喚って奴か！」

「その通りだ！俺はレベル1の綿毛トークンをレベル1の《アンノウン・シンクロン》でチューニング！」

再び天空に舞う綿毛トークンと《アンノウン・シンクロン》。

光は星を生み出し、再び螺旋のリングを生み出し、綿毛トークンを包み込む。

合計レベルは2。

「集いし願いが新たな速度の地平へ誘う。光さす道となれ！」

たった2つの星。

だがそこから生み出される輝きは先程と比べても見劣りしない力強さを感じ取れる。

「シンクロ召喚！希望の力、シンクロチューナー、《フォーミュラ・シンクロン》！」

鋭角なシルエットはレーシングカーを思わせるような姿だ。

しかしアストラルはある事に気づいた。

シンクロチューナー。

それはつまり。

『そのモンスターはシンクロモンスターでありながら、新たなシンクロ召喚を可能にするチューナーなのか!？』

「なんだって！」

「さすがアストラル、その通りだ！まずは《フォーミュラ・シンクロン》がシンクロ召喚に成功した時、俺はデッキからカードを1枚ドロウする！」

光と共にデッキからカードが1枚、遊里の下へとやってくる。

これで準備は整った。

「さあ、行くぜ！」

遊里の声に反応して《スターダスト・ドラゴン》が咆哮を上げながら空に再び飛翔する。

《フォーミュラ・シンクロン》も爆音を鳴らしながら、星屑の竜に追従する。

さあ、これがシンクロ召喚を超えた更なる力。

「レベル8、シンクロモンスター《スターダスト・ドラゴン》にレベル2、シンクロチューナー《フォーミュラ・シンクロン》をチューニング！」

レーシングカーが新たな光と星を生み出し、星屑の竜を包み込んで行く。

それは先程と同じような光景。

だがアストラルは見た。

遊里の体が光り輝き、大きな風を纏っている所を。

「集いし夢の結晶が新たな進化の扉を開く。光さす道となれ！アクセル、シンクロオオオオ!!」

『遊里が……消えただと?!』

大きな突風と閃光と共に遊里の姿がこの場から消え去る。

いや、それはアストラルの見間違えだったのかもしれない。

気がつけば、変わらぬ場所に立っているのだから。

しかし遊馬にはまるでそれは見えていなかった。

その視線は空に向いたままである。

空に漂う雲を切り裂くように、閃光の輝きと共に一体の竜が落下するように戦場に舞い降りた。

「生来せよ、《シューティング・スター・ドラゴン》!!」

流星の如く現れた風の竜。

その力強さと美しさはカイトの《銀河眼の光子竜》を思わせる。

いや、それ以上かもしれない。

「すげえ……すげえよ、遊里!」

この輝きと美しさに目が離せない遊馬。

それ程までに凄い衝撃だったという事か。

同時に遊里もまた圧倒的高揚感に襲われていた。

この世界にやってきて、デュエルディスクで沢山のモンスター達を見つけた。

だが慣れてきた筈なのに、《シューティング・スター・ドラゴン》が舞い降りた時の凄

まじさに目が離せないでいた。

(これが……不動遊星が見ていた光景……)

シンクロと共に駆け抜けた決闘疾走者、不動遊星のエースモンスター。それを後ろから見上げる光景を見て、やはり高揚感が増してくる。

だが今はデュエル中。

美しさに感動している場合ではなかった。

「行くぞ遊馬！ 《シユーン・テイニング・スター・ドラゴン》の効果発動！」

「！」

「自分のデツキトップから5枚めくり、そこにチューナーモンスターがいた場合、その枚数だけ《シユーン・テイニング・スター・ドラゴン》は攻撃する権利を得る！」

「連続攻撃！」

遊馬が驚きの声を上げるが、アストラルは別の意味で驚愕していた。

その説明で効果の本質を理解した為だ。

『もし、チューナーモンスターが1枚もなかった場合はどうなる？』

「え？」

「さすがアストラル。気づいたか。もし1枚もなかった場合は攻撃する事が出来ない。

1枚もないんだからな。因みにこの効果は強制効果じゃなくて任意効果だ」

「な！」

そこまで聞けば遊馬もようやく理解した。

これは明らかに博打なのだ。

めくれる5枚の中にチューナーモンスターがある保障は何処にもない。

確かに連続攻撃は魅力的だが、もし0枚だった場合、攻撃すら出来なくなるのはあまりにもデメリットが大きいように感じ取れた。

「だけどやるぜ！ やれつてこいつが叫んでいるように思えるからな！」

勿論、遊里にそんな声は聞こえやしない。

だけどOCGとは違う。

今、目の前でその姿を見せ咆哮する流星竜を見ていると出来るような気がするのだ。

だから効果を発動したのだ。

遊里の記憶が正しければ、このデッキに入っているチューナーモンスターの数は圧倒的に少ない。

まともにも効果を使ってもチューナーをめくれる可能性は低いだろう。

だが、なんとなく。

なんとなくだ。遊里にはめくれるような気がしたのだ。

「まず1枚目、魔法カード《融合》。2枚目、チューナーモンスター《ジャンク・シンクロン》！ 3枚目、魔法カード《貪欲な壺》。4枚目、チューナーモンスター《クイック・シンクロン》！」

これで2枚のチューナーをめくった事になる。
だがそれでは届かない。

月の盾を持った希望皇には届かない。
だから最後の1枚。

「5枚目……チューナーモンスター、《エフェクト・ヴェーラー》！」

「さ、3回連続攻撃！」

「行くぜ！《シューティング・スター・ドラゴン》の攻撃！スターダスト・ミラーージュ！！」
上空へと飛翔すると、流星竜の姿が一瞬ぶれたと思つた瞬間、なんと3体が増えてい
る。

ミラーージュ。

その名の通り、幻影だ。

だがその一体一体が、遊馬とアストラルを倒す剣なのだ。

「まず第一打あ！」

「くっ、ホープの効果発動！オーバーレイユニットを1つ使い、相手の攻撃を無効にする
！ムーンバリア！」

幻影流星がホープへと向かって突撃していく。

それを迎え撃つのは月の盾。

激突した瞬間、凄まじい衝撃が遊里と遊馬に襲い掛かるが先に消滅したのは幻影。

月の盾は主を見事に守り抜いたのである。

ただしこの一撃はであるが。

「ならば第二打だ!!」

「もう一度だホープ!ムーンバリア!!」

再び激突。

幻影の盾がぶつかりあうと、盾は確実に攻撃を防いだが、その身に輝が入ってしまう。

オーバーレイユニットがない以上、もはや防ぐ手立てはない。

「そして第三打あ!シユーツーティング・ミラージユ!!」

「ぐっ、うわあああああ!」

盾を失ったホープにこの攻撃を防御する術はない。

三度目の正直とばかりに、幻影の一撃はホープを撃ち貫いていた。

とは言え、ナンバーズはナンバーズでしか破壊できない。

破壊されなかったホープ、とは言えダメージは相当なものであり、ホープの鎧には多くの輝が入り損傷している部分がある。

遊馬のライフも3200へと減っている。

先制の一撃は遊里が取ったのだ。

「……俺はカードを1枚セットしてエンド」

何か思案するような表情を見せた後、遊里はカードをセットしてエンド宣言する。

《シューティング・スター・ドラゴン》も気がつけば遊里の傍に控えるように佇んでいる。

「くっそー！先制されたぜー！」

『ああ。シンクロ召喚、凄まじい召喚方法だ』

エクシーズ召喚とはまったく異なる方法で呼び出された星の竜。

そこから放たれる力は間違いなくナンバーズに匹敵する。

遊里がどうやってあのカードを手に入れたのか。

何処であの召喚方法を学んだのか気になる所ではあるが、今は目の前のデュエルだな、とアストラルは気持ちを入れ替える。

目の前にいるこのドラゴンをどうやって突破するべきか。

まずはそこを考えなければならなかった。

「今の内に説明しておくぜ。《シューティング・スター・ドラゴン》は1ターンに1度、フィールドのカードを破壊する効果を無効にし、破壊する効果がある」

遊里の説明にあのドラゴンの突破方法を考えていたアストラルは顔をしかめる。

つまり魔法や罠、モンスター効果での破壊は不可能という事だ。

しかしそれだけではない。

「そして攻撃された時、このシューティング・スターを除外する事で攻撃を無効にする事が出来る。更にエンドフェイズに除外したこいつを場に特殊召喚する」

それは単純に攻撃力を上回っても倒すのは困難という事か。

やはりあのドラゴンを突破するのは容易ではない。

そして遊馬の手札にどうにかできるカードは残念ながら存在しない。

つまりこのドローにかかっている。

ドローしたカードによっては敗北への一手へと突き進むだろう。

だが九十九遊馬は恐れない。

「かつとビングだオレー・ドロオオオオ！」

迷う事なくカードをドローする遊馬。

引いたカードは。

「来たぜ……遊里！」

「来たか、遊馬！」

「《RUM―ヌメロン・フォース》を発動！このカードはモンスターエクシーズをリンク

アップさせる！」

「そのカードか！」

掲げられた1枚のカード。

ランクアップマジック。エクシーズモンスターを更なる高みに進化へ誘う為の切り札。

「ランク4の希望皇ホープでオーバーレイ！1体のモンスターでオーバーレイネットワークを再構築！カオスエクシーズズチエンジ!!」

その力の恩恵を受けたホープが新たな光を纏っていく。

ホープがボロボロになった鎧から新たな鎧を身に纏っていく。

「現れる、CNo. 39！ 希望に輝く魂よ！ 森羅万象を網羅し、未来を導く力となれ！希望皇ホープレイ・ヴィクトリー！」

未来に輝く勝利を掴む為に進化した新たなホープ。

しかしそれでもその力では《シューティング・スター・ドラゴン》を超える事は出来ない。

「ヌメロン・フォースの効果はそれだけじゃない！こいつが発動された時、フィールド上で表側になっているカードの効果は無効となる！」

「くっ！」

ヌメロン・フォースの輝きを浴びた《シューティング・スター・ドラゴン》が苦痛に悶える。

本来ならば存在する、相手の攻撃を防ぐ異次元へと飛び出す力と相手の破壊効果を無効にする力が全て失われてしまったのだ。

「更にオレは《ズバナイト》を召喚。行くぜ遊里！ホープレイ・ヴィクトリーで《シユールティング・スター・ドラゴン》を攻撃！」

新たに呼び出されたギザギザになった剣を構えた戦士が現れる。

そして勝利をもたらす希望の皇が流星の竜に向き直る。

しかし攻撃力は2800と3300。ホープレイ・ヴィクトリーに勝ち目はないが。

「そしてこの瞬間、ホープレイ・ヴィクトリーのモンスター効果が発動！オーバーレイユニットを1つ使い、このモンスターがバトルする時、相手モンスターの攻撃力を自分に加える！ビクトリー・チャージ!!」

「攻撃力6100……!!」

その身に宿った力が発動する。

ホープレイ・ヴィクトリーに新たな腕が現れると、元々あった腕を含めて全ての腕が剣を装備する。

4振りとなった剣1つ1つに《シユールティング・スター・ドラゴン》から奪った力が宿っていく。

『そしてホープレイ・ヴィクトリーが攻撃する時、相手は魔法や罠を発動する事はできな

いー!」

「行け、ホープレイ・ヴィクトリー! 《シューティング・スター・ドラゴン》を攻撃!」
効果が失われた以上、異次元へ逃げる事も出来ない《シューティング・スター・ドラゴン》が必死に天空へ逃れようとするがもう遅い。

既に希望皇の攻撃は直前に迫っているのだから。

「ホープ剣・ダブルビクトリー! スラッシュユ!!」

4 振りの剣でVの字に切り裂かれる流星の竜。

瞬く間に切り裂かれた竜は天空から地にと落ちていった。

「ぐっ……!」

遊里のライフポイントが一気に2800も減り、1200になる。

そして遊馬の場にいる《ズババナイト》の攻撃力は1600、これが通れば遊馬の勝ちである。

「行け、《ズババナイト》の攻撃!」

「終わらない! 畏れ発動! 《くず鉄のかかし》! 相手の攻撃を無効にする!」

攻撃しようとした《ズババナイト》の目の前にくず鉄の寄せ集めで形作られたかかしが現れる。

剣を振りかぶっていた剣士はそれに気づくも勢いをつけていた為、止まる事が出来ず

その顔面をかかしにぶつけてしまった。

非常に痛々しい音が響き渡ると、剣士が遊馬の元に弾き飛ばされていく。

「防がれた……！」

『さすがにあれで決められるとは思っていなかった』

「それもそうだな。オレはこれでターンエンドだ。そしてホーププレイ・ヴィクトリーの攻撃力は元に戻る」

4本腕になったホーププレイ・ヴィクトリーが元の姿に戻る。

だがナンバーズ特有の破壊耐性を持った攻撃力2800のモンスターだ。簡単に突破はできないだろう。

「俺のターン、ドロロー……よし、俺は《E・HEROエアーマン》を召喚する！」

風を纏い、背中にプロペラが装備された翼を持った戦士が現れる。

HEROデッキに必須と言っているHERO、それがエアーマンだ。

「エアーマンの効果発動！ 召喚された時、デッキからHEROと名のつくモンスターを1枚手札に加える。俺が加えるのは《E・HERO プリズマー》！」

大きな風がプロペラから発せられると、その風がデッキからカードを1枚吹き飛ばす。

吹き飛ばされたカードは遊里の手にゆっくりと収まる。

「そして魔法カード《ミラクル・フュージョン》を発動！墓地のオーシャンとフォレストマンを融合させる！」

『墓地融合か！』

墓地から2体のモンスター。

海の戦士と森の戦士が現れる。

「海と森が交わる時、新たな星が生み出される！融合召喚！」

オーシャンとフォレストマンが手を組み合うと、1つの光に交じり合っていく。

「来い！プラネットシリーズ！《E・HERO ジ・アース》!!」

「星……地球?!」

海と森が交じり合い生み出した存在。

一点の曇りなき体。肩と額には青く輝く結晶が、胸の中央には赤い結晶が埋め込まれている。

これが星であり、地球そのものの存在である。

とある世界、誰よりもデュエルを愛する男、遊城十代のフェイバリットカード。

『プラネットシリーズ……星を司る存在……!』

「だけどそれじゃあ……」

攻撃力は2500と確かに高い数値ではあるものの、2800のホープレイ・ヴィク

トリーには届かない。

「ああ、そうだな。だからこそこいつだ。ジ・アースの効果を発動！」

傍らに立つエアーマンが大きな竜巻を起こすと、エアーマンが竜巻の中にへと消えていく。

まるで己の存在を竜巻にしたようだ。

いや、竜巻になったのだろう。そしてその竜巻はジ・アースの周りに集まると両肩の青の結晶へと吸い込まれていく。

するとどうだろうか。

純白の姿は気がつけば赤く灼熱化しているではないか。

まるで生まれたばかりの星が大量のマグマを噴出しているが如くだ。

「自分フィールド上のE・HEROをリリースする事で、リリースしたモンスターの攻撃力をジ・アースに与える！地球灼熱——ジ・アース マグマ！」

「す、すげえ炎だ……！」

実体を持たないソリッドヴィジョンではあるが、ジ・アースから放たれる炎は凄まじい熱があると錯覚させるレベルだ。

そして効果により強化されたジ・アースの攻撃力は4300と圧倒的な数字だ。

「行くぜ！ジ・アースの攻撃！この時、墓地にある《ブレイクスルー・スキル》の効果発

動！」

「墓地からトラップ!？」

「このカードを除外して、相手モンスター1体の効果を無効化する！」

突如、次元をやぶって現れたモンスターの腕がホープレイ・ヴィクトリーの胸を貫く。実体がある訳ではないその腕はホープレイ・ヴィクトリーに傷をつける事はなかったが、その身に宿る破壊耐性効果が失われてしまった。

「くそっ、これじゃあー！」

ジ・アースの両手から炎、いやマグマの剣が現れる。

灼熱化したジ・アースが一気にホープレイ・ヴィクトリーの前に飛び込んむ。

ホープレイ・ヴィクトリーも負けじと両手の剣で対抗しようとするが無駄な事。

ただの剣がマグマエネルギーに勝てる筈もない。

「地球灼熱斬——アース・マグナ・スラッシュユ!!」

マグマの剣を一閃。

剣ごとホープレイ・ヴィクトリーは真つ二つに切り裂かれていた。

「うわあああああー！」

そのエネルギーを諸に受けた遊馬の体が後ろに吹き飛ばされる。

1500ダメージも受けた事で遊馬のライフは一気に1700まで衰退してしまっ

た。

『大丈夫か、遊馬!』

「なんとかな。さすが遊里、すげえモンスターばかりだぜ」

倒れた遊馬が起き上がり、そう呟く。

《シューティング・スター・ドラゴン》もそうだが、《E・HERO ジ・アース》も

エースモンスターと言って過言ではない。

それを簡単に出してくるとは。

さすがとしか言うしかなかった。

「俺はこれでターンエンド。ジ・アースの攻撃力は元に戻る」

「負けるかよ、オレのターン! ドロー!」

と威勢よく言ってみたものの、この手札ではジ・アースを撃破しライフを削る事は不

可能。

だがやりようはある。

「オレは《ズババスター》を召喚!」

棍棒の両脇に鉄球がつけられた武器を持った戦士が現れる。

《ズババナイト》と同じズババモンスターだ。

だがどちらもジ・アースには届かない。

しかしどちらのモンスターもレベル3なのだ。

「来るか!」

「行くぜ! オレはレベル3の《スババナイト》と《スバババスター》でオーバーレイ! 2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築、エクシーズ召喚!!」

2体の戦士から生み出される新たなモンスター。

深海の底から現れるように、蒼色のその姿はドラゴン。

「現れる、No. 17! 渦巻く海底からその姿を現せ! リバイス・ドラゴン!!」

始まりの日。

遊馬が初めてモンスター・エクシーズを呼び出した時、対戦相手であった神代凌牙が使ったナンバーズ。

それは今、遊馬の手に渡りこうして召喚されているのだ。

「リバイス・ドラゴンの効果発動! オーバーレイユニットを1つ使って、自身の攻撃力を500アップする!」

「そういう事か!」

オーバーレイユニットの光を喰らうと、リバイス・ドラゴンの攻撃力が500アップする。

リバイス・ドラゴンの攻撃力はこれで2500とジ・アースと並ぶ事になる。

これだけならばジ・アースと戦闘した場合、相打ちで終わるだろう。そう、それだけならばだ。

「ナンバーズはナンバーズでしか倒せない！」

「その通りだ！ 行け、リバイス・ドラゴン！ ジ・アースを攻撃、バイス・ストリイイム！！」

リバイス・ドラゴンから放たれる螺旋の咆哮がエネルギーとなり、ジ・アースへと襲い掛かる。

攻撃力は同じだがナンバーズではないジ・アースのみが破壊されるだろう。

防御体勢を取るジ・アース。

だが一つ忘れていた事がある。

「罨発動！ 《くず鉄のかかし》！」

「なにっ!？」

「忘れたのか、こいつは発動後、再びセットされるって事をな！」

すっかり忘れられていた《くず鉄のかかし》の第二の効果。

1ターンに1度しか使えないが、破壊されない限りは何度でも使える不屈の盾だ。

放たれた螺旋の咆哮の前に現れるジャンクのかかし。それが一身に咆哮の一撃を受け止め防ぎきっていた。

「ちくしょう、すっかり忘れてたぜ。言ってくれよな、アストラル」

『言った所でやる事は変わらないなかつたさ。一先ずこれで凌ぐしかあるまい』

結果は変わらないとの事。

アストラルの言う通り、現状はこれで行かざるしか手がない状況であった。

「これでターンエンドだ」

「俺のターン！」

そして遊里もまたリバイス・ドラゴンを破壊する術は現状ではない。

ジ・アースでは相打ちでも出来ないのだから仕方ないが。

だがダメージは与えられるのだ。

「俺は魔法カード《ミラクルシンクロフュージョン》を発動！このカードはフィールドか墓地にあるシンクロモンスターを素材として融合召喚する事が出来る！」

『シンクロモンスターを利用した融合だ！』

「俺は墓地にいる戦士族のエアーマンとドラゴン族でありシンクロモンスターである《シューティング・スター・ドラゴン》を素材として融合召喚する！」

墓地に眠りし、風の戦士と流星の竜が浮かび上がると、一体化するように融合していく。

「波動を操りし竜の騎士よ、その力を宿した槍を携え光臨せよ！融合召喚！《波動竜騎士

ドラゴエクイテス≫!!」

不動遊星が対シンクロモンスターのモンスターに対抗するべく導き出した1つの答え。

シンクロモンスターを使った融合モンスター。

巨大な槍を構えたドラゴンナイトが降臨したのだ。

確かにナンバーズはナンバーズでしか破壊できない。

だがダメージは与えられるのだ。

「行くぜ、ドラゴエクイテスでリバイス・ドラゴンを攻撃！」

竜騎士がその巨大な槍を手足のように回すと、その槍にエネルギーが溜まっていく。

間違いなく強大な一撃。

その力と自分との差に気づいたのか、怯えを隠すように咆哮を上げるリバイス・ドラゴン。

だがその程度で竜騎士が止まる筈もない。

「スパイラル・ジャベリン!!」

勢い良く放たれる槍は螺旋を描きながら一気にリバイス・ドラゴンへと突撃していき。

リバイス・ドラゴンも必死に反撃を試みる。

螺旋と螺旋。

それが勢い良く激突。

勝負は一瞬でついた。

螺旋の槍が咆哮を撃ち払ったのだ

そのまま勢いを落とす事なく、一気にリバイス・ドラゴンを貫いた。

勿論、ナンバーズでしか破壊できない。

だがその一撃による衝撃は隠せるものではなく遊馬達に襲い掛かっていく。

『畏発動！《ダメージ・ダイエツト》！このターン、我々が受けるダメージを半分にする！』

これ以上のダメージは危険と判断したのか、アストラルが畏を発動する。

スパイラル・ジャベリンの一撃による衝撃を半減していく。

だがそれでもダメージにより1350にライフが減ってしまう。

「これでターンエンド。忘れていたが、ドラゴエクイテスが表側攻撃表示で存在する限り、効果ダメージは全て相手に跳ね返るから気をつけるよ」

つまりバーンダメージで遊里のライフを削ろうとすれば、ダメージを受けるのは自分達という事である。

積極的に効果ダメージを与えるカードは多くないが、間違っても使おうとすればただ

でさえ少ないライフがもつと減ってしまうという事だ。

「オレの……ターン！」

今の遊馬の手札にこの状況を打開する手はない。

リバイス・ドラゴンで粘る手もあるが、あの遊里が突破する手段を用意出来ないとは思えない。

「オレは魔法カード《セブンスストア》を発動！モンスター・エクシーズをリリースしてデッキからカードを1枚ドロウする！更にリリースしたモンスターにオーバーレイユニットが存在する場合、その数だけ更にカードをドロウする事が出来る！」

『リバイス・ドラゴンをリリース。更にリバイス・ドラゴンにはオーバーレイユニットが1つある。つまり2枚ドロウする！』

「ドロオオオ！」

光へと消えて行くリバイス・ドラゴンがいた場所に残された2枚のカード。

それを見て遊馬の表情が変わる。

「アストラル」

『ああ、行くぞ！』

「いいカードを引いたみたいだな……」

攻勢に出んとする遊馬達を見て、遊里の表情も変わる

かかってこいと言った表情だが、その表情からは笑顔が零れている。嬉しいのだから、デュエルする事が。

「魔法カード《ガガガ学園の緊急連絡網》！デッキからガガガモンスターを特殊召喚する！来い、《ガガガマジシャン》!!」

緊急連絡を受けて、デッキからやってきたのは学園番長こと《ガガガマジシャン》。

「そして《ドドドウオリアー》を召喚する！このカードは攻撃力を500ポイントダウンさせる事でリリースなしで召喚する事ができる！」

『更に《ガガガマジシャン》の効果を発動する！このカードのレベルを6に変更する！』
『ドドドウオリアー』のレベルは6。

これでレベル6のモンスターが2体揃った事になる。

「オレはレベル6の《ガガガマジシャン》と《ドドドウオリアー》でオーバーレイ！2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築、エクシーズ召喚!!」

新たな光から生み出されるのは、巨大な大陸のようなモンスター。

「現れる、No. 6！人智を超えた神秘の大陸よ。古代の知識と共に浮上せよ！先史遺産アトランタル!!」

「で、でかすぎだろ……」

顔を引きつらせる遊里。

しかし初見の人間が見れば、大体似たような反応をするだろう。遊馬の友、かつては敵対したが共に戦った少年、IIIの切り札。

洪水で滅亡し、水の底へと沈んでいったと言われる神秘の大陸が人になったと言わんばかりの巨大なモンスター。

その威圧感は一途なものではない。

「アトランタルはエクシーズ召喚された時、墓地のナンバーズ1体を装備しその攻撃力分だけ攻撃力をアップする！蘇れ希望皇ホープ!!」

墓地から蘇ったホープはそのままアトランタルの腹の部分へと収まっていく。すると、アトランタルから光があふれ出す。

他のナンバーズの力を得て、その攻撃力は5100へと跳ね上がったのだ。

「更にアトランタルの効果発動！オーバーレイユニットを1つ使い、相手のライフを半分にする！」

『そしてこの効果はダメージを与えるものではない!』

「チツ、ドラゴエキイテスじゃ防げないって事か……!」

「いけえ!アトランタル!オリハルコン・ゲート!!」

アトランタルが右手に火山の力を宿すとその力ごと遊里を一気に叩き潰してくる。

「ぐああつっ!」

遊里のライフが一気に半分の600へと減る。

だがまだこれで終わりではない。

攻撃力5100のアトランタルの攻撃が待ち構えているのだ。

「これで終わりだ！アトランタルでドラゴエキイテスを攻撃！」

アトランタルの左肩の火山が盛大に噴火を起こすと、そこから発生されるエネルギーが巨大な竜巻を巻き起こして行く。

その熱い竜巻は一直線にドラゴエキイテスへと襲い掛かる。

この一撃が通れば、残りライフ600など一発で吹き飛ぶだろう。

「罨発動！《くず鉄のかかし》！」

再び現れるジャンクのかかし。

例えばゴミだろうと、いかなる攻撃をも防ぐ盾だ。

だが対策もなく攻撃する遊馬ではない。

「その瞬間、手札から《チャウチャウちゃん》の効果発動！相手の罨カードの効果は無効に破壊する！」

「くっ！」

『これで遊里を守るものはない！』

「行け、アトランタル！ホープ剣・クロス・アトランタル・スラッシュユ！！」

《くず鉄のかかし》が破壊され、灼熱の竜巻が、いや装備されている希望皇がその身を焰に変えて竜騎士へと一気に襲い掛かる。

これが通れば遊里の負けである。

だが、それでも負けないと遊里もまた手札からカードを発動する。

「俺は手札の《クリボー》を発動！この戦闘ダメージを0にする！」

遊里の目の前に増殖した小さな悪魔達が壁のように現れる。

それだけではない。

攻撃を防ぎきれないと判断した竜騎士はその手に持つ槍を遊里の目の前に投げ捨てる。

それはまるで盾のように遊里の目の前に突き刺さった。

その次の瞬間、灼熱の竜巻は竜騎士をあつという間に飲み込み、灼熱の希望皇がその剣で滅ぼしていった。

だがそこから放たれ、遊里を襲う筈だった衝撃は竜騎士の槍と小さな悪魔達によって防がれていった。

戦闘ダメージは0。

つまりライフは600のままである。

『仕留めそこなつたか……！』

「簡単にはやられないぜ！」

「さすが遊里だぜ。オレはカードを1枚セットしてターンエンド！」

必殺の一撃だったのだが、それすらも回避されるとは。

さすがと賞賛するしかない。

しかしそれでもライフは残り600。

何かあれば一瞬でライフは0になるだろう。

そして遊馬の場には攻撃力5100のアトランタルが残ったままである。

「俺のターン、ドロロー……俺は魔法カード《アドバンスドロロー》を発動！フィールド上にいるレベル8以上のモンスターを1体リリースしてデッキから2枚カードをドロローする。俺はジ・アースをリリース！」

後は任せたと、言った様子でジ・アースが光の中に消えて行く。

ジ・アースが残っていた2枚のカード。

そしてこの状況を打開出来るだけのカードを引く事が出来た。

「よし、魔法カード《コクーン・パーティ》を発動！墓地に存在するネオスペーシアン1種類につき、コクーンモンスターをデッキから特殊召喚する！」

墓地に眠っているネオスペーシアンは4種類。

《N・グラン・モール》、《N・フレア・スカラベ》、《N・ハミング・バード》、《N・ブ

ラック・パンサー》の4枚。

宇宙の戦士達から放たれる光は、フィールドに新たなる繭を生み出して行く。

「デッキから《C・モーク》、《C・チッキー》、《C・パンテール》、《C・ラーバ》を特殊召喚する！」

「大量展開された！」

「更に永続魔法《コクーン・リボン》を発動！フィールド上にいるコクーンモンスターをリリースして、それに対応するネオスペーションモンスターを墓地から特殊召喚する！」

フィールドにある繭達が震えるように光出す。

まさに羽化しようとしているように見えた。

「蘇れ、《N・グラン・モール》、《N・フレア・スカラベ》、《N・エア・ハミングバード》、《N・ブラック・パンサー》！」

繭を破り、成長した姿で現れる宇宙の戦士達。

とは言え、そのステータスは低い。

全員守備表示で特殊召喚される事になった。

「まだ続け、魔法カード《スペーシア・ギフト》を発動！フィールド上のネオスペーションモンスター1体につきカードを1枚ドロウする！俺の場には4種類いるから4枚

ドロローだ！」

『なんとという大量ドロローだ……！』

4枚という連続ドロローに加え、ステータスが低いとは言え4体のモンスターを展開したのだ。

驚くなどという方が無理である。

しかし一番驚いていたのは遊里本人であるだろう。

普段ならばこんな流れるような展開を出来た試しがない。というかよく事故らなかったな、と褒め称えたい気分である。

「まずは《N・エア・ハミングバード》の効果発動！相手の手札1枚につき、俺はライフを500回復する！ハニー・サック!!」

「なっ、花あ!？」

遊馬の手札から突如として花が咲き誇る。

するとその花に飛び込んできた《N・エア・ハミングバード》が蜜を吸い込んで行く。遊馬の手札は2枚。つまり1000ポイントの回復である。

600しかなかった遊馬のライフが1600まで回復する。未だにデッドラインではあるが、《ガガガンマン》の効果で死亡という事態から免れた。

「そして《E・HERO プリズマー》を召喚！」

美しい水晶の結晶と言うべき体を持った戦士が現れる。

「プリズマーの効果発動！エクストラデッキにある融合モンスターを1体見せ、そこに書かれている融合素材モンスターをデッキから1枚墓地に送る事が出来る。そしてプリズマーはそのカードと同名カードとして扱う！」

『融合モンスターの素材に変わるといふのか！』

「俺が見せるのは《E・HERO マグマ・ネオス》！送るのは《E・HERO ネオス》だ！」

デッキからカードが1枚送られると、プリズマーもその姿を変えて行く。

気がつけ宇宙の戦士、正義の闇の波動を受けた遊城十代の新たなエースモンスターだ。

「そして俺はフィールド上にいる《E・HERO ネオス》！《N・フレア・スカラベ》！《N・グラン・モール》！この3体をデッキに戻して、融合モンスターを召喚する！トリプルコンタクト融合!!」

「融合なしで融合モンスターを特殊召喚するだつて!？」

ネオスを中心にフレア・スカラベとグラン・モールが宇宙の中心へと飛び込んで行く。正しき闇の力を浴び、その姿を新たな形へと変えていく。

「宇宙の戦士が新たな仲間と共に新たな姿へと進化する！トリプルコンタクト融合！来

い、融合召喚！《E・HERO マグマ・ネオス》！」
炎と岩。

その力を浴びたネオスはマグマという大自然の力の鎧を手に入れていた。
まるでマグマの力を使うアトランタルに対抗するように。

「マグマ・ネオスはフィールド上に存在するカード1枚につき攻撃力を400アップする！」

「な、なんだってえ!？」

『お互いのフィールド上に存在するカードは合計7枚……2800アップ!』

その上昇値に驚きの声を上げる2人。

攻撃力はこれで5800。アトランタルをあつという間に抜いてしまったのだ。

「まだまだ！ネオスにはネオスの戦場がある！俺はフィールド魔法《ネオスペース》を発動！《E・HERO ネオス》やネオスを融合素材とする融合モンスターの攻撃力は500アップする！」

『それだけではなく、フィールドにカードが1枚増えた……!』

「更に900ポイントアップかよ!？」

マグマ・ネオスに力がみなぎって来る。

ネオスがやってきたという星の力を受け、その攻撃力は6700。

圧倒的と言っていい数字だ。

「行け、マグマ・ネオス！スーパードヒートメテオ!!」

頭上に灼熱の塊が集中する。

凄まじいエネルギー量のそれはアトランタルすら上回る熱量だ。

これが直撃すればただではすまないだろう。

まともに直撃すれば遊馬のライフは一気に吹き飛ぶ。

だがアストラルにはある可能性を思い浮かべていた。

もしそれがあるとすればこの一撃で負けるかもしれない。

『まずい………遊馬、トラップだ!』

「おう！毘発動！《エクシーズ・ピース》！モンスターエクシーズが攻撃された時、その攻撃を無効にする！」

放たれたマグマの一撃がアトランタルに直撃する直前に消滅する。

「更に攻撃対象に選択されたモンスターエクシーズをリリースし、レベル1モンスター2体を効果を無効にしてデッキから特殊召喚する！《クリボルト》と《ダークロン》を特殊召喚！」

アトランタルが墓地へと消え去り、遊馬のデッキから2体のモンスターが特殊召喚される。

しかしどちらも効果が無効となったレベル1モンスターだ。
マグマ・ネオスを相手にするには厳しいだろう。

「……俺はカードを1枚セットしてターンエンド」

「オレのターン！ドロー！」

『遊馬、気をつけるんだ。あのリバースカードは《禁じられた聖杯》の可能性が高い』
アストラルの言葉にハツと気がつく遊馬。

小鳥も持っていた速攻魔法。あれは攻撃力を上げる代わりにモンスター効果を無効にする強力なカード。

確かにあれならばナンバーズを倒す事が可能だ。

そしてアトランタルの効果が無効にされていたら、装備されていたホープは破壊され攻撃力がダウン。

そうなればあのマグマ・ネオスの一撃を耐える事なんて出来なかつただろう。

「となると、アレを出しても厳しいか……？」

『いや、出すべきだ』

「アストラル？」

『既に我々は後がない。ここで攻める手段があるならば攻めるべきだ』

そんな言葉に本当に驚きの表情を見せる。

普段のアストラルならば、そんな無茶な事は言い出さないだろう。

「なんだよ、アストラル。普段ならもつと慎重にとか言うんじゃないのか？」

『ふ、君達に影響されたのかもな』

からかうような遊馬の言葉に笑みを浮かべるアストラル。

よし、と遊馬も覚悟を決める。

「なら行くか！オレは《マツボックル》を召喚！」

これでレベル1のモンスターが3体。

「オレはレベル1の《クリボルト》と《ダークロン》、《マツボックル》でオーバーレイ！
3体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築、エクシーズ召喚!!」

3体のモンスターが光へと変えて行く。

それは新たなモンスター。勇敢な心を持った獅子。

「現れる、No. 54！熱き闘志の雄叫びが眠れる魂すらも震わせる！反骨の闘士！ライオンハート!!」

反骨の獅子。

遊馬の友、アリトの記憶のモンスター・エクシーズだ。

「行くぜ、バトルだ！ライオンハートでマグマ・ネオスを攻撃！」

獅子が一気にマグマ・ネオスに殴りかかる。

ライオンハートの攻撃力は100しかないというのに、攻撃力6300のモンスターに攻撃するというのか。

「畏発動！《攻撃の無力化》！攻撃を無効にし、バトルフェイズを終了する！」

『《禁じられた聖杯》ではない!?』

「バトルを無効にされた!?!」

マグマ・ネオスに殴りかかろうとした、ライオンハートの拳が異次元の穴に吸い込まれる。

その隙に、マグマ・ネオスは一気に距離を離していく。

『バトルは無効になったが、遊里の手札に聖杯がない可能性が高いな』

「ああ。遊里なら聖杯で返り討ちにしてきた筈だからな」

それを確認できた意味でもこのバトルは十分に意味があった。

「カードを一枚セットしてターンエンド」

「……俺のターン、ドロ」

遊里はエンド時に数秒考えるが、そのまま自分のターンに入る。

一体なんだ、とアストラルは遊里の様子に気がつくが現状、理解する手段はない。

「……」

その手札にライオンハートを打倒する手段はない。

むう、とライオンハートを睨みつける。

ライオンハートはバトルした時、自身は破壊されず、発生する戦闘ダメージを互いのプレイヤーに与える効果を持つ。

マグマ・ネオスと戦闘すればそのダメージは遊里にも襲いかかる。

逆に遊馬はライオンハートの効果でライフが100だけ残るといふ。

つまり効果を無効にしない限り、ライオンハートとの戦闘は不可能だ。

遊里の手札は数枚。

これだけあるというのに手立てがないとは思わなかった。

「俺は《N・エア・ハミングバード》の効果発動！ライフを回復する！」

ライフが500回復し、2100になる。

だがそれだけだ。

「これでエンドフェイズに移行する！」

「え？」

「そしてこの瞬間、エンドフェイズにマグマ・ネオスの効果発動！」

『このタイミングで!?!』

マグマ・ネオスから光が放たれる。

それは灼熱の焰。一気にそれが拡散していく。

すると大地が跳ね上がり、そこにあるカード達が吹き飛ばされていく。

ライオンハートも噴出する大地に巻き込まれていく。

「ライオンハート!?!」

「マグマ・ネオスはエンドフェイズにエクストラデッキに戻る。さつきは《ネオスペース》の効果で戻さなくても大丈夫だったが、あえて戻すぜ」

『くつ、《ネオスペース》にはそのような効果まで……!』

「そしてマグマ・ネオスが戻る時、フィールドのカードは全て持ち主の手札に戻る! ライオンハートもな!」

「しまった!?!」

悲鳴のような咆哮を上げて、ライオンハートが戻っていく。

しかしモンスター・エクシーズが戻るのは手札ではなくエクストラデッキ。実質除去と変わりがない。

遊馬のフィールドからは全てのカードが消え去ってしまった。

だがそれは遊里も同じだ。

そしてエンドフェイズである為、新たなカードを出す事が出来ない。

「俺の手札は7枚。《N・エア・ハミングバード》を墓地に送る。ターンエンド」

過剰に増えた手札を墓地に送る遊里。

手札は多いが、フィールドにカードはない。

だと言うのに焦るような様子はない。

となれば遊馬も使う《ガガガードナー》などのモンスターが手札にある可能性が非常に高い。もしくは先程の《クリボー》か。

「オレのターン！ドロー」

ドローしたカードを見るが、攻め手が無い。

生半可なモンスターを出せば、逆に敗北するのはこちらである以上、出せるモンスターは慎重に出さなければならない。

「くっ……カードを2枚セットしてターンエンド！」

今、使えるカードを全てセットする。

これで時間を稼ぐしかなかった。

「俺のターン、ドロー。攻めさせてもらうぞ遊馬！俺は《サイクロン》を発動！魔法、罫カードを1枚破壊する！」

「くっ、ミラーフォースが……！」

魔法の竜巻が遊馬のカードを1枚破壊する。

攻撃された時、攻撃表示のモンスターを破壊するバリアはあっさりと破壊されてしまったのだ。

「俺はカードを1枚セットし再び《ネオスペース》を発動。そして《手札抹殺》を発動！ お互いのプレイヤーは手札を全て捨てて、その枚数だけカードをドロウする」

遊馬は1枚、遊里は手札4枚入れ替える。

「そして今セットしたばかりの魔法カード、《ミラクルコンタクト》を発動！ 《E・HERO ネオス》を融合素材にするE・HEROと名のつくモンスターを手札、フィールド、墓地からデッキに戻してエクストラデッキから特殊召喚する！」

墓地で眠っていた《E・HERO ネオス》、《N・ブラック・パンサー》、《N・エア・ハミングバード》。

そして《手札抹殺》で捨てられた《E・HERO プリズマー》と《N・フレア・スカラベ》が光となり、デッキへと戻っていく。

光臨するのは神の光。

「星の光を1つに束ねる神の輝き！これがネオスの最終進化系！ 《E・HERO ゴツド・ネオス》!!」

黄金の光を纏ったネオスの新たな姿。

遊城十代がダークネスを倒した最後の切り札。

『なんと輝きを持ったモンスターなのだ……！』

「もう驚くしかできねーや」

アストラルと遊馬も驚くしかりアクションを取れないレベルである

「そして《ネオスペース》の効果により攻撃力は500アップ！更にゴッド・ネオスの効果発動！墓地に眠るE・HEROかネオスペースアンと名のつくモンスターを除外して攻撃力を500アップし、除外したモンスターの効果を得る！」

『なんだと!?!』

「墓地のモンスターの効果を得るだつて?!」

「ああ。俺が除外するのは《E・HERO ジ・アース》！」

地球という星のエネルギーが神の戦士へと集まっていく。

それはまるで本来交わる事がない遊城十代の輝きが1つになっていくようで、遊里は感動を覚えていた。

しかしジ・アースの効果を得たとは言え、手札にE・HEROは存在しない以上、効果は使えそうにない。

それに効果を使わなくてもこの状況ならば問題はない。

「ゴッド・ネオス、攻撃だ！」

その黄金の鎧が光を収束させていく。

虹色の光だ。

「レジェンダリー・ストライクうう！」

虹色の7つの光が遊馬を貫かんと一気に殺到する。

「俺はこの瞬間、畏発動！《エクシーズ・リボン》！墓地の希望皇ホープを蘇らせる！
舞い戻れ、ホープ!!」

一筋の光に導かれた希望の皇が再び戦場に舞い戻る。

「ならゴッド・ネオスの攻撃をホープに変えるまでだ!」

放たれた7つの光は寸分の狂いもなくホープへと殺到する。

《エクシーズ・リボン》の効果により、ホープにはオーバーレイユニットが1つ復活している。

これがあれば月の盾を使用する事が可能だが。

「ぐううう!?!」

なのだが、あえて遊馬は効果を使わなかった。

ホープはその手にもつ剣で攻撃を防いで行くが、ダメージはしっかりと発生する。

これで遊馬のライフはついに350となる。

瀕死だ。何かあれば即0になるだろう。

「……俺はターンエンドだ」

「へへ、今のは効いたぜ……オレのターン、ドロー!」

遊馬とアストラルの視線が一瞬だけ重なる。

これから何が起こるのか。

遊里は大体を察していた。

そうでなければ、わざわざライフを削った理由が見当たらないからだ。

「オレはホープをエクシーズ素材としてカオスエクシーズチェンジ！」

希望皇ホープが塔のような姿に形を変えると光になり雄たけびを上げて、上空に駆け上っていく。

これこそが一番最初のエクシーズチェンジ。

新たなホープが再誕するのだ。

「現れよ、C.N.O. 39！混沌を光に変える使者！希望皇ホープレイ！」

白き鎧は黒が交じり合ったグレーのものへ。

背中には巨大なパーツが装備されている。

これこそが遊馬とアストラルが生み出した友情のカード。

「ホープレイの効果を発動！オーバーレイユニットを一つ取り除き、ホープレイの攻撃力を500アップさせ相手モンスターの攻撃力を1000ポイント下げる！オーバーレイ・チャージ！」

ホープレイから放たれる混沌の光がゴッド・ネオスを浸食していく。

オーバーレイユニットの数は2つ。

それを両方使った事により、ホープレイの攻撃力は3500に上昇。逆にゴツド・ネオスの攻撃力は1500へとダウンする。

「行くぜ、ホープレイの攻撃！ホープ剣・カオススラッシュ!!」
背中から現れる巨大な剣。

それがゴツド・ネオスを一刀両断した。

「ぐっ、ああああっ！」

必殺の一撃。

これにより遊里のライフはギリギリ1000残る。

《N・エア・ハミングバード》による地道なライフ回復がなければ負けていただろう。

「やるな……！」

「へへ……オレはこれでターンエンドだ」

遊里のライフは100。

遊馬のライフは350。

もうお互いに簡単な一撃で倒されるだろう領域。

決着は近い。

「俺のターン、ドロー！」

手札を見て暫く悩む遊里。

既に終盤。彼も慎重になるのは当然だろう。

「かつこ悪いが、ここは守りの手を取らせてもらう。そしてもう一つ、新しい召喚方法を見せてやる！」

「なんだって!？」

『シンクロ召喚の他にまだあるのか!？』

「俺はスケール1の《星読みの魔術師》とスケール8の《時読みの魔術師》でペンデュラムスケールをセッティング！」

「な、なんだ!？」

突如、遊里の上空に2人の魔術師が光の柱に登って現れる。

今まで見た事がない反応だ。

これが新たな召喚方法だと言うのか。

「揺れる魂のペンデュラム、天空に描け光のアーチ！」

まるで振り子のようなものが空で揺れ動く。

それは新たな光を生みだしていく。

「ペンデュラム召喚！疲れを癒す眠りし龍よ！今ここに目覚めよ!! 《オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》!!!」

遊里の手札から新しく呼び出されたドラゴン。

これこそエンタメデュエルを行う榊遊矢のエースモンスター。

『ペンデュラム召喚……!』

「ああ。ペンデュラムモンスターをペンデュラムスケールと呼ばれる場所にセットし、そのスケールに書かれた数字の間のレベルのモンスターを同時に手札やエクストラデッキから特殊召喚する方法だ」

つまりスケール1とスケール8のモンスターがペンデュラムスケールにセットされている為、レベル2から7までのモンスターを特殊召喚出来るという事か。

シンクロやエクシーズとも違う新たな方法。

しかも同時展開できるならば新たな活用方法を見出す事も出来るかもしれない。

「とは言っても今、ホーププレイを倒す手段がないからな。カードを1枚セットしてターンエンドだ」

オッドアイズは守備表示の体勢だ。

攻撃力はお互いに2500。相打ちすら出来ないのだから当然か。

「オレのターン、ドロロー!」

新しいモンスターを出せば勝てる状況だがこない。

先程から、遊里を倒せるタイミングあるというのに上手くいかないものである。

「ホーププレイで《オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》を攻撃!」

「くっ、悪いなオッドアイズ……!」

壁にされた破壊されてしまったオッドアイズに謝る遊里。
だが時間は稼げた。

「オレはカードを一枚セットしてターンエンドだ」

「この瞬間、畏発動! 《融合準備》!」

『このタイミングでの畏!?!』

「エクストラデッキの融合モンスターを見せて、その素材となるモンスターをデッキから手札に加える事が出来る。俺が見せるのは《超魔導剣士―ブラック・パラディン》。そして手札に加えるのは《ブラック・マジシャン》だ」

「ブ、《ブラック・マジシャン》!?!」

遊馬が驚きの声を上げるのは無理もない。

《ブラック・マジシャン》と言えば伝説の決闘王のエースモンスターとして名高い。

それを遊里が持っているとは思わなかったからだ。

「更に墓地に《融合》がある時、手札に加える事が出来る」

『序盤に落ちていたカードか!』

「そして俺のターン! 再びペンデュラム召喚だ!」

「レベル7の《ブラック・マジシャン》を召喚するのか!」

「ふ……揺れる魂のペンデュラム、天空に描け光のアーク！」

再び天空の振り子が揺れ動くと光に導かれてフィールドに新たなモンスターが特殊召喚される。

「王に仕えし、黒き魔導師。いでよ、《ブラック・マジシャン》!!」

初代決闘王、武藤遊戯のエースモンスター。

古代エジプトの王、アテムの臣下である黒魔導師が降臨したのだ。

だがそれだけではない。

「再び参られよ！世にも珍しき二色の瞳を持つドラゴン。《オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》！」

「な、に!？」

『馬鹿な！《オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》は破壊された筈だ!』

黒き魔導師の横に現れた、二色の瞳を持つ竜を見て驚愕の声を上げる。

先程、間違いなくホーププレイによって破壊されたというのに何故？

「ペンデュラムモンスターは破壊された時、墓地ではなくエクストラデッキに戻る！」

『くっ！そうか！ペンデュラム召喚はエクストラデッキから特殊召喚できるとはこういう事だったのか!!』

一瞬にして理解したアストラル。

先程、エクストラデツキからも特殊召喚できるという遊里の発言をようやく理解したのだ。

つまり破壊されても何度でも特殊召喚する事が出来るといふ事だ。

「それって何回破壊しても蘇るって事かよ！」

『だがそれはあくまでペンデュラムスケールがセッティングされている時だけだ。しかしそれを含めてもなんという効果だ……！』

「くう！遊里の奴、どんどんオレ達の知らないものを見せてくれるぜ！」

『ふ、君という奴は……』

危機が目の前に迫っているというのに、こんな笑顔を出せる遊馬に苦笑するしかないアストラル。

だがそれでこそ九十九遊馬という存在だ。

「レベル7のモンスターが2体揃っているが……俺の選択する答えはこれだ！魔法カード《融合》を発動！」

「エクシーズじゃなくて融合か！」

「その通りだ！俺はフィールド上にいる、《オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》と《ブラック・マジシャン》を融合する！」

《ブラック・マジシャン》が《オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》の上に乗ると、

その姿が一つに融合されていく。

「神秘の力操りし者、眩き光となりて龍のまなこに今宿らん！融合召喚！出でよ！秘術ふるいし魔天の龍！《ルーンアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》!!」

《オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》の背中に巨大なリングのパーツが加わり、その瞳には神秘の力が宿る。

これこそが、ペンデュラム召喚の先の答えを探した榊遊矢の新たなエースモンスター。

「《ルーンアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》はペンデュラム召喚されたモンスターを使って融合した時、このターンの間、いかなる効果も受け付けない！」

「な、なんだって!?!」

それはつまりモンスター効果も魔法も罠の効果も受け付けず、止める手段がほぼないという事だ。

そして遊馬のフィールド上にいるのは攻撃力2500の《CNo. 39 希望皇ホープレイ》。

遊里が融合召喚した《ルーンアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》は攻撃力3000だ。その攻撃が通れば一撃で倒されるだろう。

「だがそれだけじゃない！ルーンアイズは融合素材に使った魔法使い族モンスターのレ

ベルによって攻撃回数が増える！《ブラック・マジシャン》はレベル7！これによりルーンアイズは3回攻撃する事が出来る！」

『3回攻撃だと……!?!』

効果を受け付けないだけでは飽き足らず、3回攻撃もする事が可能とは。

状況によってはこれを出すだけで一撃必殺になっていただろう。

背中のリングにつけられた装飾部分に光の球が3つ浮かび上がる。

「行くぞ！ルーンアイズでホープレイを攻撃！閃光のシャイニーバーストオオオオ！」

その球の1つの光が最大限に光った瞬間、そこから光線が放たれた。

狙いはホープレイ。これが通れば遊馬の勝ちである。

「まだだあ！毘発動！《ホープ》！」

「馬鹿なルーンアイズにいかなる効果も受けないんだぞ！」

「こいつはルーンアイズに効果を与える効果じゃない！ライフが0になる攻撃を受けた時、オレのフィールドに存在する希望皇ホープと名のつくモンスターを墓地に送って、ライフを1にして踏ん張る！」

光となったホープレイが墓地へと沈んで行くと、その残された光が遊馬を守る盾のように展開される。

放たれた閃光の一撃は確かに遊馬に直撃するもダメージはない。

効果を受け付けない《ルーンアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》ではなく、あくまで遊馬自身のライフを1にして身を守るカードという事か。

なるほど、確かにそれならばルーンアイズ相手にも効果があるカードだ。

「食いしばられたか……!」

「へっ、これがオレの最後の希望って奴だ!」

「なら、それを超えて行かず、俺は!カードを1枚セットしてターンエンドだ!」

なんとか遊里の怒涛の攻撃を凌いだ遊馬。

手札は2枚。この手札に遊里のルーンアイズを超える手段は存在しない。

全てはこのドローにかかっている。

だが残りのデッキからほんの僅かのカードを引けるかどうか賭けるしかない。

そしてそれを可能にする手段はある。

しかしそれを使っているものかと悩む遊馬であったが、きつかけを作ったのは遊里であった。

「さあ、遊馬!アストラール!お前達の全力を見せてくれ!遠慮なんて今更気にするなよ!」

「遊里……!」

「だから、見せてみな。お前達の力を!」

そんな言葉に遊馬はしっかりと目を閉じる。

数秒後、目を見開くとアストラルに話しかける。

「なあ、アストラル」

『どうした遊馬』

「オレは……遊里に勝ちたい」

『奇遇だな、私もだ』

思いは一緒。

ならば遠慮なんてしてやるものか。

「なら見せてやるぜ遊里！」

『我々の力を！』

「ああ！」

遊馬とアストラル。

2人が手を繋ぎ合わせる。

これこそが2人の真の力。

「オレと！」

『私で！』

『『かつとピングだー！』』

「来るか！」

2人が光を纏い始める。

「オレはオレ自身とお前でオーバーレイ!!」

遊馬は赤き光となり、上空へ。

アストラルも青き光となり、遊馬を追うように駆け上がっていく。

「オレ達2人でオーバーレイネットワークを構築!!」

『絆は進化する!より強く!より硬く!』

『絆結ばれし時、力と心が1つとなり、光の奇跡と伝説が生まれる!エクシーズ・チェンジ!ZEXAL!!』

2人がエクシーズチェンジする事により一体化となり、その身に黄金の鎧と翼を見に纏う。

これこそが2人の最終進化系。

ZEXAL。

「行くぞ!オレのターン!最強デュエリストのドローは全て必然!その光はカードを導く!我が身が放つ一点の光を目指し、来たれ!シャイニング・ドロオオオ!!」

巨大な光を放ちながらカードをドローするZEXAL。

ドローするカードさえも光り輝いている。

「来たぜ!オレは《死者蘇生》を発動!!」

『蘇れ、No. 39！希望皇ホープ!!』

「ホープか!」

何度でもとばかりに蘇る希望の皇。

それも当然か。

折れぬ力こそそれは希望となるのだから、その皇ならば1度や2度、倒された程度で折れる筈もない。

「そしてオレは《RUM―アストラル・フォース》を発動!このカードは自分フィールド上の一番高いランクのモンスター・エクシーズを選び、選んだモンスターのランクより1、または2つ上のエクシーズモンスターを特殊召喚する!ランクアップ・エクシーズ・チェンジ!」

「最後の切り札か……!」

「限界突破だホープ!!」

天高く飛翔するホープ。

そしてその周りには4体の影が現れていた。

《CN0. 39 希望皇ホープレイ》、《CN0. 39 希望皇ホープレイV》、《CN

0. 39 希望皇ホープレイ・ヴィクトリー》、《No. 39 希望皇ホープ・ルーツ》。

その全てのホープの鎧が分解され、中心にいる希望皇ホープへと装備されていく。

これこそが希望皇ホープの最終新化した姿。

「現れる、No. 39！人が希望を越え、夢を抱くとき、遥かなる彼方に、新たな未来が現れる！限界を超え、その手につかめ！希望皇ビヨンド・ザ・ホープ！！」

純白の鎧と翼。

すべてのホープが一体化した姿だけあって、それは神々しい美しさと力強さを感じ取れてる程だ。

『行くぞ遊里！』

「ビヨンド・ザ・ホープは相手のカードの効果を受けない！」

「くっ！」

「そしてビヨンド・ザ・ホープが攻撃する時、相手フィールド上に存在するモンスターの攻撃力は0になる！」

ビヨンド・ザ・ホープから放たれる光線がルーンアイズに襲い掛かると、苦痛に悶え苦しむドラゴン。

当然だ。

その身に宿す神秘の力の一切が全て失われてしまったのだから。

これでルーンアイズの攻撃力は0。

そしてビヨンド・ザ・ホープの攻撃力は3000な上に効果を受け付けない。

「これで終わりだ！ホープ剣・ビヨンド・ザ・スラッシュユ!!」

両手に現れた3振りずつの剣が頭上で一体化し、その大剣を《ルーンアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》へと振り下ろす。

これが通れば遊馬の勝ちである。

「まだ俺も終わらない！畏発動《スピリット・フォース》！このターン、戦闘ダメージは0になる！」

「くっ！」

確かにビヨンド・ザ・ホープの一撃はルーンアイズに直撃し、ルーンアイズを破壊した。

しかしそこから発生するダメージは遊馬の周りに展開された不可視の壁によって防がれたのだ。

「本来ならば自分の墓地に存在する守備力1500以下の戦士族チューナー1体を手札に加える事ができるが、俺の墓地にはいないから回収は出来ない」

《ジャンク・シンクロン》など落ちていれば話は別だったのだろうが、そちらは未だにデッキの中だ。

『それでも駄目なのか……!』

「まだまだぜ！オレはカードを1枚セットしてターンエンド！」

これで遊馬の手札は0。

遊里もまた手札は0だ。

「…………ふ、俺の…………ターン！ドロー！」

遊里にとってラストドローになるかもしれないカードをデッキから引き抜く。

そして遊里は笑みを浮かべた。

まだ終わりではない。

「俺は《貪欲な壺》を発動！墓地の《ダンディライオン》、《カードガンナー》、《アンノウ
ン・シンクロン》、《フォーミュラ・シンクロン》、《クリボー》をデッキに戻してカード
を2枚ドローする！」

これで手札は2枚。

だがこれでも足りない。

「更にペンデュラム召喚！舞い戻れ、《オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》！」

三度、蘇る二色の瞳を持つ龍。

「そして俺は魔法カード《七星の宝刀》を発動！フィールド、手札のレベル7のモンス
ターを除外してカードを2枚ドローする……………すまない、オッドアイズ」

壁役になったりドローする為のコストになったりと散々ではあるが、これで遊里の希

望は確かに繋がったのだ。

「そして魔法カード《融合回収》を発動！融合素材となったモンスターと魔法カード《融合》を墓地から回収する！そして回収するモンスターは《ブラック・マジシャン》！」「ブラック……マジシャン！」

「ここまでくれば分かるよな。俺は《融合》を発動!!」

『来るか!』

「黒き魔導師と竜破壊の剣士が1つになる時、それは友情の剣となる！」

黒魔導師《ブラック・マジシャン》と竜破壊剣士《バスター・ブレイダー》。

初代決闘王、武藤遊戯を支えた伝説のモンスター達。

それが1つになり、再び伝説が蘇る。

「融合召喚!!《超魔導剣士―ブラック・パラディン》!!これが俺の切り札だ!!」

「ブラック・パラディン……!」

《ブラック・マジシャン》に竜破壊の剣士の鎧が装備され、その杖も《バスター・ブレイダー》の剣が融合し一体化している。

まさしくこれがドラゴンキラーの姿だろう。

「ブラック・パラディンはお互いのフィールド、墓地に存在するドラゴン族の数だけ攻撃力を500アップする！俺と遊馬の墓地には5体のドラゴンがいる！」

『つまり攻撃力は5400……!』

「ビヨンド・ザ・ホープを上回った！」

確かにビヨンド・ザ・ホープは攻撃する時、相手のモンスターの攻撃力を0にする効果を持っている。

だがそれはあくまで自身が攻撃する時、限定だ。

それに対抗するならば簡単だ。

それ以上の攻撃力を持ったモンスターで攻撃すればいいだけの話。

そして遊里はあっさりとそれを叶えたのだ。

「遊馬、アストラル……」

「遊里……」

竜破壊の力を得た黒魔導師、《超魔導剣士―ブラック・パラディン》。

全ての希望を束ねた皇、《No. 39 希望皇ビヨンド・ザ・ホープ》。

それを従えた遊里とZEXALが向き合う。

お互いが直感で悟っていた。

この攻撃が全ての決着をつけるだろうと。

お互い、残っているのは遊里は手札が1枚。ZEXALはセットカードが1枚。

この1枚ずつのカードで全ての決着がつかうとしていた。

「行くぜ！バトル！ブラック・パラディンでビヨンド・ザ・ホープを攻撃！」

竜破壊の剣を振るい、攻撃を仕掛けたのはブラック・パラディン。

すぐさま6振りの剣を操り迎撃するビヨンド・ザ・ホープ。

振り下ろされる竜破壊剣を6本剣で押さえ込む。

だがその攻撃力は圧倒的にブラック・パラディンの方が上。

その力に圧倒されていく。

確かにビヨンド・ザ・ホープにはナンバーズでしか戦闘破壊されない効果を持っているが、ZEXALのライフは僅か1。

ダメージさえ通ればその時点で遊里の勝ちなのだ。

だがそれを補うのがデュエリストの役目。

そしてこれがZEXALのラストカード！

『畏発動！《聖なる鎧——ミラーメール——！》』

「それは—」

聖なる鎧がビヨンド・ザ・ホープに装備されていく。

それは鏡のような鎧は相手を写していく。

「自分フィールド上の攻撃表示モンスターが攻撃された時、発動できる！」

『攻撃されたモンスターは攻撃してきたモンスターの攻撃力と同じになる！』

「相打ち狙いか！」

攻撃力3000であった、ビヨンド・ザ・ホープの攻撃力がブラック・パラディンと同じ4900に変わる。

このままでは相打ち。

だがそこで活躍するのがナンバーズ特有の戦闘耐性である。

「同じ攻撃力でも破壊されるのはブラック・パラディンだけだ！」

「くっ！」

遊馬の言う通りである。

攻撃力が同じなら戦闘破壊されるのはあくまでブラック・パラディンのみ。

そうなれば遊馬の場は文字通りがら空きになり、次のターンの攻撃で遊馬達の勝ちになる。

『そしてブラック・パラディンの効果で無効に出来るのはあくまで魔法のみ！』

「畏なら無効にはできない！」

押されていたビヨンド・ザ・ホープが聖なる鎧の力を得て、ブラック・パラディンを弾き飛ばす。

上空へと退避したブラック・パラディンはすぐさま魔法攻撃をばら撒くが、その程度の攻撃でビヨンド・ザ・ホープが止まる筈もない。

ブラック・パラディンよりも高く、高く、空へと飛んだビヨンド・ザ・ホープの剣が

1つへと収束していく。

この一撃こそが希望の光。

「こいつで終わりだあ！天地神明にオレは誓う！未来をつかむために闘い抜くと！輝け、希望の光！ホープ剣・ビヨンドスラッシュュ!!」

そしてブラック・パラディンへと振り下ろされる時。

2人は見た。

遊里が笑っているのを。

その笑みはやりきった時でもなければ、疲れた時に見せるような表情などではない。

それは勝ちを確信した時の笑みだ。

そしてそれをすぐに理解する事になった。

ビヨンド・ザ・ホープの攻撃をブラック・パラディンはその剣で止めたのだ。

「なっ!」

『何っ!?!』

「俺も攻撃宣言時、こいつを発動していたのさ。速攻魔法《決闘融合―バトル・フュージョン》!俺の融合モンスターが攻撃宣言した時、相手モンスターの攻撃力を融合モンスターに加えるカード!」

「な、なんだって!?!」

《超魔導剣士―ブラック・パラディン》がビヨンド・ザ・ホープを捌ききると、その剣に魔力を集中させていく。

自身の力だけではない相手の強大な力を利用した一撃。

「そして俺の《決闘融合―バトル・フュージョン》の発動に対して《聖なる鎧―ミラーメール―》した事になる。つまり先に攻撃力が上がるのはビヨンド・ザ・ホープ。そしてその後にその力をブラック・パラディンが吸収する！」

チェーンの処理により、《聖なる鎧―ミラーメール―》でビヨンド・ザ・ホープの攻撃力がブラック・パラディンと同じになり、その後にブラック・パラディンの攻撃力はビヨンド・ザ・ホープの攻撃力を足した数字になる。

その結果、ビヨンド・ザ・ホープの攻撃力は5400。

逆にブラック・パラディンの攻撃力は10800となったのだ。

「これで本当に終わりだ！ 《超魔導剣士―ブラック・パラディン》の最後の―一撃―！
剣に蓄えられた魔力が一気に放出される。

これが最後の―一撃。―

「超・魔・導・烈・波・斬!!!」

全てを切り裂く最後の―一撃。―

それがまさに炸裂したのだ。

勝者……青山遊里。

「……負けたかあ」

「勝ったぜ」

道路に遊馬と遊里が倒れこむ。

長いデュエルだった。

だがそれは2人に達成感と程良い疲れを与えていた。

「……なあ、遊里」

「んー、どうした遊馬？」

「デュエルって……楽しいな」

「……ああ」

偽りのない気持ち。

本当に楽しかった。

『しかしZEXALまでして負けるとは……我々もまだまだだな遊馬』

「ああ。オレ、もっと強くなる！そして遊里、お前に勝つぜ！」

「いつでもかかってきな」

『どうやら時間のようだ』

「え？」

アストラルの言葉に驚くように起き上がる遊馬。

気がつけば、周りのビルがゆっくりと消え始めているのだ。

まるでデュエルが終わるのを待ってから消えて行くようにも感じられる。

「そうか」

「ま、夢は覚めるもんだから仕方ないさ。明日、また会えるだろう」

「そうだよな」

だが会えるのは遊馬と遊里だけ。

アストラルは元の世界に戻っているだろう。

事実、アストラルの体もまた少しずつ消えていく。

「アストラル」

『どうした遊里？』

「またな」

そんな遊里の言葉に驚くアストラル。

またな。

それは再会を願う言葉。

それをかみ締めるように目を閉じると、アストラルもまた返した。

『ああ、まただ。……遊馬』

「おう」

『また、どこかで会おう。我々は繋がっているのだから』

「ああ！オレ達はいつだって一緒だ。たとえ離れていてもきつと！」

『ああー！』

こうしてアストラルの姿は消えていった。

元の世界に戻ったのだろう。

そして次は遊馬の番だ。

「遊里」

「ん」

「また明日な」

「おう」

たったそれだけ言葉を交わす。

いや、気持ちいい音が鳴り響き。

2人がハイタッチをした音だ。

そして遊馬もまた消えていった。

残されたのは遊里のみ。

「……いるんだろ、カミサマさん」

——気がついていましたか。

遊里が振り向いた先にいたのはぼやけて輪郭がうまく見えない誰かがいる。声質からすると女性だろうか。

「ありがとうよ。あの2人とデュエルさせてくれて」

——礼には及びません。それが貴方との契約でしたから。

「覚えてないんだけどねえ、俺」

カミサマの言葉に困ったように呟く遊里。

「……んじやとつとと回収してくれ」

——……いらないのですか？

「ああ」

遊里の言葉に驚いた様子を見せるカミサマ。

一体何を回収するというのか。

「俺はいらないよ。『望んだカードをドロ―できる力』なんて」

そう。

これこそが遊里が感じ取っていた違和感。

遊里が持っている筈のない力。

——ですがそれはあの世界の人々なら当たり前に持っているもの。これを手に入れて初めて貴方もあの世界に馴染むのですが。

「でもそれを持つたら、もう俺のデュエルはできない」

遊戯王世界の住人が当たり前のようにつ力。

でなければあんなハイランダーなデッキを回せる筈もない。

だけどいらぬい。

青山遊里にはいらぬいのだ。

「確かに今のデュエルはアニメみたいでかつこよかつたし、楽しかつた。でもあれは俺のデュエルじゃないからな」

青山遊里に望んだカードをドローする力なんてない。

だけどそれが当たり前で普通なのだ。

今更、そんな力を貰っても困るだけ。

あんなのはアニメだけで十分だ。アニメ世界にいるが。

——そうですか。わかりました回収しますね。

「おう」

遊里の体から光の球が抜け落ちてカミサマの元へと戻っていく。

これで遊里はいつものへっぽこドロロー力に戻った訳だ。

「……さっきの街は東京か」

——はい。

「そっか……」

——元の世界に戻る事も可能ですが。

カミサマのそんな言葉に遊里は目を閉じる。

元の世界に帰れる。

それは確かに魅力的だろう。

だけど。

「待ってる人がいる。だから俺はここで生きて行くよ」

——そうですか。

遊里にはなんとなくカミサマが笑ったような気がした。

——体に気をつけて。

「ああ、ありがとう」

それだけ言葉をかわすと遊里も夢の世界から帰っていった。

今、帰るべき場所に。

——頑張ってください、ね。

それは未来に繋がる話

そしてあの日から数ヶ月が経った。

遊馬はいつも通りの日常を謳歌している。

変わった事と言えば、やはり神代凌牙や天城カイトをはじめとするあの戦いで犠牲になつた人々が帰ってきたという事だろうか。

バリアン七皇も人間として蘇り、学生になつたり研究者になつたりとそれぞれの道を歩み始めている。

遊里もまた日常に戻っていた。

いつも通り、デュエルを楽しみ、挑んでくる連中を返り討ちにしたりしていたりする。そして今日、遊里は学園を卒業する事になつた。愛華も一緒である。

進学先は色々悩んだのだろうが、結局デュエルアカデミアに進学を決めた。

両親がそちらの道を望んでいたのもあつたが、本人にもやりたい事が出来たらしい。

そして進学するのはデュエルアカデミアの本校だ。

孤島にあり、非常に厳しく大変な所だと聞いている。

だが遊馬や凌牙達は誰も心配はしていなかった。

遊里がそんな学園で折れるという事はないだろうと思っていたからだ。

それに愛華も何かしら思う所があったのか、遊里と同じくアカデミアの進学を決めていた。

普通の学園に進学すると思っていたものだから、遊里も驚いていたのを覚えている。しかし愛華もまた有力なデュエリストなのだ。

女性陣ではトップクラスだし、遊里の手ほどきを受けていたのだ。弱い訳がない。その遊里も未だに負け星は非常に少ない。

なんとか凌牙や遊馬、カイトと言ったメンバーが1、2勝出来たぐらいなのだから。そして遊里と愛華が旅立つ事になり、あつという間にアカデミアに向かう船へと乗り込んでいた。

「あー、風が気持ちいい」

「本当ですわね……」

船の甲板で空を見上げる2人。

今日は運もよく快晴である。

何処を見渡しても雲一つない蒼穹が広がっていた。

「しかし愛華もアカデミアに来るとは思わなかった」

「ふふ、わたくしも色々考えたのですわ」

困ったような遊里の言葉に愛華が微笑む。

しかし遊里は未だに愛華がどうしてアカデミアに進学する事を決めたのか聞いてなかった事を思い出した。

準備で忙しかった、というのもあつたがのらりくらりと答えるのをよけられていたよ
うな気がしていた。

そろそろ教えてくれてもいいんじゃないかと思つたが、素直に答えてくれるだろうか
とも思う。

「なあ、愛華」

「そういえば遊里。最後に小鳥さんに渡していたあの大きな箱はなんだつたんですの
？」

いざ質問、という所で愛華が逆に質問してくる為、出鼻を挫かれる。

おのれ！と思いつつも遊里は律儀に質問に答える事にした。

「あー、うん」

しかし何処か答えにくそうな様子である。

一体何を渡したというのか。

「変なものじゃありませんわよね？」

「ああ……」

んー、と腕を組んで考え出す。

それを見て何を渡したのやら、と愛華は思っているとポツリと遊里が言葉を発した。

「カード」

「へ？」

「あいつらにぴったりのカードさ」

ぴったりなカードとはなんだろうか、と思うがその瞬間、手持ちのDゲイザーから着信音が鳴り響く。

一体誰からだ、と思うと連絡してきたのは小鳥だ。

いった何の用なのだろうかと思ひ、連絡しようとする横から遊里の手が伸びて愛華のDゲイザーを奪い取ってしまった。

「ゆ、遊里?!」

「暫く連絡しないでくれ、頼むから」

困ったような遊里の表情にやはり何かあるな、と愛華は思う。

奪い返そうと息をまこうとした時、再び遊里がポツリと言葉を発した。

「変な物は渡してないよ」

「……遊里？」

「さっきも言ったけどあいつらにぴったりのカードさ」

愛華は知るよしもないが、小鳥の手に渡された箱の中に入っていたのはナンバーズだ。

ホープやシャーク・ドレイク、更には銀河眼の光子竜皇、S・H・Ark King htといったオーバーハンドレッドナンバーズ、カオス化したモンスター達もだ。

勿論これはアストラルが持つオリジナルなどではなく遊里が持っていたOCGカードな訳だが。

その為、特殊な力などはないので、安心して使えるカード達である。

中に入れておいた手紙には好きに使えと書いておいたのだが気に食わなかったのかなあ、とさつきから引つ切り無しに連絡が来ているDゲイザーから目をそらしながらそう思った。

真相は何でこれを持つてるんだ、この野郎とかなんで効果が違うんだこの野郎とか色々あるに違いない。

だが今は答える気はなかった。

とりあえず遊馬にだけはメールを送っておこう。

知りたきや俺に勝ってみろ、と。

そんな遊里の様子に愛華は困ったもんだとため息だけ吐くと遊里の傍による。

なんとなく傍にいたいな、と思っただからだ。

「遊里は……どうしてアカデミアに？」

「ん、そんなにおかしいか？」

「正直、遊里が行くとは思っていませんでした」

「あー」

元々遊里は今のデュエリストはたいした事がないという評価を下していた。

最近では凌牙や遊馬と言ったデュエリストと楽しくやっているようだが、一時期本当につまらなそうにしていた事があるのだ。

そんな中、アカデミアに行くとはあまり思えなかつたのだ。

「デュエルアカデミアを卒業しないと資格が取れないからな」

「資格……？」

「ああ。卒業したら先生になろうと思うんだ、デュエルの」

「先生ですか……」

「周りが弱いなら、俺が育てればいい。未だに変わってないよ、この思いは」

そして楽しいデュエルをする。

確かに遊里は愛華にデュエルを教える時、そんな事を言っていた事を思い出す。

「そしたらきつと俺よりも強い奴がいっぱいいるようになるさ」

「遊里、らしいですね」

きっと遊里は満足の行くデュエルがしたいのだろう。

だからその道を選んだに違いない。

「んで、愛華は？」

「え？」

「愛華はどうしてアカデミアに？」

遊里の素直な疑問であった。

花添愛華は確かに遊里にデュエルを教え込まれたが、そちらの道に進むとは思っていなかったのだ。

彼女には他に沢山の道があっただろう。

「……分かりませんか？」

「え？」

「貴方の傍にいたかった……からでは駄目ですか」

そんな愛華の言葉を聞いて固まってしまう遊里。

まさかそんな言葉を言われるとは思ってもしなかったのだろう。

暫くうーん、と悩む頭を掻き毟ると、愛華に向き直る。

「……マジで？」

「マジですわ」

冗談抜きの真顔で発せられる言葉に絶句する遊里。

好意を持たれているという自覚はあったがまさかそこまでは思ってもいなかったのだらう。

真剣な表情になり、息を整えると遊里は愛華の正面に立つ。

「……俺、結構なデユエル馬鹿だぞ」

「知ってますわ。それでもいいんですの」

「恋愛とか実はよく分らないんだ」

「それでもわたくしは貴方の隣にいたいんです」

本気である。

これ以上にならないレベルの本気である。

「……なあ、愛華」

「どうしました遊里」

すつと遊里は愛華の手を握る。

愛華は驚いた表情を見せるが、すぐに穏やかな表情になると、すつと遊里の手を握りなおした。

「これからもよろしくな愛華」

「はい」

答えはそれだけであった。

でもそれで十分なのだろう、この2人には。

きっとこれからも大変な事があるだろう。

また今回のような世界の命運をかけた事件に巻き込まれるかもしれない。

だけど大丈夫だ。

こんなにも己を思ってくれる人が隣にいるのだから。

それは未来へ繋がる剣

青山遊里と花添愛華がデュエルアカデミアに旅立つてから2日。

九十九遊馬の家には珍しくというか奇妙な事に沢山の人影があった。

遊馬は勿論、幼馴染の小鳥や友人の鉄男、キャット、委員長、徳之助のナンバーズクラブのメンバー。

凌牙や璃緒、ドルベ、アイト、ギラグ、ミザエル、ベクターなどの七皇組み。

カイトにIⅤ、IⅠI、Vなどのメンバーまでぎっしり揃っているのだ珍しいと言わずしてなんと言うかそんなレベルであった。

ではどうしてこんなにも人が遊馬の家に集まっているのか。

その原因は遊里にあった。

小鳥が遊里が旅立つ直前に渡された少し大きめの箱。

それを今いるメンバーが揃った時に開けて欲しいと頼まれていたからだ。

色々と奇妙な願いではあったものの、小鳥は了承。

全員に連絡を取り、こうして集まったのが今日なのである。

「しかし遊里の野郎、一体何を置いていきやがったんだ」

遊里が残していったという箱を睨みつける凌牙。

結局、遊里が卒業するまでに勝てた回数が一桁だった事に苛立っているのかもしれない。

「それにこれだけのメンバーを集めてから開けるとは奇妙な話だな」

近くのソファに座っていたカイトも箱を見ながら呟いた。

「うーん、遊里さんは卒業生から在校生に送る品、とか言つてたけどなあ」

「それなら尚更奇妙ですわね。私達はともかくⅠⅤ達は関係ないじゃないですか」

鉄男の言葉に璃緒が答える。

卒業生から在校生というのは分からなくもないが、それならば在校生に当てはまらないメンバーが多すぎる。

「だよな。俺達は青山遊里とは接点が全然ないぜ」

「確かにな」

ⅠⅤとⅤが頷く。

あの事件の後、学園に通い出したⅠⅠⅠはともかくⅠⅤとⅤはまるで接点がない。

だと言うのに今日呼ばれたメンバーに入っているのはどういう事なのだろうか。

「そーいやギラグは今何やってんだ？」

「遊馬の師匠の六十郎の爺さんと一緒に色々とな」

床に座って茶を飲んでいるアリトの言葉にギラグが答えた。

人間として蘇ったギラグは学園の生徒になる事はなく決闘庵に居候して、歴史を調べたりしているのだ。

因みに学園の生徒になったのはドルベとアリト、ベクターのみ。

ミザエルはドラゴン伝説を調べる為にカイトの研究室に居候させてもらっている状態だ。

「それじゃあそろそろ開けまーすー！」

「何が入ってるんだろうな!？」

近況の情報交換から、遊里の野郎は鬼畜すぎるだろなどの愚痴大会の中、箱を弄っていた小鳥と遊馬から声がかかる。

遊馬と小鳥にはいい物が入っている、とだけ遊里が伝えておいたので期待値は非常に高い。

特に遊馬は何かカードなんじゃないかと思っている。

それはあの夢の中で行ったデュエルと関係していたりするのだが。

2人の周りにゾロゾロと集まってくる。

皆、不審がつている部分はあるものの、中身には興味があるのだ。

全員の視線の先には包装紙が取られたシンプルな箱が1つ。

その蓋がようやく開けられようとしていた。

「行きますー！」

小鳥の掛け声と共に箱の蓋が開けられる。

すると遊馬の予想通り、そこにはカードが収められていた。

スリーブで二重、三重に梱包されたカード。

非常に高価なのか、と思つて視線が集中した時、ようやくこの場にいる全員が気がついたので。

「え？」

「は？」

「……なっ!？」

「なん……だと……!？」

そのカードの正体に気づいたメンバー全員が思わずといった声を漏らす。

それは当然の事だ。

これを見て驚かない方がおかしい。

「……ホープ？」

遊馬の呆然とした声が全てを物語っていた。

《No. 39 希望皇ホープ》。

遊馬とアストラルの始まりのナンバーズが箱に入っていたのだ。

だが本物のホープは既にアストラルの手に戻り、アストラルは元の世界に帰還している。

だというのにどうしてここにホープがあるのだろうか。

しかもホープだけではなかった。

呆然とカードを手に取った遊馬。

小鳥がその下に他にも沢山のカードが入っている事に気づいたのだ。

そして思わず、ぶちまけるように小鳥が箱の中をひっくり返す。

すると箱から大量のカードが出てくるのだが、そのカード達を見てやはり呆然とするみんな。

「シヤ、シヤーク・ドレイク……!」

「《No. 62 銀河眼の光子竜皇》……!」

「お、おい! オーバーハンドレッドナンバーズまであるぞ!」

それぞれ縁のあるカードを手にとって驚愕の声を漏らしていく。

ナンバーズは勿論の事だが、ドン・サウザンドの力が消滅した事により消滅した筈のオーバーハンドレッドナンバーズまでもがそこにあるのだ、驚愕するしかない。

「お、おい兄貴!」

「……何の力も感じられない。これはただのカードだ」

「ただのカード、ですか。V兄様」

I Vの慌てた声に反応してVがポツリと漏らす。

IIIもまた《N O. 6 先史遺産アトランタル》を手に取りながら、Vの話聞いていた。

Vは《N O. 9 天蓋星ダイソン・スフィア》からはナンバーズ特有の力が何も感じられなかった。

それだけではない。

どのナンバーズからも力が感じられない。

まるでそこらの店で買えるような普通のカード達だ。

それだけではない違和感まで感じられるのだが、それが何かはVには分からなかった。

「……一つ気づいたのですけれど、このカード達、効果が微妙に違いますか?」

「え?」

璃緒の言葉に全員が一齐に手に握っていたカードに目を落とす。

ぱつと見では同じように見える。

見えるのだが。

「あーっ！ナンバーズでしか戦闘破壊されない効果がついてない！」
「何っ!?!」

遊馬の叫び声に全員が再び、カード効果に目を通す。

これこそが違和感の正体。

どのナンバーズにもこのカードは「No.」と名のつくモンスター以外との戦闘では破壊されないという一文がないのだ。

これでは普通のモンスター相手にも戦闘破壊されてしまう。

それだけではない。

「おい、アビス・スプラッシュの効果が酷い事になってるんだが……」

「なんかセスタスが強化されてるぞ」

一部のカードを除けば微妙に効果が弱体化しているのだ。

まるで一般用に調整されたと言わんばかりだ。

「ランクアップマジックまであるウラ」

「カオスナンバーズのカードもありますね」

ただのナンバーズ以外にもカオス化したカードや、バリアンズ・フォースなどのランクアップマジックまで入っている。

わけがわからないよ、とばかりに大混乱に陥る。

「おい、誰か遊里の奴に連絡して聞いてみればいい」

「もうやってるけど、出ないんだよ」

この事態を打開出来そうなのはやはり遊里本人に聞いたただす事だろう。

が、出る様子がない。

まるで説明するのを拒んでいるようだ。

「うーん、愛華さんも出ないなあ」

「遊里に止められてる可能性がありませんね」

ならばと、小鳥と璃緒が傍にいる筈の愛華に連絡してみるがこちらも応答なし。

遊里に言われて連絡を取らないようにしている可能性が高い。

それぞれ、あーだこーだとナンバーズ達を見て議論していると遊馬のDゲイザーに通のメールが届く。

送り主は青山遊里。

慌てて遊馬がメールを開いてみると、そこにはたった一言だけ書かれていた。

『知りたきゃ俺に勝ってみろ』

はは、と遊馬に笑みが浮かぶ。

遊里らしいな、と思っただからだ。

「遊馬、これ」

「小鳥？」

「遊里先輩からの手紙」

2人で手紙を開いてみると、こちらもたった一言だけ。

『好きに使え』

なんともシンプルな内容である。

つまり、このカード達を使つて俺を倒しに来い、と言っているのだろう。

やはり遊里らしい内容だ。

「先輩らしいね」

「ああ」

「でも先輩、これを何処で手に入れてきたんだらう？」

小鳥が首をひねるが、遊馬は遊里だから、と納得していた。

あの夢世界でのデュエル。

自分達が知らない召喚方法である、シンクロやペンデュラムを見せ付けてくれた遊里だ。

実はナンバーズを持っていたと言われても何故かしくりくる。

だがやはり答えて貰わないと納得できそうにない。

「小鳥」

「どうしたの遊馬?」

「俺、強くなるよ。遊里を何度も倒せるように」

「負けっぱなしだもんね、遊馬」

笑みが自然と浮かぶ。

沢山聞きたい事が出来た。

だからそれを聞きにいこう。

遊里の前に立てる程、強くなって。

「バリアンズ・フォースも弱体化してないか、これ!？」

「見ろ、カイト! 《ギヤラクシーアイズ FA・フォトン・ドラゴン》なんてカードがあるぞー!」

「なんだと!!」

「俺のディザスター・レオのバーンダメージが1000になっている件について」

「この《No. 63 おしやもじソルジャー》で料理の腕は上がるのか!？」

「上がらないんじゃないかなあ……」

「うおおおっ! ライオンハートも強化されてるぜ!」

「アリトだけなんかずるくねーか!？」

「わ、私のグローリアス・ヒーローが……」

「そういえば普通のカードって事は俺達にも使えるのか？」

「トドのつまり僕達もナンバーズ使いに!？」

みんなそれぞれカードを見て色々と反応している。

どうやら使うにしても一度、効果の再確認をしないとイケないようだ。

「おーい、みんな！遊里が自分を倒したら教えてくれるってさ！後、カードは好きに使っていいって！」

遊里の言葉に全員が目の色を変える。

このカードを使って俺を倒しに来いという遊里のメッセージに気がついたらしい。

その目にはリベンジの色に染まっている。

「へへ、勝ってやろうじゃないか！」

「ああ、あの時のリベンジをしてやるぜ！」

「今度こそ勝つ……！」

「なら今から行こうぜ、兄貴！」

「あちらに迷惑がかかる可能性が高いが……」

「それに効果の確認とデッキの再構築をしないと駄目でしょうね」

今にもアカデミアに乗りこんでデュエルしそうな雰囲気である。

そんな様子を見ながら遊馬もまた戦意が高揚していた。

遊里とデュエルする。

それはきつと楽しいものになるだろう。

そしてまた追い詰めれば、またあのシンクロやペンデュラムが見られるかもしれない。
い。

(へへ、待ってろよ遊里！)

いつになるか分からないが、きつとまたデュエルをしに行く。

アカデミアに旅立った遊里に向かってメールを送る。

いつかデュエルをしに行く、と。

それはきつと大変な事だろうし、遊里に勝つ事も大変だろう。

だけど大丈夫だ。

こんなにも沢山の仲間達と傍に自分を見てくれる人がいればきつとなんだって
乗り越えられる気がしたからだ。

だからいつもの言葉をかける。

それがきつと未来へ繋がる言葉と信じて。

「かつとビングだ、俺！」

嘘予告 新たな戦い

アストラルがこの世界から去ってから数ヶ月。

青山遊里は花添愛華と共に新しい場所へ旅立ち、九十九遊馬達は少しだけ変わったがいつもの日常を過ごしていた。

遊里から託されたカード達を使って新しいデツキを構築し、遊里を倒し未来のデュエル・チャンピオンを目指してデュエルの腕を磨いていた。

しかしそんな中、仲間である天城カイトから齎されたある情報に彼等の戦いの歯車が再び動き出す事になる。

「アストラル世界に新たな危機が迫っている」

「な、なんだって!？」

ヌメロン・コードによりアストラル世界とバリアン世界は一つへと戻っていった。

しかしそれは新たな戦いの始まりでもある。

カオスを受け入れた事により、その力を使い世界を壊そうとするモノが現れたのだ。

「あいつには大きな借りがある」

かつてバリアン世界のリーダーであつた神代凌牙。

いや、それだけではない。

I VやI I I、Vのトロン兄弟は勿論、バリアン七皇であつたドルベ、アリト、ギラ
グ、ミザエル、ベクター達もアストラル世界の危機に立ち上がったのだ。

そしてもう一人。

デュエル・アカデミアへと旅立つた青山遊里達にもその情報が齎される。

「誰も知らない物語。なら俺が動いても問題ないな」

遊里もまたアストラル世界を救うべく立ち上がる。

だがそんな彼の前に現れたのは、電子の戦士。

アストラル世界を破壊すべく動き出したモノの刺客として遊里の前に現れたのだ。

「私の名はサンダー・スパーク。スピードの世界に生きる者。青山遊里。我が主の願

の為、貴様を倒しに来た」

その名の如く、雷の如く放たれる彼のフィール。
しかし遊里は笑みを崩さない。

「誰であろうと関係ない。俺はお前を倒してあいつらを助けに行く！」
「ならば来るがいい！私のスピードを抜けるのならば！」

遊里が新たな敵とデュエルをするように、遊馬達の前にも敵の刺客が現れていた。

「私はアストラル世界侵攻作戦、第一司令官イビルリーダー！お前達をアストラル世界には行かせません！」

アストラル世界へと移動しようとした時に現れたモヒカン男。

異世界移動を邪魔せんと無数の配下を連れ、遊馬達の前に立ち塞がってきた。
あまりの数を前にピンチに陥るが、それを打開したのは一人の仲間であった。

「行けよ遊馬！ここはオレに任せろ！」

「鉄男!？」

「行つてアストラル世界を救つてこい！」

武田鉄男。

遊馬にとつて腐れ縁の友人。

何度も喧嘩したが、ここ一番の時に助けてくれた仲間。

それがまた再び遊馬達を助けたのだ。

「ただの人間如きがこの私を止めると言うのか！」

「舐めるなよ！オレだつて強くなつたんだ！」

鉄男の手助けもありアストラル世界へとやってこれた遊馬達。

だが彼等の前に無数の刺客が襲い掛かってきた。

「我輩はキャプテン・コーン！偉大なる海賊王であるコーン！」

「邪魔するなよ海賊王！オレはアストラルを助けに行くんだ！」

大海賊の魂を受け継ぎトウモロコシから生まれたという海賊が立ちはだかる時、再び希望の皇が蘇る。

「ようこそ人形の家へ。あの方の命令。貴方達を先に行かせる訳にはいかない」
「ハッ、随分と暗い雰囲気じゃねえか！」

「五月蠅い！」

「なら見せてやるぜ！俺様のファンサービスをよお！」

人形姫が相手に立ち塞がるならば、それに相對するのは人形遣い。

「オレの名は飛車角!!我が一手で貴様達を地獄に送ってくれる」

「ふん！雑魚に構っている暇などない！狩らせてもらう！お前の魂を！」

和装棋士の一手が全てを焼き尽くさんとすれば、それを狩り取るのは光のドラゴン。

「貴様等の運命はここまでだ！そして全てをいたぶりながら葬ってやる！」

「その腐った性根！お前だけは許さねえ！」

一撃。
暗黒の忍びが全てを葬りさろうと暗躍するならば、それを打ち砕くのは孤高なる鯨の

「待っている、アストラル！」

刺客を退け、仲間達の助けもありアストラルの元へと急ぐ遊馬、凌牙、カイトの三人。
だが……。

「遅かったな。既にアストラルは我が取り込んだ」

「き、貴様は!？」

そこにいたのはアストラルではなく、女性の姿をした絶望の神。
そして助ける筈のアストラルは彼女に取り込まれたという。

「我が名はe・ラー。お前達の希望を消し去る絶望の神……！」

そして彼女の口から語られる衝撃の真実。

「我は幾つかの呪いお前達にかけた」

「ま、まさか……！」

今までの戦いは決して偶然から起きたものではない。

そう。

あのドン・サウザントですら、彼女によって操られた存在でしかないという。

つまり、あの戦い全てが彼女の掌で踊っていただけなのか。

だがそんな絶望を前にしても屈する事などない。

「しかしアストラルは我が取り込んだ。そしてお前達が持つN.O.は所詮コピー。そんなもので我を倒すといのか」

「こいつはコピーなんかじゃない！あいつが！遊里が俺達に託してくれた未来への希望だ！」

信じている。

アストラル世界には来ていない遊里の事を信じている。

その言葉に反応し、遊馬達のカードはあらたなる真化を果たす。

「見せてやる！俺の希望を！眠りし大地と海の力が紡がれしとき新たな命の光が噴出する！エクシーズ召喚！目覚めよNo. 37！希望織竜スパイダー・シャーク！」

「俺達の希望は貴様の絶望になぞ負けん！我が記憶に眠る二つの希望！その希望を隔てし闇の大河を貫き今その力が一つとなる！エクシーズ召喚!!!現れるNo. 38!!希望魁竜タイタニック・ギヤラクシー!!!」

「負ける訳には行かないぜ!!一粒の希望よ！今、電光石火の雷となつて闇から飛び立て!!現れる、Sno. 39 希望皇ホープ・ザ・ライトニング!!」

遊里から託されたカードを真化させた三人。

だがそれでも絶望の神を倒すまでには辿り着かない。

「言つた筈だ。我を倒す事など出来ない、と」

傷つき、倒れそうになる。

しかし彼等には託された思いがある。願いがあつた。希望があつた。そんな遊馬達を助けたのは地球に取り残されていた彼であつた。

「待たせたな！」

「馬鹿な！貴様は!?!」

「遅いぞ！」

「遅刻するんじゃないぞ！」

「遊里!!」

遊馬、凌牙、カイト、そして遊里の四人が揃つた時、その希望が全てを繋げていく。

「馬鹿な！光の神官、海の神官、空の神官、そして陸の神官が揃つたとしてもいいのか!?!」
「e・ラー！見せてやる！俺達四人のかつとピングを！」

遊馬が、凌牙、カイトが、遊里が光となり一つへと形を変えて行く。

「オレ達四人でオーバレイ・ネットワークを構築！」

「なん……だと……!?」

『全ての願いが一つになる時、新たな希望が未来を作り出す！エクシース・チェンジ！
ホープ・ZEAXL!!!』

四人の願いと想いが形となり新たな進化を果たしたZEAXL。
それが絶望の神を打ち砕かんと出現したのだ。

『行くぞ！e・ラー!!オレ達の想いを！願いを！希望を！』

希望と絶望。

相反する二つの最終決戦が今、始まるのであった。